

山梨県中央市

## 平田宮第2遺跡（2・3次調査）

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2008

中央市教育委員会  
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

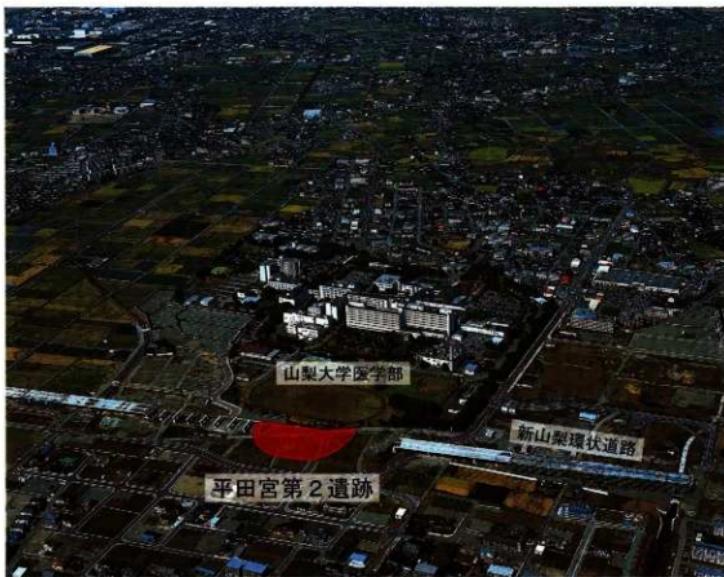
山梨県中央市

## 平田宮第2遺跡（2・3次調査）

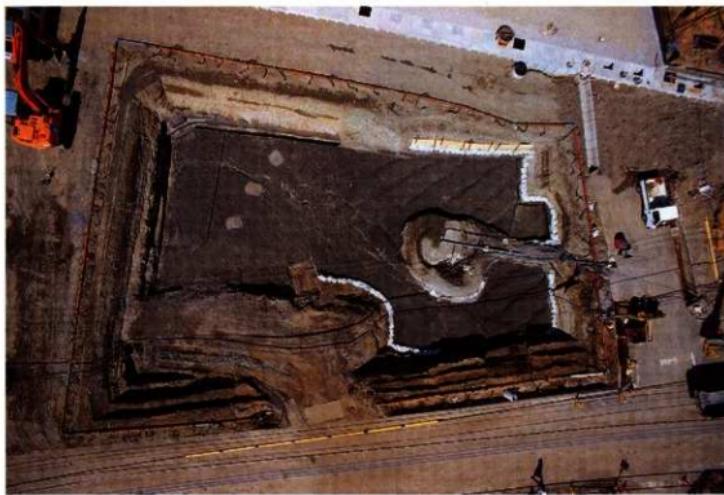
新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2008

中央市教育委員会  
山梨県新環状・西関東道路建設事務所



平田宮第2遺跡遠景（南から撮影）



2次調査区 烟跡



2次調査カマド構築材



2次調査出土木製品



3次調査第1面水田跡



3次調査第2・3面集落・烟跡



3次調査 3号住居跡カマド



3次調査 3号住カマド構築材



3次調査 4号住居跡カマド構築材



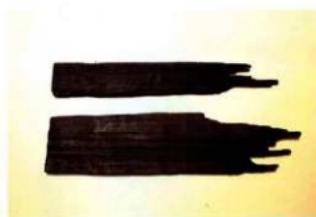
3次調査 4号住居跡出土木製品



3次調査井戸跡



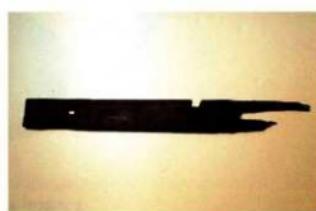
3次調査井戸材 (1)



3次調査井戸材 (2)



3次調査井戸材 (3)



3次調査井戸材 (4)

## 序

本書は、主要地方道韭崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事（新山梨環状道路）に伴う平田宮第2遺跡2次調査及び3次調査の発掘調査報告書です。

中央市は、縄文時代から生活痕跡の確認できる御坂山系の丘陵地帯からなる旧豊富村と、釜無川扇状地の南端部に位置し、長い間洪水常襲地ということから遺跡の空白地帯と考えられてきた旧田富町、玉穂町が合併し、平成18年2月に誕生しました。

近年、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、遺跡の空白地帯とされてきた地域でも、私たちの想像をはるかに超えた先人の足跡が発見されているところです。

平田宮第2遺跡もその一つで、1次調査では、厚い砂層の下から平安時代の集落や畑が発見され、本市で営まれた1,000年前の生活を生き生きと私たちに伝えてくれました。

本書は、さらに多くの情報を得ることができた2次調査及び3次調査の成果を報告するものです。

地中からの歴史の積み重ねは、本市のみならず同様な立地にある地域にとっても、新たな可能性を示す貴重な事例となるはずです。この成果が、多くの方々の調査研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、御指導御協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月31日  
中央市教育委員会  
教育長 比志 保

## 例言

1. 本書は山梨県中央市下河東字平田宮地内に所在する平田宮第2遺跡2次調査及び3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に伴い2次調査を玉穂町教育委員会（現中央市）、3次調査を中央市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は、2次調査が平成17年2月10日～平成17年3月29日、3次調査が平成18年3月1日～7月3日である。
4. 本書は、今村直樹（中央市教育委員会）が執筆・編集を行った。
5. 本書にかかる出土品・記録図面・写真等は、中央市教育委員会で保管している。
6. 航空写真撮影及び写真測量は、（株）東京航業研究所に委託した。
7. 発掘調査に係る国土座標測量・グリッド設定は、（有）コスマ設計企画に委託した。
8. 自然科学分析については（株）パリノ・サーヴェイに委託した。
9. 出土木製品の一部実測は、（有）松風実測部門ツールアートに委託した。
10. 出土木製品の一部保存処理は、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
11. 発掘調査から報告書作成まで、次の諸氏にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。  
(敬称略・五十音順)  
網倉邦生、岡野秀典、後藤聰、小林広和、末木健、内藤和久、畠大介、平野修、渡辺拓美、渡辺康彦

## 凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標系（旧座標）に基づく座標を示す。また、各拵図における方位はそれぞれ記したとおりである。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、5m×5mの方眼を基本としている。
3. 本書における拵図の縮尺は以下の通りである。  
【遺構】 遺跡の位置と範囲 1/25,000 調査区位置図 1/2,000 遺構全体図 1/200  
遺物分布図 1/200、1/100、1/60 遺構平面図・断面図 1/20、1/30、1/60  
【遺物】 土師器・須恵器・灰釉陶器 1/3 石製品 1/3 木製品 1/3、1/5、1/10  
住居跡出土木製品はスクリーントーンで示す。
4. 遺物実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。  
【平面図】 ■ 内面黒色処理 ■ 施釉 ■ 被熱 → 木製品穿孔  
【断面図】 □ 土師器 ■ 須恵器 ■ 灰釉陶器
5. 土層断面図における数値表示は標高を示す。
6. 本書に掲載した遺跡の位置と範囲図は、中央市管内図（1/25,000）を使用した。

# 目次

序

例言・凡例

目次

## 平田宮第2遺跡2次調査

### 第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	1

### 第2章 遺跡の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

### 第3章 層位

第4章 発見された遺構と遺物	4
----------------	---

第1節 不明遺構及び遺物分布状況	5
第2節 煙跡	7

## 平田宮第2遺跡3次調査

### 第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯	16
第2節 発掘調査の概要	16
第3節 調査組織	17

### 第2章 層位

第3章 発見された遺構と遺物	17
----------------	----

第1節 水田跡	18
第2節 住居跡	18
第3節 煙跡・水田跡	21

第4節 井戸跡	21
---------	----

### 自然科学分析

### まとめ

## 図版目次

### (2次調査)

第1図 平田宮第2遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第36図 井戸跡土層断面図	36
第2図 調査区位置図	2	第37図 1号住居跡出土遺物(1)	37
第3図 調査区北壁土層断面図	4	第38図 1号住居跡出土遺物(2)	38
第4図 第1面遺物分布状況	6	第39図 2号住居跡出土遺物(1)	39
第5図 第1面遺物分布拡大図	7	第39図 3号住居跡出土遺物(1)	39
第6図 第1面土層断面図	8	第40図 3号住居跡出土遺物(2)	40
第7図 第2面烟跡	9	第41図 4号住居跡出土遺物(1)	41
第8図 第2面煙跡拡大図	10	第42図 4号住居跡出土遺物(2)	42
第9図 第2面烟断面図	11	第43図 5号住居跡出土遺物	
第10図 2次調査出土遺物(1)	12	第43図 6号住居跡出土遺物(1)	43
第11図 2次調査出土遺物(2)	13	第44図 6号住居跡出土遺物(2)	
第12図 2次調査出土遺物(3)	14	第44図 7号住居跡出土遺物	44
(3次調査)		第45図 2号上坑出土遺物	
第13図 調査区北壁土層断面図	17	非戸跡出土遺物(1)	45
第14図 1面水田跡	22	井戸跡出土遺物(2)	46
第15図 第2面遺構分布図	23	井戸跡出土遺物(3)	47
第16図 1・2号住居跡	24	第48図 井戸跡出土遺物(4)	48
第17図 1号住居跡カマド土層断面図	24	第49図 井戸跡出土遺物(5)	49
第18図 1号住居跡遺物出土状況図	25	第50図 出烟界地	
第19図 1号住居跡カマド土層断面図	25	出土位置不明遺物(1)	50
第20図 2号住居跡遺物出土状況図	26	第51図 出土位置不明遺物(2)	51
第21図 2号住居跡土層断面図	26	第52図 出土位置不明遺物(3)	52
第22図 3・4号住居跡	27	第53図 分析試料採取地点	59
第23図 3・4号住居跡土層断面図	27	第54図 花粉化石群集	60
第24図 3号住居跡遺物出土状況図	28	第55図 植物珪酸体含量	62
第25図 3号住居跡カマド上層断面図	28	第56図 1～3次調査第1面水田跡合成図	74
第26図 4号住居跡遺物出土状況図	29	第57図 1・3次調査第2面集落跡合成図	75
第27図 4号住居跡カマド土層断面図	29	第58図 平田宮第2遺跡	
第28図 5号住居跡遺物出土状況図	30	3次調査検出カマド構築材	76
第29図 6号住居跡	31	第59図 平田宮第2遺跡出土カマド構築材	77
第30図 6号住居跡カマド上層断面図	31	第60図 平田宮第2遺跡出土扇半状木製品	79
第31図 6号住居跡遺物出土状況図	32	第61図 山梨県内出土扇半状木製品	79
第32図 7号住居跡土層断面図	33	第62図 平田宮第2遺跡3次調査出土扇半状木製品	80
第33図 第3面烟跡	34	第63図 1～3次調査第3面烟跡合成図	81
第34図 第3面田畠境界拡大図	35		
第35図 井戸跡	36		

## 表目次

第1表 2次調査出土遺物観察表	15	第8表 分析試料及び分析項目一覧	59
第2表 3次調査出土遺物観察表(1)	53	第9表 花粉分析結果	61
第3表 3次調査出土遺物観察表(2)	54	第10表 植物珪酸体含量	63
第4表 3次調査出土遺物観察表(3)	55	第11表 灰像分析結果	63
第5表 3次調査出土遺物観察表(4)	56	第12表 微細物分析結果	65
第6表 3次調査出土遺物観察表(5)	57	第13表 樹種同定結果	69
第7表 3次調査出土遺物観察表(6)	58	第14表 遺構別・器種別種類構成	70

## 写真図版

写真図版 1～2 2次調査遺構	84～85	写真図版 5～23 3次調査遺構	88～106
写真図版 3～4 2次調査遺物	86～87	写真図版 24～31 3次調査遺物	107～114

## 平田宮第2遺跡2次調査

### 第1章 調査の経緯と概要

#### 第1節 溝査に至る経緯

本報告の発掘調査は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に係わるものである。

主要地方道韮崎南アルプス中央線は、新山梨環状道路の南部区間に当たり、中央市内では、医大南部土地区画整理事業地内中央を東西に横断している。道路建設に先立つ埋蔵文化財調査により、これまで北河原遺跡、上窪遺跡、平田宮第2遺跡で近世から平安時代までの遺構・遺物が報告されている。

特に、上窪遺跡及び平田宮第2遺跡の調査成果は、これまで遺跡の空白地とされていた旧玉穂町にも実は地下深く遺跡は埋没していたということ、しかも古代にまで遡ることを明らかにし、盆地低地域への認識を大きく変えることになった。

そのような中、平田宮第2遺跡1次調査区に隣接する橋梁工事予定地内で平成17年1月に実施した試掘調査では、現地表下約240cmで炭化物の堆積と土器片や被熱した木片を確認した。また、さらに下層では、烟跡を確認したことから、工事主体者である新山梨環状・西関東道路建設事務所と玉穂町教育委員会(現中央市)で埋蔵文化財の取扱いを協議し、試掘調査により遺構の確認された範囲約900m<sup>2</sup>の本調査を実施することになった。

その後、新山梨環状・西関東道路建設事務所長と玉穂町教育委員会教育長は、主要地方道韮崎櫛形豊富線県道橋梁改築工事に伴う「平田宮第2遺跡」発掘調査に関する覚書(平成17年2月7日)を交換し、関係者類を山梨県教育委員会へ提出後、調査に着手した。

発掘調査は、平成17年2月21日から同3月29日までの約1ヶ月間にわたり実施し、整理作業及び調査報告書作成については、別途覚書を交換(平成19年5月1日)した後、平成19年6月18日から平成20年3月31日まで実施した。

#### (事務手続きの概略)

平成17年2月18日 文化財保護法第57条3第1項埋蔵文化財発掘調査の通知

平成17年2月21日 文化財保護法第58条2第1項埋蔵文化財発掘調査の報告

平成17年3月30日 埋蔵文化財の発見届け

発掘調査の終了報告

#### 第2節 発掘調査の概要

平田宮第2遺跡における今回の調査対象範囲は、新山梨環状道路橋脚及び側道建設部分で面積は約900m<sup>2</sup>である。

限られた調査期間であったため、調査区周辺にウェルを設置し、現地表下5mから24時間排水を行い調査環境を確保しつつ、重機により現地表下約240cmの暗灰色砂層まで掘下げた。暗灰色砂層は試掘調査時に炭化物が広がり、遺物も出土した層であったため、第1面として遺構確認作業、検出遺構の精査、記録写真撮影、図化を行った。

第1面の調査終了後、重機によりさらに約50cmを掘下げ、検出した烟跡を第2面として調査を実施した。精査終了後、航空写真撮影及び写真測量を行った。

最後に、下層の遺構の有無をトレチを設定し確認した後埋め戻しを行った。

埋め戻し終了後、ウェルの撤去、現場事務所の撤収を行い調査を終了した。

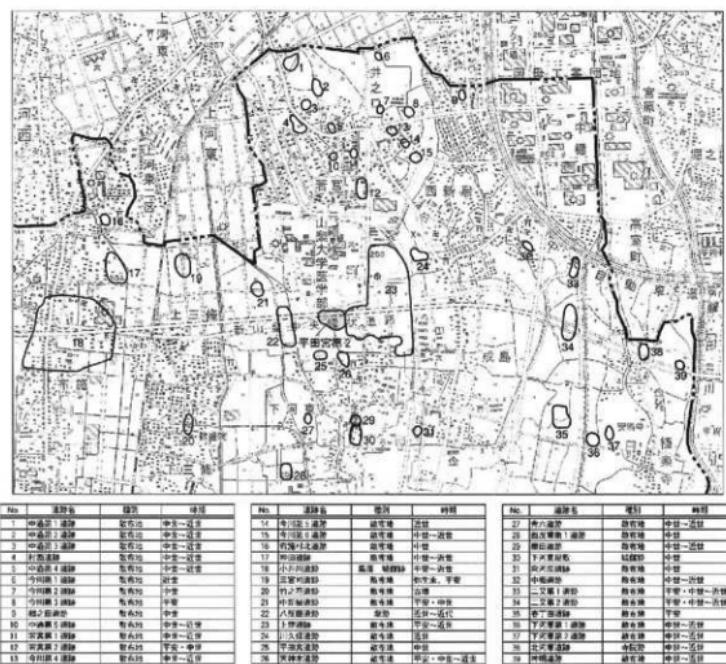
#### 第3節 調査組織

調査主体 玉穂町教育委員会(現中央市教育委員会)

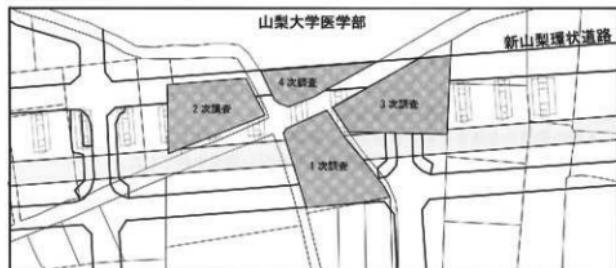
調査担当者 今村直樹（玉穂町教育委員会）

調査参加者 新谷和美 伊藤知子 河西圭子 田中初子 田中ふみ江 中込俊介 名取ゆずみ  
成島喜久美 野呂瀬英臣 依田和美

## 第2章 遺跡の地理的歴史的環境



第1図 平田宮第2遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区位置図(S=1/2,000)

## 第1節 地理的環境

中央市は山梨県のほぼ中央に位置し、釜無川と笛吹川の氾濫原、釜無川扇状地扇端域（旧田富町・玉穂町）と、御坂山塊北斜面の山地、曾根丘陵台地が大部分を占める地域（旧敷富村）の2つの地域からなる。

前者の地域は釜無川ばかりでなく笛吹川や荒川などの河川氾濫の影響を受けた地域であり、地層の多くは河床堆積物に相当する沖積層の砂、砂礫、多少の粘土で構成されている。地表面の標高は245m～265mで南方に向けて若干の傾斜をもち、微高地である自然堤防と低地である氾濫盆地、旧河道で構成されている。現在居住地となっている地域、特に土蔵をもつような古い屋敷地や寺社のほとんどが自然堤防上であり、水田が営まれている地域はほとんどが氾濫盆地である。

後者は標高650m～950mに及ぶ急峻な山地と、それに連なる標高240m～380mのローム層で覆われた曾根丘陵、浅利川流域の平坦地、及び笛吹川流域の沖積地とに分かれる。遺跡の大部分は丘陵上に集中している。

平田宮第2遺跡2・3次調査地点は、市中央北、JR身延線小井川駅より東へ約1km、山梨大学医学部南に位置する。遺跡は山梨大学を中心に南北に伸びる微高地（標高252m）にあり、東は上塙遺跡を挟んで今川（山伏川）に向かってゆっくり傾斜している。西へはほぼ平坦な地形が続くが、上三条地区から傾斜は西へ向かって上るようになり、山之神地区にいたっては標高が255mを越える。

## 第2節 歴史的環境

中央市の初現の遺跡として、横畠遺跡と弥二郎遺跡から旧石器時代のナイフ形石器が出土している。続く縄文時代の遺跡としては、駒平遺跡から中期初頭～後半の住居跡が9軒、横畠遺跡から中期後半の住居跡が検出され、高部宇山遺跡の後期中葉の土坑からは注口十器の完形品が出土している。

弥生時代では、横畠遺跡と弥二郎遺跡から後期の住居跡が3軒ずつ調査されている。古墳時代の遺跡としては、高部宇山平遺跡で前期の方形周溝墓や中期の住居跡が出土しており、また、宇山平の台地上には王塚古墳や伊勢塚古墳、三星院古墳が現存している。

特に王塚古墳は、主体部が朝鮮半島に起源が求められる合掌形石室をもち、武器・武具の副葬品を埋納していたことが昭和5年の地元の人々の掘削でわかつている。この地は先述の古墳時代前期の方形周溝墓が確認されることからも、古墳時代前期から中期にかけての政治的中心地であったのかもしれない。

奈良・平安時代になると、それまで遺物の散布が確認されたのみであった笛吹川右岸にも集落の存在が確認され始める。

上塙遺跡（1・2次調査）ではトレンチ調査により古代水田跡の存在が確認され、生産域が広がっていることが明らかとなった。平田宮第2遺跡（1次調査）では4軒の住居跡が調査され、住戸内から斎寧状の木製品や機械機部材が出土した。また、集落面の下層には洪水砂に埋もれた煙跡が検出されている。

平田宮第2遺跡の位置する下河東の具体的な古代の記録は残っていないが、歎盛院（下三条）には平安時代半ば頃制作の木造薬師如来坐像が、永源寺（下河東）には平安時代後半頃制作の木造聖観音菩薩立像が所蔵されており、古代の要素を有している。

西へ1.3km離れた小井川、布施では、「中右記」元永2年（1119）の記載に布施莊の名が初見され、「安樂寺院等庄園錄案」には、安元2年（1176）に小井川莊が現れる。また、八幡地見神社の再建棟札（文安6年）には、仁安元年（1166）に造立と記されていたことが「甲斐国志」にみえ、鈴鹿神社の再建棟札にも、仁安2年（1167）造立とみえる。

また、市河郷の中心が市北東部に求められる説（ラインハルト・シェルナー「甲府市史研究」第8号）、「法勝院領目録」安和2年（969）にみえる市川莊内の「姓田」に市西郷の大豆生田えを比定する説（『田富町誌』第4章 大豆生田考）もあり、市河莊（郷）の存在も通説ではないが近年主張され始めている。

このように古記録の上では古代史が語られることはあったものの遺構、遺物のほとんどなかった本

市低地域にも古代の資料が蓄積されているところである。

笛吹川左岸は、「和名抄」によると八代都沼尾郷に属するとされるが、横畠遺跡で10世紀後半以降の住居跡が3軒確認されているのみで、現在まで、沼尾郷に比定される遺跡は見つかっていない。ただし、大福寺（大鳥居）には、木造薬師如来坐像をはじめ計5軒の平安仏像が、延命寺には平安時代後期の作とされる地蔵菩薩立像が安置されるなど古代の要素は多く残されている。

特に大福寺には周辺堂宇から集められたと思われる破損仏群（11～12世紀）もあり、甲斐國古代仏教の中心地の一つであったと考えられている。

古代末期になると、沼尾郷の大部分が重なるとされる浅利郷が甲斐源氏の一族浅利与一義成の支配することとなる。浅利郷の所在については建久2年（1191）の長講堂領目録にある青島莊の中に位置すると考えられており、青島莊は義成により立莊され、寄進された可能性もある。また、三星院門前の小丘は、戦国時代武田家臣三枝上佐守虎吉の館跡といわれる。

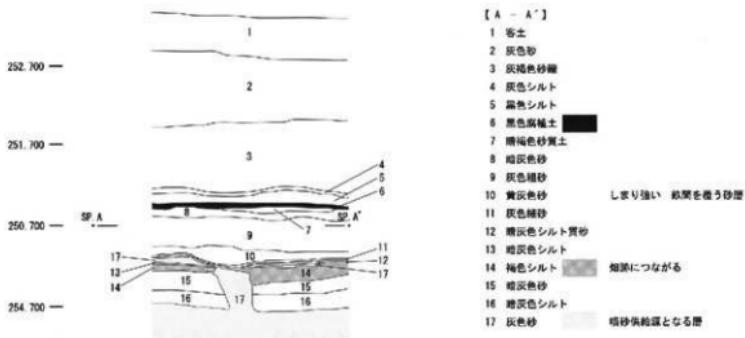
同じく戦国時代館跡としては永源寺が加藤梵元の屋敷跡と伝えられる。その梵元の活躍した15世紀は上庄遺跡でも方形に溝で区画された施設が現れ、溝の中からは漆器や土師質土器、すり鉢が出土し、道路状遺構なども検出されるなど、活発な活動の痕跡が残されている。

大きくわければ古記録豊富な笛吹川左岸、記録に乏しい右岸となるが、近年の埋蔵文化財調査により、これまで見えなかつた歴史が発掘されてきている。今回の平田宮第2遺跡もその見えなかつた部分の歴史であり、今後の中央市の古代イメージを構築するうえで非常に貴重な資料といえる。

#### 引用・参考文献

- 玉穂町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』1995  
 田富町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』2002  
 玉穂町『玉穂町誌』1997  
 豊富村『豊富村誌』2000

### 第3章 層位



第3図 調査区西壁土層断面図(S=1/60)

平田宮第2遺跡2次調査地点の層位は、1次調査地点と対応する部分が多い。

第1層客土の下は、厚さ30~40cmの灰色砂（第2層）、厚さ約40cmの灰褐色砂礫（第3層）が続く。第4~5層はシルトであり、第6層の黒色腐植土層上に堆積する。1次調査地点では第6層に相当するレベルで木田跡が検出されているが調査範囲で水田畦畔は確認されていない。

第7層の暗褐色砂質シルト、第8層の暗灰色砂は、遺物の出土が集中し、第1面として精査を行った面である。第10層は黄灰砂でしまりが強く、畑畝間を埋める砂と考えられる。第11~12層は畑上を薄く覆うシル質砂層であり、畑上に対応する第14層の上に堆積する。第17層が今回確認した最下層で噴砂の供給源にもなっている。噴砂は第14層畑面上に広がっており畑と同時期に地震が起きたことを示している。

## 第4章 発見された遺構と遺物

### 第1節 不明遺構及び遺物分布状況（第4図～第6図）

現地表下約240cmで炭化物が面的に広がり、カマドの可能性がある不明遺構が2ヶ所確認された。いずれの不明遺構もカマドあるいはカマドに近い部分である可能性は高いものの、住居プラン自体は把握することができなかつたため、炭化物やシルトの広がる範囲を図示する。

炭化物・シルトの広がりの他には、土坑状の落ち込みを確認した以外、遺構は確認できなかつた。ただし、遺構は確認できないものの中破片の土器が多く出土したため、その出土位置をドットで図示した。出土遺物の中には、33点の木製遺物が含まれており、製品とはならない木片も多いが杭状に地面に打ち込まれるもののが不明遺構に集中する傾向がある。形態・出土状況から3次調査で出土したカマド構築材と酷似するため同遺物として報告する。

なお、遺物の分布が極端に調査区東端に偏っているのは、集落の西端が調査対象となつたためと思われる。

#### 1号不明遺構

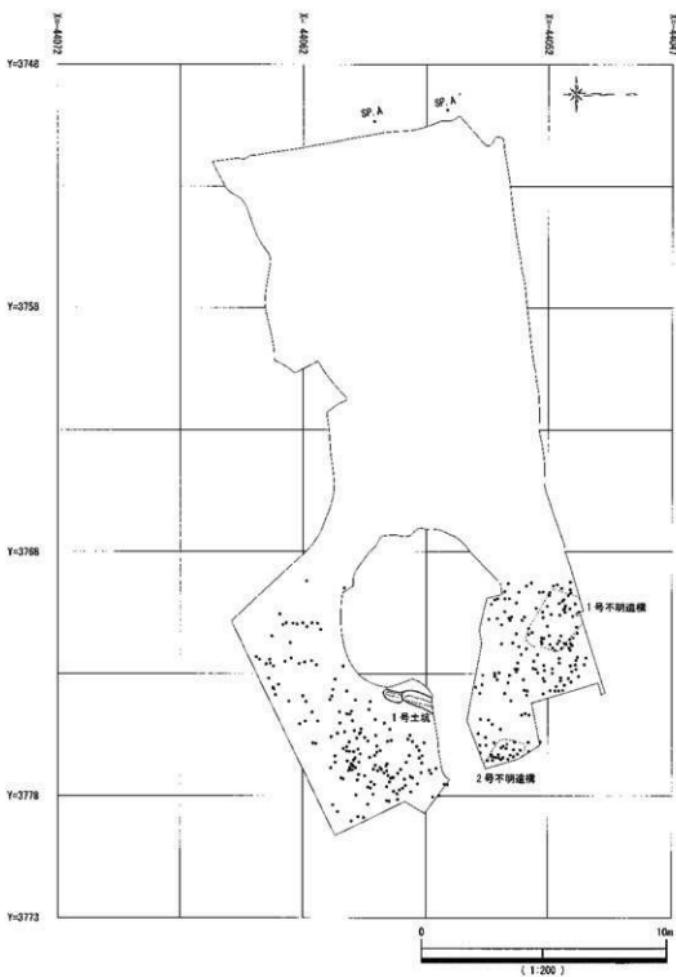
【形状】 炭化物の広がる範囲は、長方形を呈する。【規模】 250×170cm。【検出状況】 炭化物の広がる長方形の範囲内に、杭状の木製品が地面に打ち込まれた状態で出土した。打ち込まれた木製品は13~20の8点でカマド構築材と考える。【遺物出土状況】 カマド構築材は、13~16の一群と、17~20の一組に分かれる。地面に刺さってはいるものの先端を杭のように鋭利に尖らせるのは、17の1点のみである。他のものは先端を加工してはいるが概して平坦である。ただし、15を含んだ断面図では、カマド構築材は打ち込まれたのではなく、掘り方をもつてていることがわかる。他のカマド構築材の断面は記録していないが全てが打ち込まれたものと断定することはできない。なお、炭化物の広がる範囲とそれ以外とで遺物出土量の差はほとんどない。【時期】 10世紀前半。

#### 2号不明遺構

【形状】 炭化物の広がる範囲は、長方形を呈する。【規模】 短辺約120cm。【検出状況】 長方形の範囲内では、木製品の出土はあるが、1号不明遺構で出土したカマド構築材は確認できない。【遺物出土状況】 木製品の他に土器の出土もあるが小破片のみである。【時期】 10世紀前半。

#### 1号土坑

【形状】 長方形円形。【規模】 長辺200cm以上×短辺50cm、深さ26cm。【検出状況】 覆土は、黒褐色砂質シルトを主体とし、上層では炭化物が多く含まれていた。下層は、黒色砂質シルトをブロック状に含んでおり、人為的埋め戻しの可能性もある。遺物も若干含んでいた。【時期】 10世紀前半。



第4図 第1面遺物分布状況

## 第2節 煙跡 (第7図～第9図)

煙跡は現地表下約300cmから検出された。煙跡は第3回調査区西壁面土層堆積状況第9・10層により埋没していた。砂層に覆われる検出状況は1次調査の煙跡と同様である。

畝の幅は畝間の中心間隔で110cm～125cm、畝の高さは13cm～18cmであった。

畝は、N-32°～46°-Eに軸をもつ一群と、N-15°～26°-Eに軸をもつ一群の二群にわけることができる。これらは、N-58°-Wにのびる幅約100cmの通路状の空間によって隔てられている。

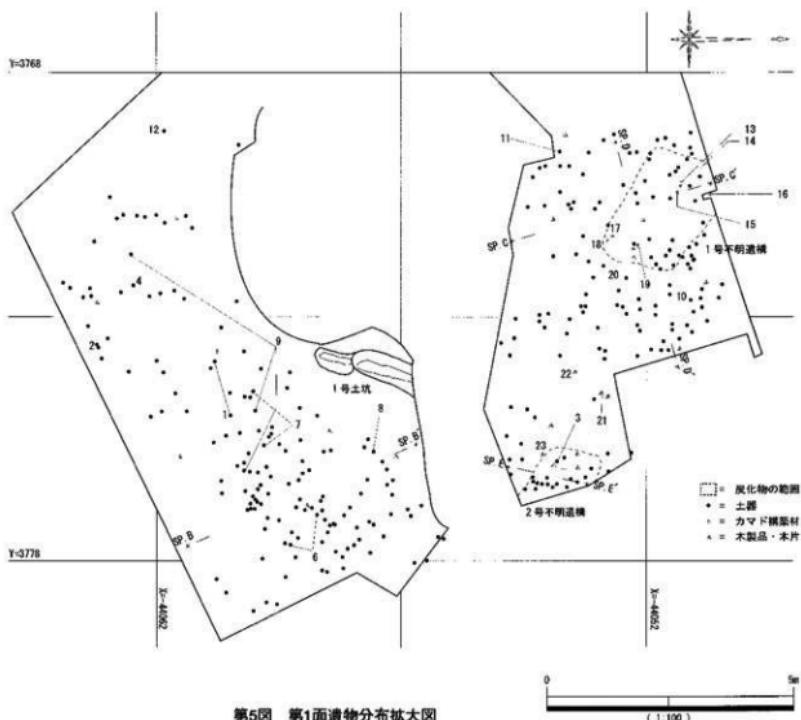
この通路状の空間の南側には、多量の杭が打ち込まれ、畝は杭から長さ約240cm程で終結している。この極端に短い畝は、地震の影響により上下方向、水平方向にずれ、そのずれが起きた部分には噴砂が確認できた。噴砂は一部烟上上で広がっており、煙の存続期間中に起きたものと考えられる。

杭は、畝の終結する側に強く傾いた状態で打ち込まれたものと、それに接するように垂直に打たれたものの組み合わせが多く確認された。樹種については33・34がクヌギ、35・36がコナラとなっている。根をはった状態の自然木(37)も検出されている。1次調査でも自然木は検出されており、同じような間隔で畝の収束部分に境界として植栽がされていたことが予想される。

畝の終結は、1次調査区から続くもので煙地の西端を調査したことになった。

烟土中からの遺物の出土はほとんどなかった。

烟の時期としては、1次調査区からの延長ということで10世紀前半と考える。



第5図 第1面遺物分布拡大図



## [B - B']

- |            |             |            |       |
|------------|-------------|------------|-------|
| 1 灰褐色砂質シルト | 炭化物 少       | 6 雜灰褐色砂    |       |
| 2 單褐色砂質シルト |             | 7 黑褐色砂質シルト | 炭化物 少 |
| 3 雜褐色砂質シルト | 炭化物 少、灰色砂 小 | 8 單灰色砂     |       |
| 4 黑褐色砂質シルト | 炭化物 少、鐵物含む  | 9 灰褐色砂     |       |
| 5 炭化物層     |             |            |       |



## [C - C']

- |             |             |          |
|-------------|-------------|----------|
| 1 黑褐色砂質シルト  | 7 雜灰褐色砂質シルト | 炭化物 少    |
| 2 單灰色シルト質砂  | 8 細灰色砂      | 炭化物シルト含む |
| 3 單灰褐色シルト質砂 | 9 炭化物層      |          |
| 4 單灰褐色砂質シルト | 10 灰色砂      |          |
| 5 單灰褐色砂質シルト | 11 炭化物層     |          |
| 6 黑褐色砂質シルト  | シルトブロックの混合  |          |



## [D - D']

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 黑褐色砂質シルト | 5 黑褐色シルト質砂 |
| 2 灰褐色砂質シルト | 6 炭化物層     |
| 3 炭化物層     | 7 灰褐色砂     |
| 4 灰褐色シルト   |            |

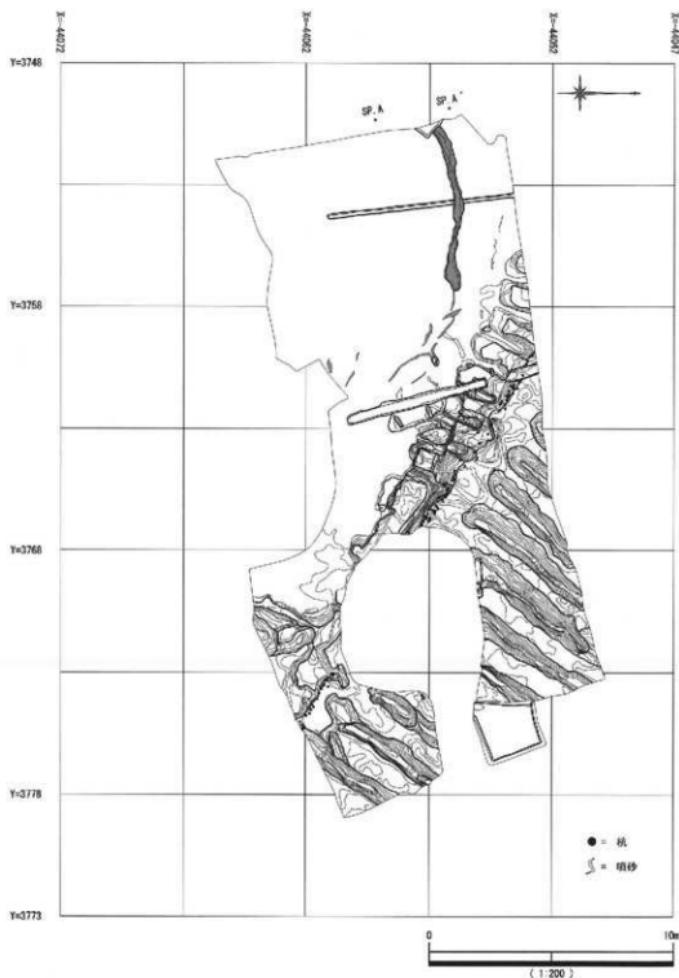


## [E - E']

- |            |            |       |
|------------|------------|-------|
| 1 黑褐色砂質シルト | 6 單灰褐色シルト  |       |
| 2 黑褐色砂質シルト | 7 黑褐色砂質シルト |       |
| 3 單灰褐色シルト  | 8 黑褐色砂     | 炭化物 少 |
| 4 黑褐色砂質シルト | 9 炭化物層     |       |
| 5 黑褐色砂     |            |       |

第6図 第1面土層断面図

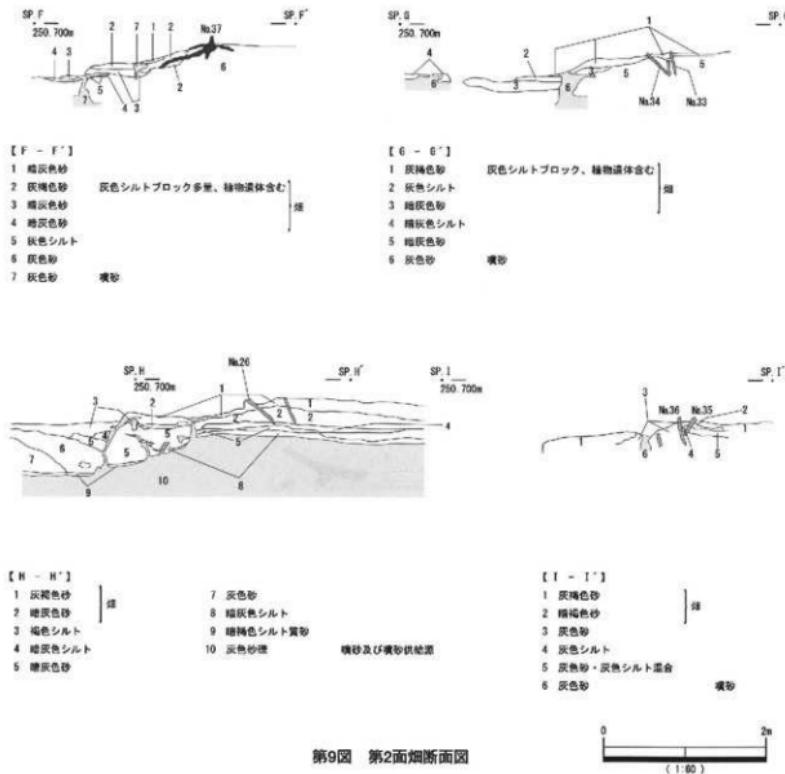


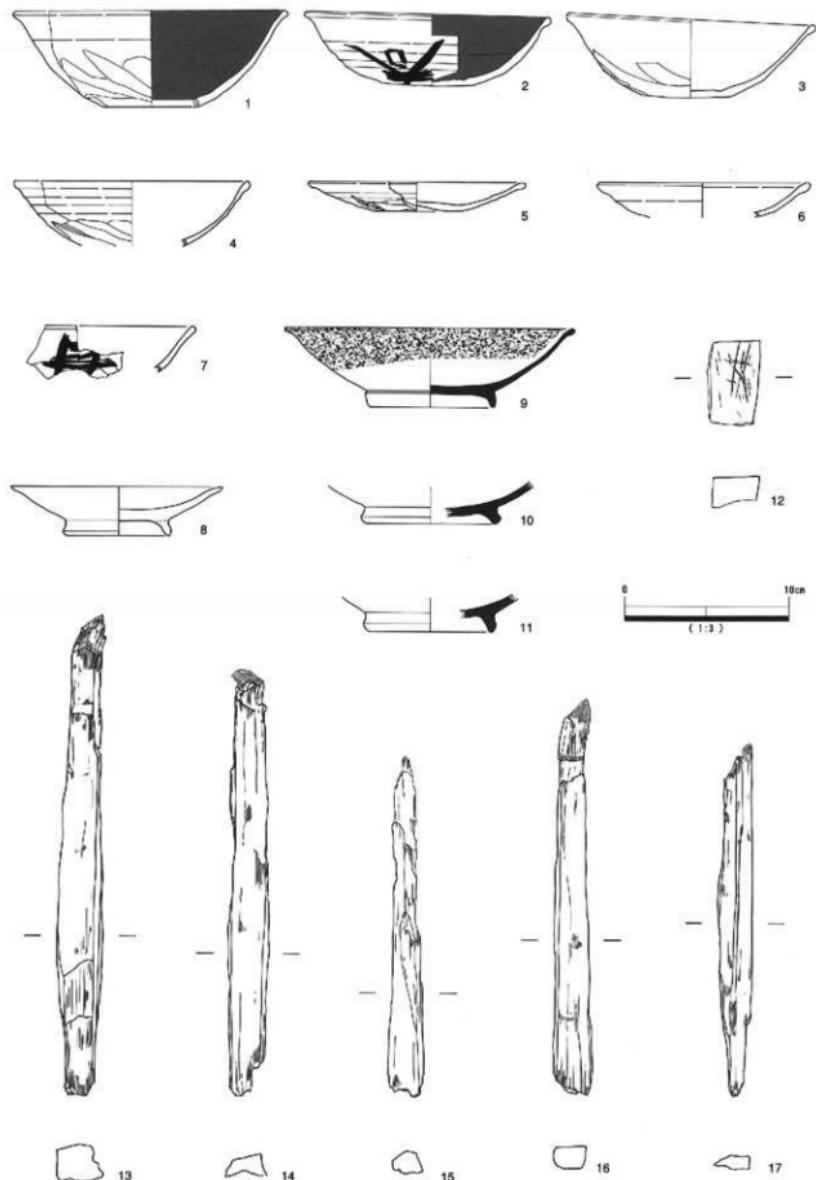


第7図 第2面烟跡

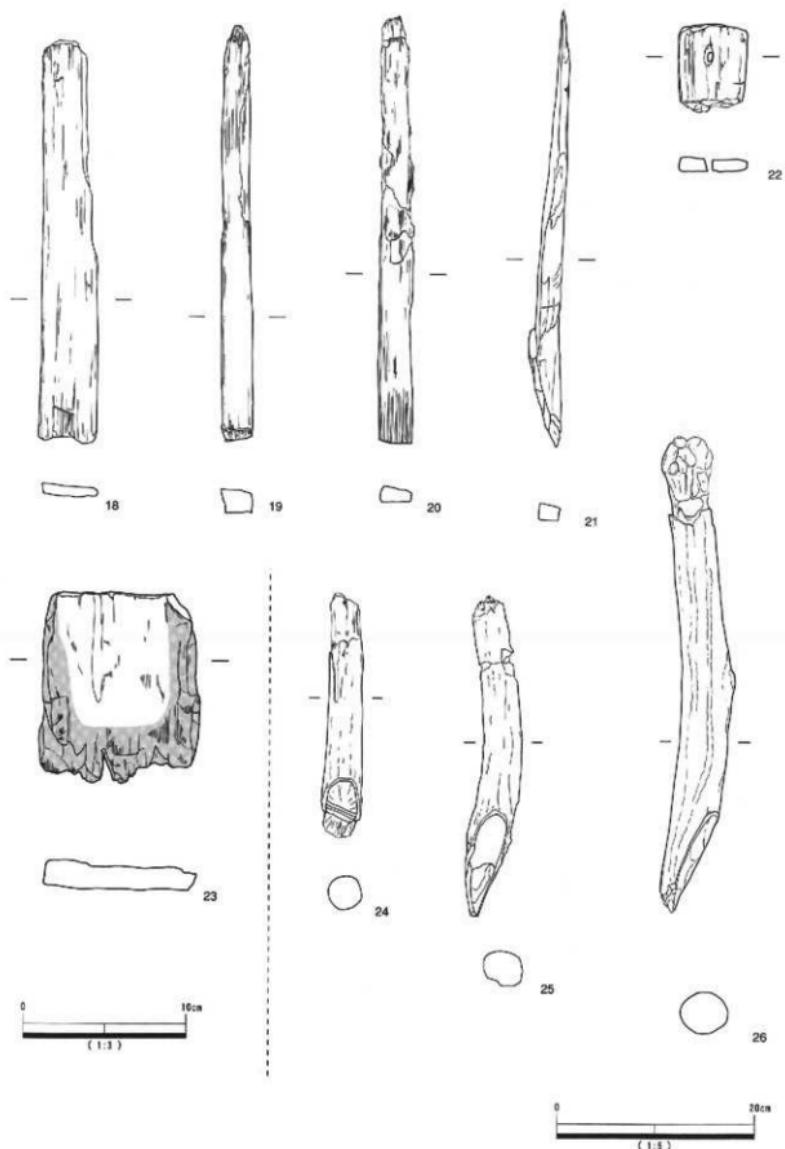


第6図 第2面烟跡杭列拡大図

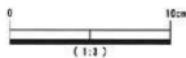
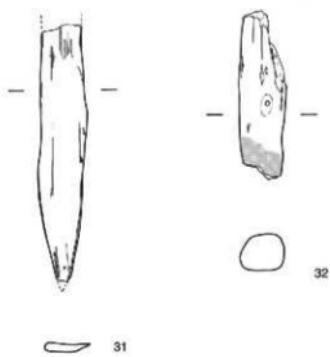
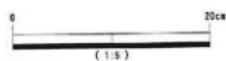
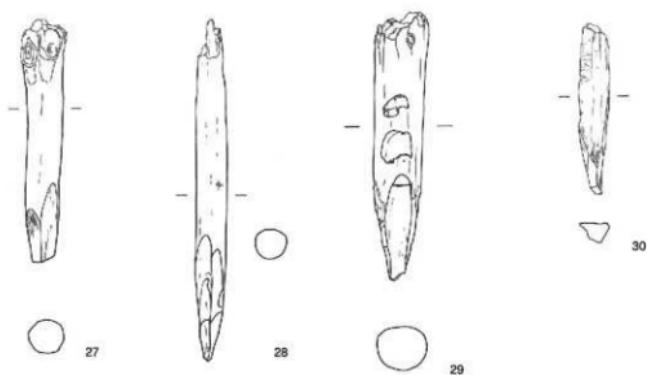




第10圖 2次調査出土遺物（1）



第11図 2次調査出土遺物 (2)



第12図 2次調査出土遺物(3)

第1表 平田宮第2遺跡2次調査出土遺物観察表

区 番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴		法量(cm) 柱径 底径 高さ	発見率	注記 番号	備考	
				体外	体内					
10 1	土師器 片	暗褐色	白・赤色粒	ロクロなで 下手ヶ切り	ロクロなで	(16.1) (5.8)	5.9	20%	13-16+ 内面黒色處理	
10 2	土師器 片	褐褐色	赤・白粒	ロクロなで 立ち上りケズリ	ロクロなで	(14.5) (5.5)	4.3	40%	254, 327 褐青+「章1.内面黒色處理」	
10 3	土師器 片	褐色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 立ち上りケズリ	ロクロなで	未切+後 へう削り	14.6	5.4	5.0	70% 備考
10 4	土師器 片	暗褐色	白・赤色粒、石英	ロクロなで 下手ヶ切り	ロクロなで	(14.0)			口唇部破片 246 体外で譲渡	
10 5	土師器 皿	灰褐色	白色粒、角閃石	ロクロなで 底面四辺ケズリ	ロクロなで	未切り	(12.8)	(5.0)	1.8	10%
10 6	土師器 皿	褐色	白・赤粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで	(12.3)			口唇部破片 163, 167	
10 7	土師器 皿	赤褐色	赤・赤色粒、角閃石	ロクロなで 下手ヶ切り	ロクロなで				口唇部破片 209, 223 図書+「日」?	
10 8	土師器 皿	黑色	白粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで	未切+後 へう削り	(12.7)	6.1	3.0	50% 181
10 9	瓦輪陶器 蓋台付皿	灰褐色	白粒多	ロクロなで	ロクロなで	未切+後 へう削り	(17.3)	7.4	4.9	30% 216, 323, 257, 211+、土
10 10	瓦輪陶器 蓋台付皿	暗灰色	白色粒、黄土	ロクロ	粘土つけ付け	(7.6)			底部破片 272	
10 11	瓦輪陶器 蓋台付皿	暗灰色	白色粒、角内石	ロクロ	粘土つけ付け	(7.4)			底部破片 125	
10 12	砾石		高台	高台は複数み					270 表面に擦痕あり	
区 番号	器種	法量(cm) 高さ 幅 厚さ			特徴					注記 番号
10 13	カマド構築材	29.2	2.8	2.2	先端を削り細くする。斜利にはならず常に平らに整形。末端や下では圧力がかかるかのようにわずかに盛む。					39
10 14	カマド構築材	26.0	2.5	1.4						38
10 15	カマド構築材	20.7	2.2	1.4	末端が最も細く先端に向かい徐々に幅が広がる。					37
10 16	カマド構築材	24.2	2.4	1.4	15と同様な形態で末端や下では圧力がかかるかのようにわずかに盛む。					34
10 17	カマド構築材	21.4	2.0	0.8	先端は両側縁を削り脱ぐくなる。					129
11 18	カマド構築材	24.5	3.4	0.7	棒状で先端は平ら。					130
11 19	カマド構築材	25.3	1.9	1.9	先端は平らで切れ込みが入る。末端は徐々に薄くなり丸みを帯びて収束する。					85
11 20	カマド構築材	25.0	2.0	1.0	先端は平ら。					84
11 21	葦草状木製品	26.6			両端が斜利に削りだされる。					287
11 22	不明木製品	(4.0)	4.5	0.9	穿孔×1。					281
11 23	不明木製品	11.7	9.6	1.8	1辺を削き縁を挫然。					291
11 24	杭	(24.9)			$\phi = 3.4\text{cm}$ 、先端1面削り。					325
11 25	杭	(32.5)			$\phi = 4 \times 3.6\text{cm}$ 、先端4面削り。					367
11 26	杭	(48.7)			$\phi = 4.9\text{cm}$ 、先端2面削り。					364
12 27	杭	(24.5)			$\phi = 3.4\text{cm}$ 、先端5面削り。					314-1
12 28	杭	(34.6)			$\phi = 3.0\text{cm}$ 、先端5面削り。					314-3
12 29	杭	(27.2)			$\phi = 4.5\text{cm}$ 、先端4面削り。表面に刃物で削られたような痕跡あり。					314-5
12 30	杭	(17.5)			$\phi = 3.2\text{cm}$ 、先端5面削り。					314-4
12 31	不明木製品	(15.6)	2.7	0.6	先端は両側縁を削り脱ぐくなる。					1土杭
12 32	不明木製品	(10.2)			$\phi = 2.2\text{cm}$ 、被熱。					1土杭

## 平田宮第2遺跡3次調査

### 第1章 調査の経緯と概要

#### 第1節 調査に至る経緯

本報告の発掘調査は、主要地方道蘠崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に係るものである。

平成17年に実施された平田宮第2遺跡2次調査は、平安時代の集落・畑、平安時代後半から鎌倉時代の水川跡西端を明らかにした。このことにより、平田宮第2遺跡の東への広がりが注目されたが、東側ではすでに上庭遺跡の調査を終え、新山梨環状道路の建設が急ピッチで進められていた。

そのような中、平成17年5月から新山梨環状道路の計画地である山梨大学敷地内南端で実施された県埋蔵文化財センターによる発掘調査では、平安時代後半から鎌倉時代の水田跡、平安時代の祭祀跡、井戸跡、畑跡が検出され、平田宮第2遺跡の広がりが確実なものとなつた。

平成17年12月に実施された玉穂町教育委員会(現中央市)による試掘調査では、水田畦畔及び畠畝、土器片等の平安時代の遺物が出土し、遺跡が広範囲に広がることが予測された。試掘調査の結果を基に、山梨県新環状・西関東道路建設事務所と玉穂町教育委員会で協議をし、工事着手されていない約1,200mを対象に発掘調査を実施する結論に至つた。

その後、新山梨環状・西関東道路建設事務所長と玉穂町教育委員会教育長は、主要地方道蘠崎櫛形農富線県道橋梁改築工事に伴う「平田宮第2遺跡」発掘調査に関する覚書(平成18年2月10日)を交換し、関係書類を山梨県教育委員会へ提出後、調査に着手した。

発掘調査は、平成18年3月1日から同7月3日までの約4ヶ月間にわたり実施し、整理作業及び調査報告書作成については、別途覚書を交換(平成19年5月1日)した後、平成19年6月18日から平成20年3月31日まで実施した。

#### (事務手続きの概略)

- 平成17年12月15日 文化財保護法第94条第1項埋蔵文化財発掘調査の通知
- 平成18年3月10日 文化財保護法第99条第1項埋蔵文化財発掘調査の報告
- 平成18年7月4日 埋蔵文化財の発見届け
- 発掘調査の終了報告

#### 第2節 発掘調査の概要

平田宮第2遺跡3次調査対象範囲は、新山梨環状道路建設予定地で対象面積は、約1,200m<sup>2</sup>である。

重機により深さ約200cmの排水溝を調査区周囲に設定し、排水を行いつつ調査区内の掘削を進め、現地表下約170cmで水田跡を検出した。水川面は洪水砂に覆われていたため、最終的には人力により砂を除去し、水川跡の写真撮影、図化作業を行つた。

水田跡調査終了後、約30cmを掘下げ、遺構確認作業を実施したところ合計7軒の住居跡を検出した。各住居跡ごとに精査を行つたが調査期間の関係もあり、精査の終了していない住居跡3軒を残し、他の部分を重機により約30cm掘下げ、畑跡の調査に移つた。

畝は水田跡同様洪水砂に覆われていたため、人力により畝間の砂を除去し、写真撮影・平面図作成を行つた。畑面への掘下げ中に井戸跡が確認され、同時に精査を進めた。なお、井戸材の残りのいいものは取り上げ、後日保存処理を行つてゐる。

最後に、下層調査のため、調査区中央にトレンチを設定し断面観察を行い、遺構のないことを確認して調査を終了した。

調査終了後ただちに工事の着工が予定されていたため、調査区の埋め戻しは実施していない。

7月3日までに現場事務所、道具等を完全に撤収し調査を終了した。

## 第3節 調査組織

調査主体 中央市教育委員会

調査担当者 今村直樹（中央市教育委員会）

調査参加者 新谷和美 新谷博明 河西圭子 田中初子 佐藤あけみ 真道みゆき 野呂瀬英臣  
依田和美

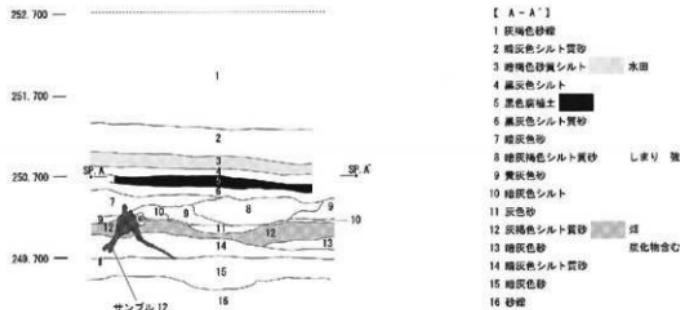
## 第2章 層位

平田宮第2遺跡3次調査地点の層位は、基本的には1・2次調査地点と対応する部分が多い。

第1層暗褐色砂礫の上層は、掘削前に調査環境を整えるため除去していたため、図化はできなかった。第1層は2次調査区基本土層の第3層に対応する。第2層は、水田跡を覆う砂層で、第3層暗褐色砂質シルトが水田跡である。西に隣接する平田宮第2遺跡1次調査地点で検出された水田面もほぼ同様な標高(250,900m)であった。第4層黒灰色シルトを挟み、第5層黒色腐植土が堆積する。第6層の黒灰色シルト質砂は、住居跡確認面である。

第7～9層は砂層で畑面を覆っている。第10層は第7～9層と畑跡第12層の間に堆積するシルト層である。第13層は暗灰色砂で、1次調査畑跡下層の灰色砂と対応する。

第14層暗灰色シルト質砂は1次調査では確認していない。第15層の暗灰色砂を挟み第16層が砂礫層で今回確認した最下層である。噴砂の供給源となっており、第12層上に噴出している部分も確認できる。畑と同時期におきた地震によるものであり、畑間に堆積する第11層も噴砂に関係する砂の可能性がある。



第13図 調査区北壁土層断面図 S=1/60

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 第1節 水田跡（第14図）

水田跡は、現地表下約170cmで検出された。水田面は、暗灰色シルト質砂で覆われており、周辺調査で確認されている水田跡の出土状況と同様である。

検出された畦畔は、幅42~70cm、高さ14~16cmである。調査区北東隅で不確定な部分もあるが8枚の水田区画を確認した。4辺を確認できたものはないが、南北に長い形態を呈していることは、1次調査成果とあわせることで明らかにできる。

長軸の真北からの振れは、N-5°-E-N-15°-Eであり、若干東に振れる畦畔配置となっていた。周辺の畦畔のあり方もあわせた様子は、まとめの項で報告する。

水田面は西へ向かって若干上り、南北はほぼ水平である。

#### 第2節 住居跡（第15図）

住居跡を7軒確認した。1号（古）と2号（新）住居跡、3号（新）と4号（古）住居跡が重複し、5号住居跡は、カマドのみの検出であった。6号住居跡は平面プランをはっきりと確認できたが、7号住居跡は調査区北壁面で断面のみの調査となった。

住居の配置は調査区西半に偏っており、東半は遺物の出土量も極端に減り、遺構の存在は確認できなかった。住居跡出土の土器壺は、10世紀前半に属するものである。

1次調査区の平安集落の続きである。

##### 1号住居跡（第16図～第19図）

- 〔 形 状 〕 長方形。
  - 〔 規 模 〕 長軸425cm×短軸336cm。
  - 〔 主 軸 〕 E-2°-S。
  - 〔 床 面 〕 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。
  - 〔 壁 〕 壁高約10cm。壁立ち上がりが明確に検出できたのは北壁の一部と東壁。
  - 〔 周 溝 〕 なし。
  - 〔 カ マ ド 〕 東壁中央やや南より。灰白色の砂質シルトでソテを構築している。右ソテには、カマド構築材が内側3本、外側1本の計4本打ち込まれていた。粘土を明確に貼り付けたカマドではなく、形状の把握は困難であった。カマド内炭化物層には多量のイネ珪酸体が含まれており、燃焼材としての使用が考えられる。
- 〔遺物出土状況〕 遺物はカマド周辺及び住居南側に多かった。木製品も上器と同様な位置から出土している。カマド構築材以外に住居中央付近に2本あるいは3本の塊で杭状木製品が打ち込まれていた。
- 〔時 期〕 10世紀前半。

##### 2号住居跡（第20図～第21図）

- 〔 形 状 〕 長方形か。
- 〔 規 模 〕 短軸321cm。
- 〔 主 軸 〕 E-24°-S。
- 〔 床 面 〕 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。
- 〔 壁 〕 東壁で約5cmの壁立ち上がりを確認。
- 〔 周 溝 〕 カマド向かって左側壁沿いに周溝。

[カマド] 1号住居跡と重複しているためか、明確なプランは確認できなかった。ソデがわずかに残った状態で、おそらく住居南東隅寄りに位置していると思われる。カマド内には、炭化物が堆積していた。

[遺物出土状況] 上器はカマド右側に集中していた。木製品の出土もカマド周辺に限定されている。

[時 期] 10世紀前半。

### 3号住居跡（第22図～第25図）

[形 状] 正方形。

[規 模] 長軸340cm×短軸295cm。

[主 軸] N-21°-E。

[床 面] 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。

[壁] 四方の壁の立ち上がりを確認した。掘り込みは10cm前後。

[周 溝] カマド左の120cmを除きほぼ一周する。

[カマド] 北面北東隅。灰白色シルトによりソデを構築している。左右のソデにはカマド構築材が打ち込まれる。左ソデに2本、右ソデに3本。いずれも「ハ」状にカマド内側に傾いていた。構築材の下端は下層の烟跡まで達しており、しっかりと固定されている。カマド右ソデには、構築材と直行するように棒状の木製品が横たわっていた。打ち込まれた構築材と組み合わせり、カマドの基礎を構成する材の可能性がある。

[遺物出土状況] カマド周辺を中心に、住居跡東半分に分布する。木製品の出土も豊富であった。No11の木製品は、長さ9.9cmと短いが、地面に突き刺された状態で検出されている。

[時 期] 10世紀前半。

### 4号住居跡（第26図～第27図）

[形 状] 長方形。

[規 模] 長軸358cm×短軸308cm。

[主 軸] N-12°-E。

[床 面] 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。

[壁] 3号住居跡に切られていた西壁を除き良好な状態で確認できた。掘り込みは、16～20cm。

[周 溝] なし。

[カマド] 住居跡北面北東隅に位置する。カマド構築材が左ソデに3本、右ソデに2本打ち込まれているが、断面凹凸作成位置を構築材に係わらない部分に設定してしまったため詳細な状況を記録できなかった。

[遺物出土状況] カマド周辺に集中する。No5は、生焼け状態の須恵質土器鉢。伏せた状態でつぶれて出土した。木製品の出土も豊富で、No11は大きな木片で片面を被熱し、No21は舟物蓋である。No12・13は枕状木製品。

[時 期] 10世紀前半。

### 5号住居跡（第28図）

[形 状] 不明。

[規 模] 不明。

[主 軸] 杖状に打ち込まれた木製品をカマド構築材と考えるならば、東西方向に主軸をも

つと思われる。

- [床面] 不明。
- [壁] 不明。
- [周溝] 不明。
- [カマド] 杖状に打ち込まれた木製品をカマド構築材、シルトの分布と炭化物の広がりをカマドと考え、住居跡を想定する。杖状木製品は、2本と3本のまとまりをもって出土した。他住居跡で検出されているカマド構築材と同様の出土状況である。
- [遺物出土状況] 遺物は、カマドの周囲に少量出土している。No.1は、墨書き土器で「日」の具体字が書かれる。No.5は、板状の木製品で端部近くに穿孔され、1号住居跡No.18、2次調査No.22と類似する。
- [時期] 10世紀前半。

#### 6号住居跡（第29図～第31図）

- [形状] 正方形。住居南東隅が若干内側へ小さくなり、凹凸をもった形状となっている。
- [規模] 長軸346cm×短軸344cm。
- [主軸] E-19°-S。
- [床面] 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。
- [壁] 四方で明確に確認できた。掘り込み20～25cm。
- [周溝] なし。
- [カマド] 東壁中央やや南より。カマドソデは確認できなかった。カマド構築材も確認できていない。炭化物は、厚く堆積している。
- [遺物出土状況] 遺物は、カマド周辺から出土している。No.6は、刻書き土器で「弥？」が刻まれている。カマド南東隅には、No.13の板状木製品（櫛？）が床面上に横たわった状態で出土。杖状木製品がカマド前面に2本離れた状態で、北東隅には1本打ち込まれていた。
- No.14は、本住居跡の柱材で、底面は平に削られ、掘り方をもち直した状態で出土した。埋設状況は、柱径よりひとまわり大きい掘り方の中に柱が据えられ、灰色砂を埋土としていた。版築のような行為は行われていない。この柱材の断面の様子は、写真図版19を参照。
- [時期] 10世紀前半。

#### 7号住居跡（第32図）

- [形状] 不明。
- [規模] 不明。調査区北壁で断面のみ確認。
- [主軸] 不明。東方向を向いていると思われる。
- [床面] カマド炭化物層のレベルと思われる。
- [壁] 不明だが20cm程だろうか。
- [周溝] 不明。
- [カマド] 断面でのみ確認。炭化物が堆積し、焼土主体の層も確認できる。
- [遺物出土状況] 断面を検出した周辺で少量の遺物を採取したため7号住居跡出土遺物とした。調査区周辺に設定した排水溝掘削により大部分の遺物は失われたと思われる。
- [時期] 10世紀前半。

## 第3節 煙跡・水田跡（第33図～第34図）

煙跡は、現地表下約250cmから検出され、黄灰色砂により埋没していた。第11層灰色砂が歎間を埋め、煙面上を第10層暗灰色シルトが薄く覆っていた。

歎の幅は、歎間の中心間隔で120cm～150cm、歎の高さは、10cm～16cmであった。

歎は、ほぼ南北にのびながら若干蛇行している。一部地震の影響により形が崩れている部分がある。

調査区北東隅では煙から水田へ上地利用形態が変化しており境界の畔には、杭がランダムに打たれていた。杭列には、立ち木が1本含まれており樹種同定の結果は、ヤナギ属であった。1・2次調査でも杭列中には、立ち木が含まれることが確認されている。

この杭列はN=48°～W方向にのびており、1・2次調査の杭列とほぼ平行している。この杭列より東が水田となっているが、煙との標高差はほとんどない。

## 第4節 井戸跡（第35図～第36図）

煙跡調査のために掘下げを行ったところ、6号住居跡南東3mの地点から井戸跡を検出した。当初、第2面の住居跡に対応する井戸とと考え調査を進めたが、土層堆積状況の観察から住居以前の井戸跡の可能性が高いとの結論に至った。

上層堆積状況は、烟土（20層）が井戸の中に入り込んでいないが、煙面上に堆積する第9層灰色シルトは、井戸枠の中にまで入っている。また、その上に堆積している第7・8層も井戸枠の中に入り込み、煙面レベルで堆積している。煙が第7～9層に覆われた際には井戸も煙と同レベルまで埋没していたことになり、井戸枠材は煙面から30cmほど突き出していた状況が推測される。

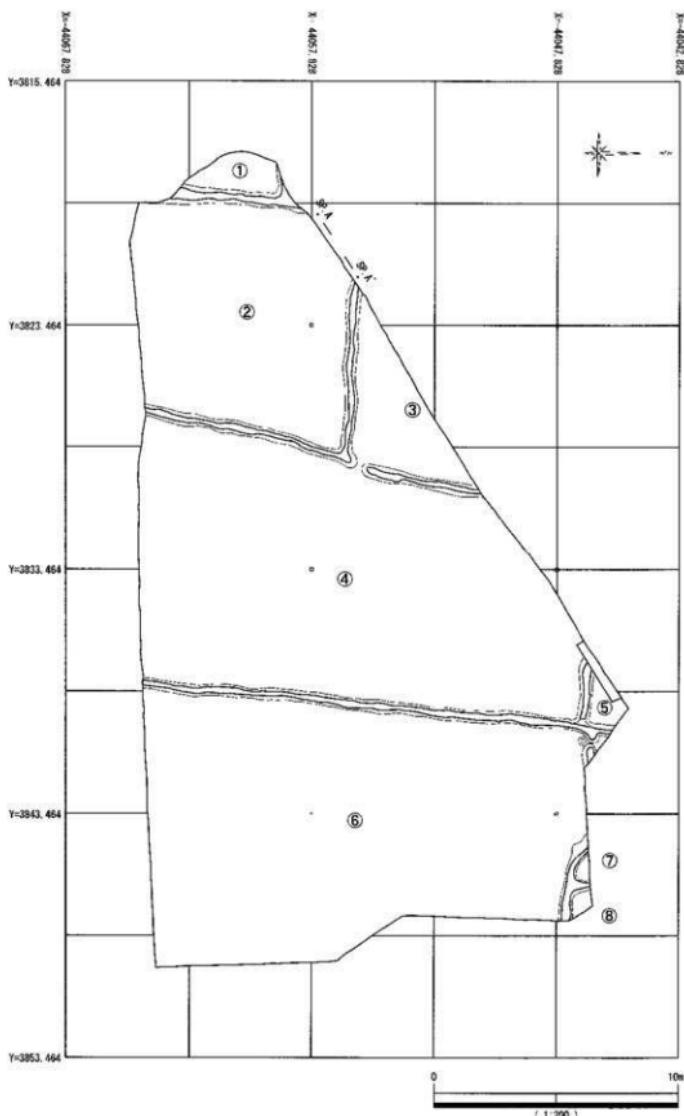
煙面レベル以下のが井戸内堆積状況は、単純な層位であり、自然埋没というよりは人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。埋土と思われる12～14層には、遺物が含まれており、特に13層からは、完形の七器が小破片の土器と共に出土している。

平面的には、一辺約65cmの正方形、深さは約60cmである。四隅に基準となる棒状の木材を置き、ホゾ穴を開けて横木を渡している（第35図斜掛け部分）。これらの外側に幅10～20cm、厚さ1～2.5cmの長方形の板材が下端を砂礫層（29層）まで達するよう打ち込まれ、固定されていた。上端は、腐食が進んでおり当時の形状はわからない。

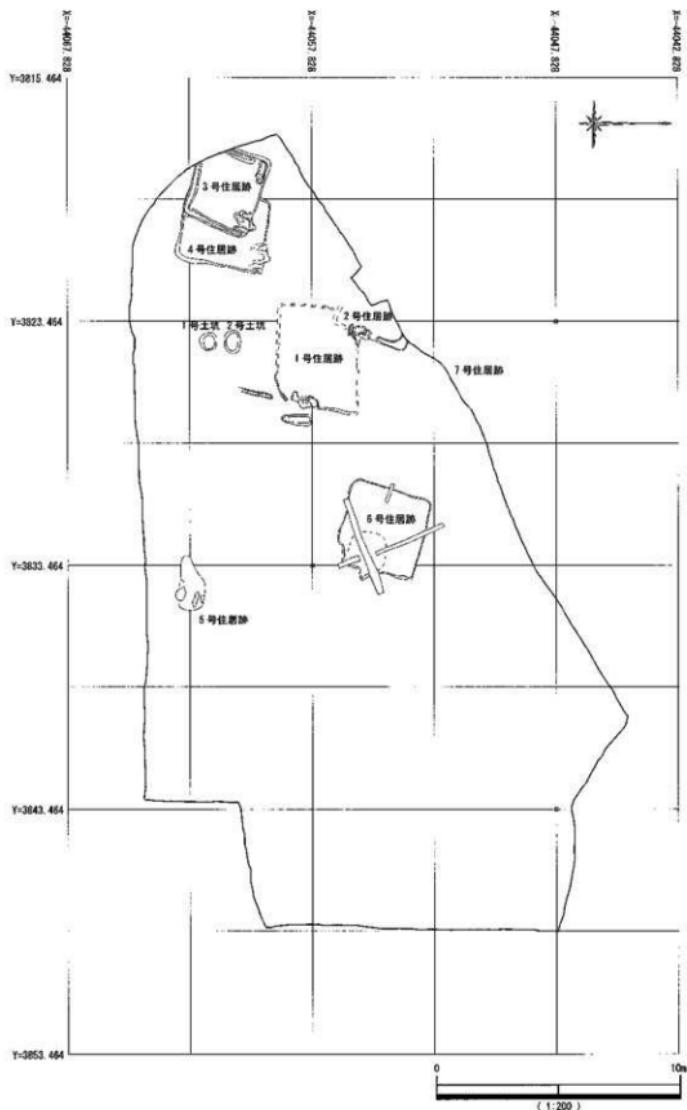
また、本井戸跡は、北西方向から南東方向に力が働き、形態が歪んでしまっている。井戸南側に木材が散っていることもその力が働いたことを示しているのかもしれない。散っている木材は、煙面直上にのっており、煙が使われていた時期に井戸材が散ったことを示すことになる。煙耕作時に地震があり、煙歎に大きな傷跡が残されていることは1次調査でも報告されており、本調査検出の煙跡も一部歎が崩れ、その位置から1次調査地震痕跡と一連のものと推測される。井戸跡が位置するのは、その地震痕跡の延長上である。

井戸掘り方は、おそらく16～18層が相当するものと思われる。17・18層の上層に烟土がのっているのは、本来の掘り方を煙耕作により掘り返してしまったためであろう。

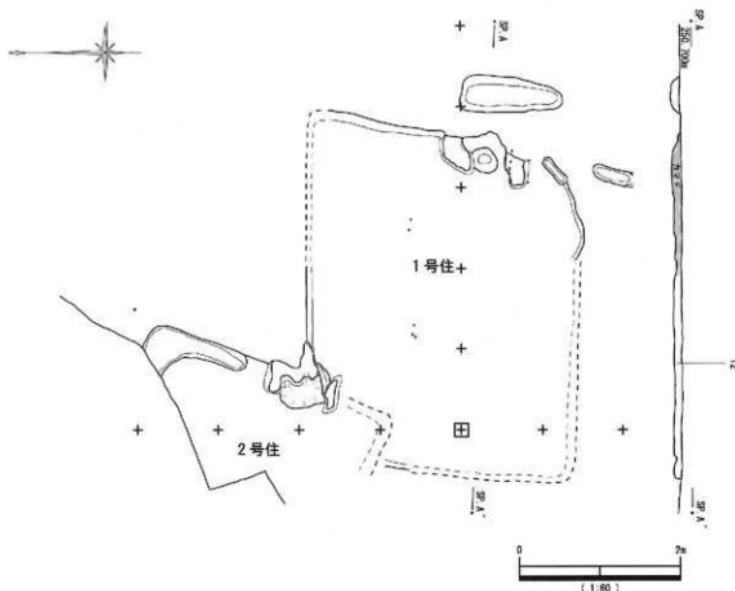
井戸内出土の遺物は、土器・木製品が少量であった。井戸枠材には、様々な木製品が転用されていた。



第14図 第1面水田跡



第15図 第2面造構分布図



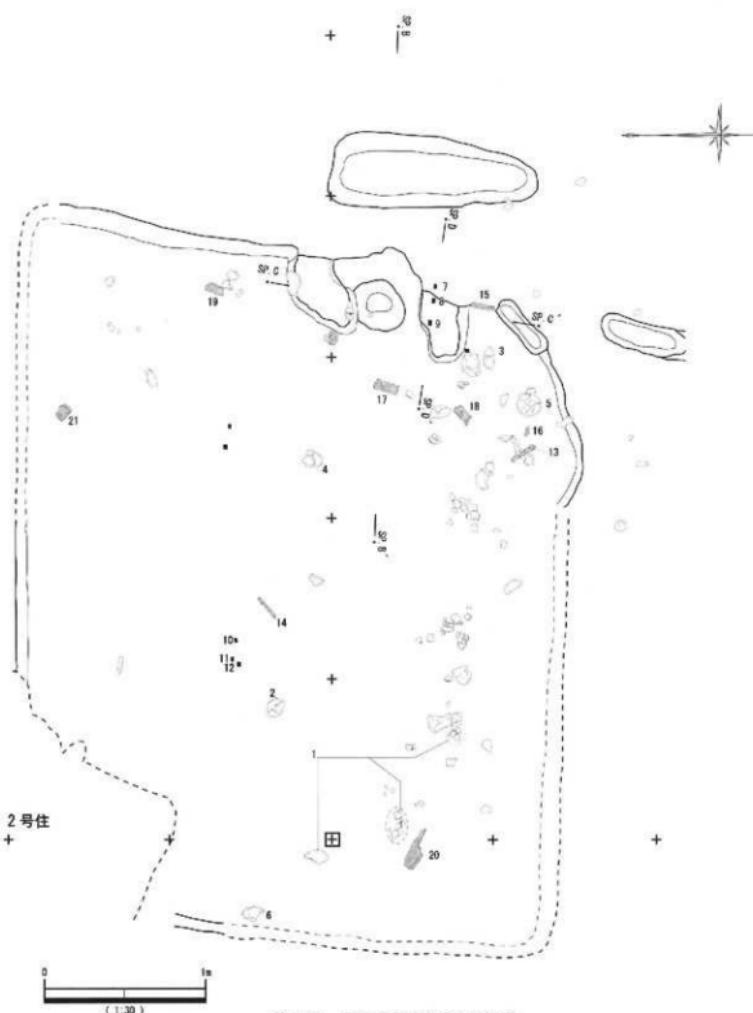
第16図 1・2号住居跡



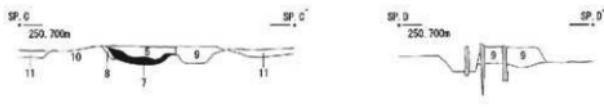
第17図 1号住居跡カマド土層断面図 (S=1/30)

## 【1号住居跡土層説明】

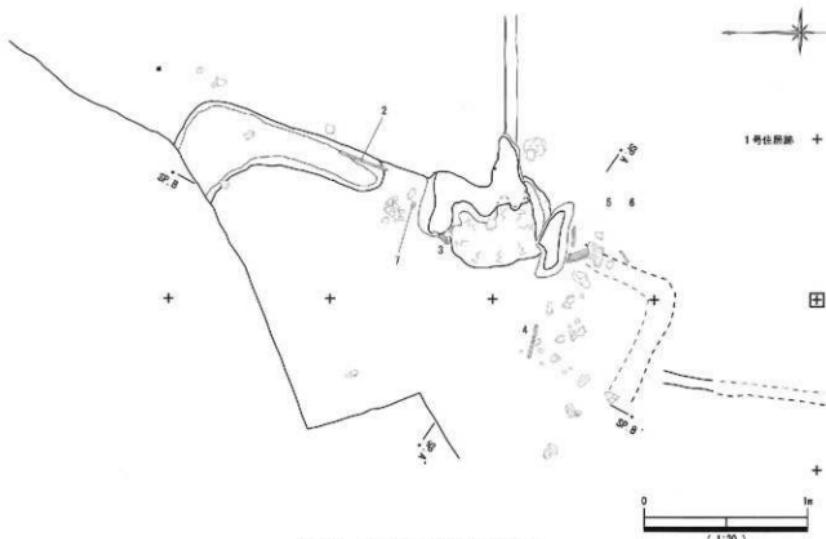
1 線灰色砂	炭化物塊、燒土粒	8 黒灰色砂	炭化物粒
2 灰褐色シルト	燒土粒	9 灰白色シルト	カマド堆?
3 細褐色砂		10 黒灰色砂	
4 灰白色シルト	(カマド灰薄土)	11 黒灰色砂	炭化物粒
5 細灰色砂	炭化物塊、燒土粒	12 黒灰色砂	炭化物塊、灰白色砂ブロック
6 黑褐色シルト	灰白色粘土ブロック、炭化物粒、燒土粒	13 黒灰色砂	
7 炭化物層	カマド灰層		



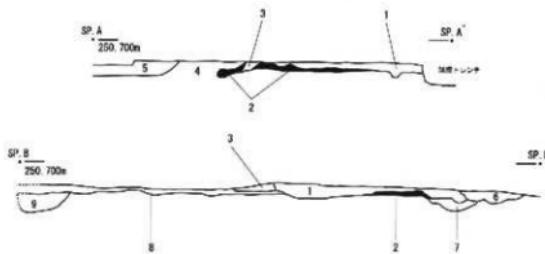
第18図 1号住居跡遺物出土状況図



第19図 1号住居跡カマド土層断面図 (S=1/30)



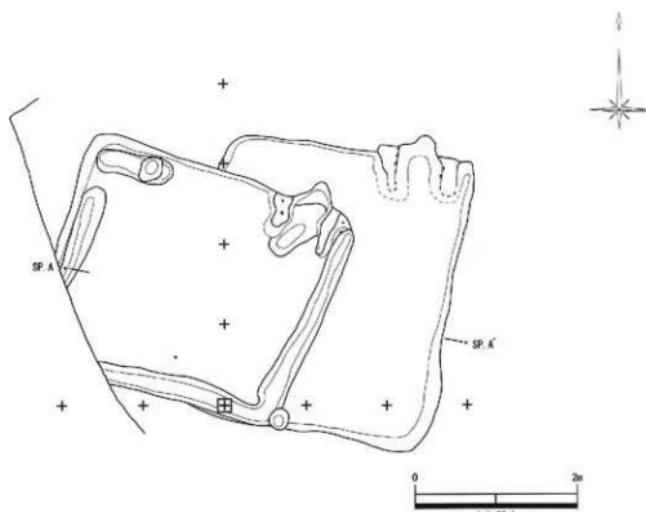
第20図 2号住居跡遺物出土状況図



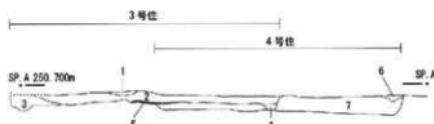
第21図 2号住居跡土層断面図 (S=1/30)

## 【2号住居跡土層説明】

1 黒灰色砂	表化物粒	7 淡褐色砂
2 茶化物粒		8 黑灰色砂
3 淡褐色粘土	カマド窯落土?	9 黑灰色砂
4 棕灰色砂	表化物粒、淡褐色粘土粒(カマド灰?)	炭化物粒
5 細灰砂		



第22図 3・4号住居跡



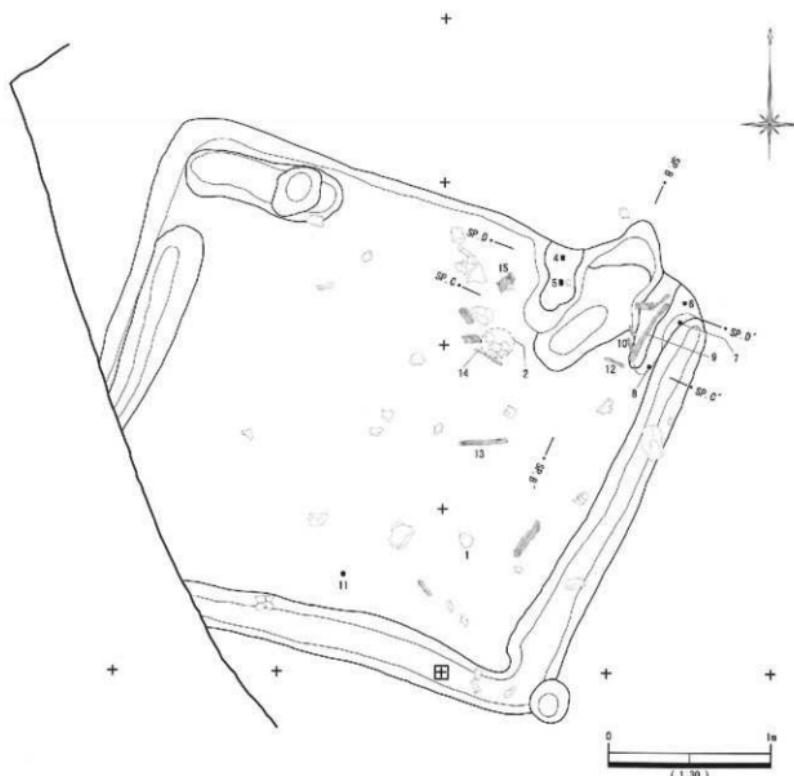
第23図 3・4号住居跡跡土層断面図 (S=1/60)

## 【3号・4号住居跡跡土層段鉄】

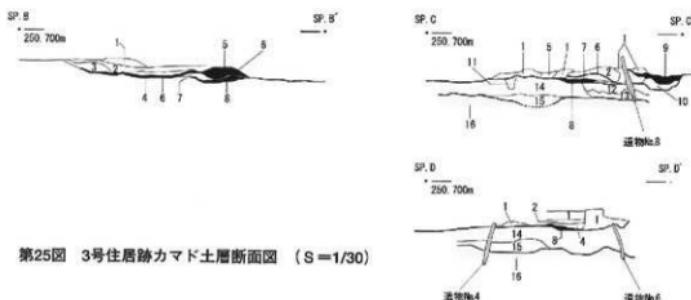
1 黒色砂	炭化物粒 多	5 灰化物層
3 黑灰色砂		6 黑色砂 炭化物粒 多
2 灰灰褐色砂	炭化物粒	7 灰淡色砂 炭化物粒・暗灰色砂シルトブロック 多 しまり 強
4 黑灰色砂		

## 【3号住居跡跡土層段鉄】

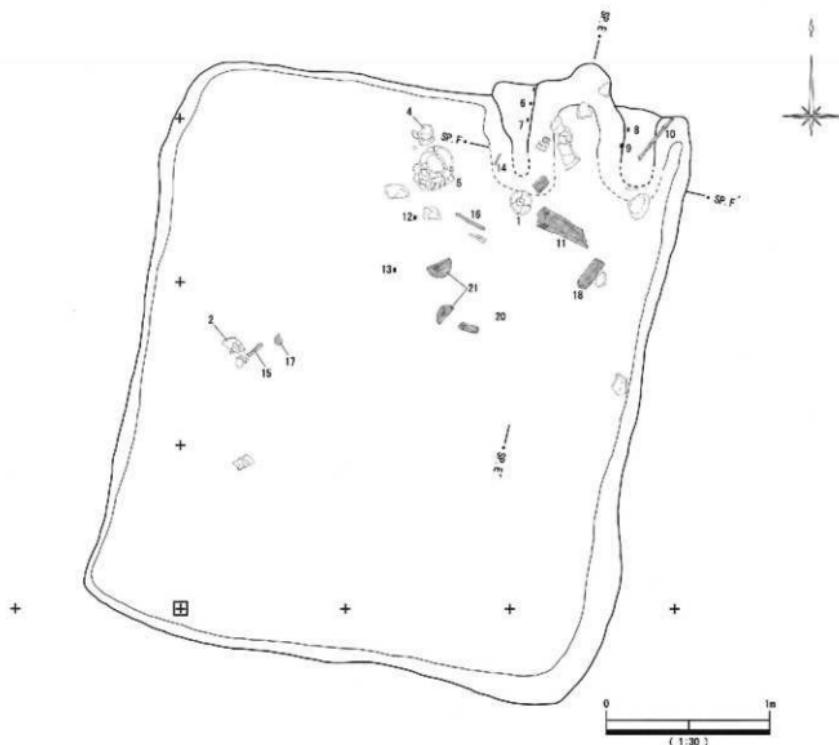
1 淡白色シルト	(カマド焼窯土・崩落土)	12 黒色砂 炭化物粒 多
2 黑灰色砂	炭化物粒・焼土粒	13 灰褐色砂
3 灰灰褐色シルト質砂	灰白色シルト・焼土粒 多、炭化物粒	14 黑灰色砂 炭化物粒
4 灰灰褐色シルト質砂	灰白色シルト・焼土粒 多、炭化物粒	15 黄灰色砂 細間を埋めるしまりの強い砂質
5 灰化物		16 灰褐色砂質土 粗
6 灰化物		
7 黑灰色砂		
8 灰化物		
9 炭化物		
10 黑灰色砂	炭化物粒 多	



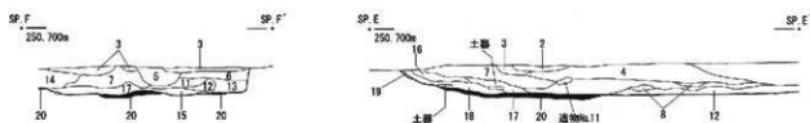
第24図 3号住居跡遺物出土状況図



第25図 3号住居跡カマド土層断面図 (S=1/30)



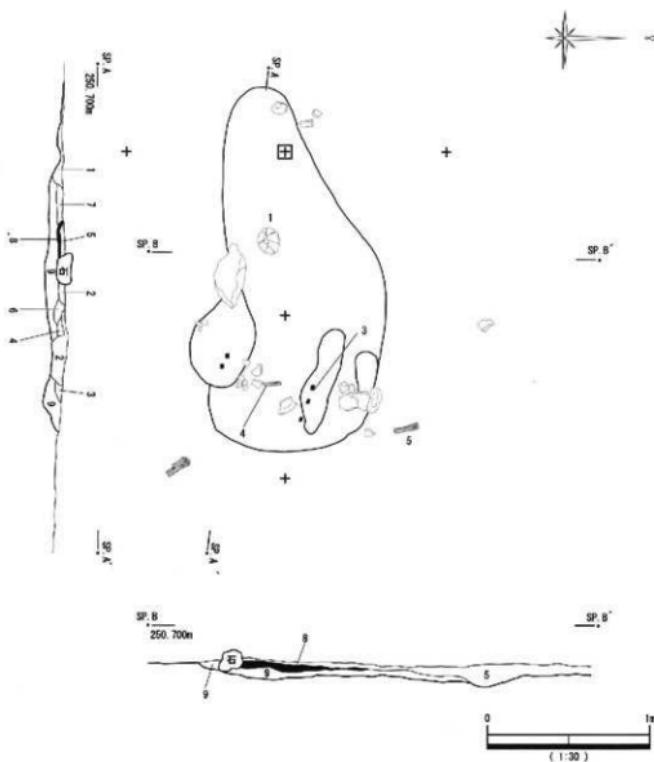
第26図 4号住居跡遺物出土状況図



第27図 4号住居跡カマド土層断面図 (S=1/30)

## 【4号住居跡土層説明】

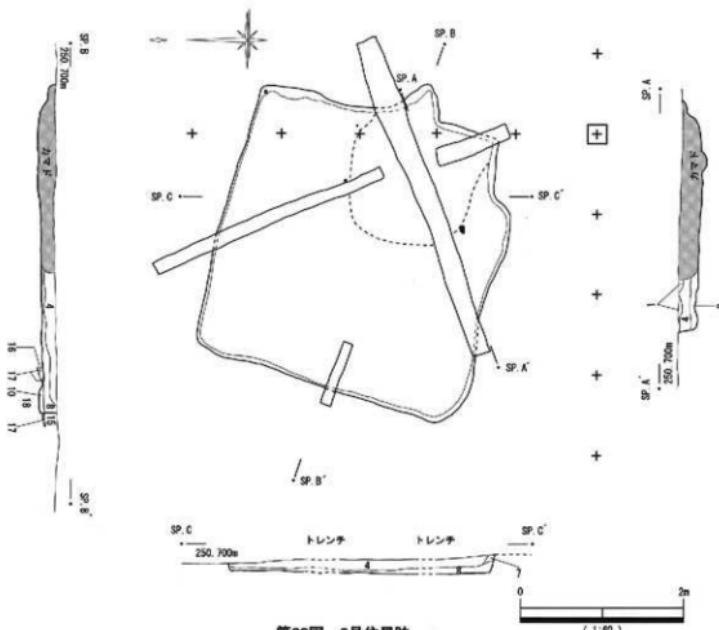
1 線灰色砂	炭化物粒、線灰色砂質シルトブロック 多	11 線灰色シルト質砂	線灰色シルト、炭化物粒、燒土粒 しまり 強
2 線灰色砂	燒土粒・シルトブロック 多	12 線灰色シルト主体	炭化物粒
3 黒灰色砂		13 黒灰色砂	線灰色シルトブロック
4 線灰色砂	炭化物粒、シルトブロック	14 線灰色砂	炭化物粒
5 線灰色シルト		15 黒灰色砂	黒灰色砂
6 線灰色砂	炭化物粒	16 線灰色砂	炭化物
7 線灰色シルト主体	炭化物粒 (カマド廻覆土か)	17 線灰色砂質シルト (カマド廻覆土か)	
8 線灰色シルト主体	炭化物	18 黒灰色砂	線灰色シルト、炭化物粒、燒土粒
9 黒灰色砂	線灰色シルトブロック 多、炭化物	19 線灰色シルト	
10 黒灰色砂		20 炭化物層	



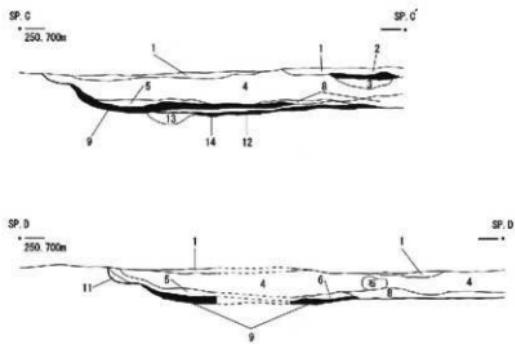
第28図 5号住居跡遺物出土状況図

## 【5号住居跡土層説明】

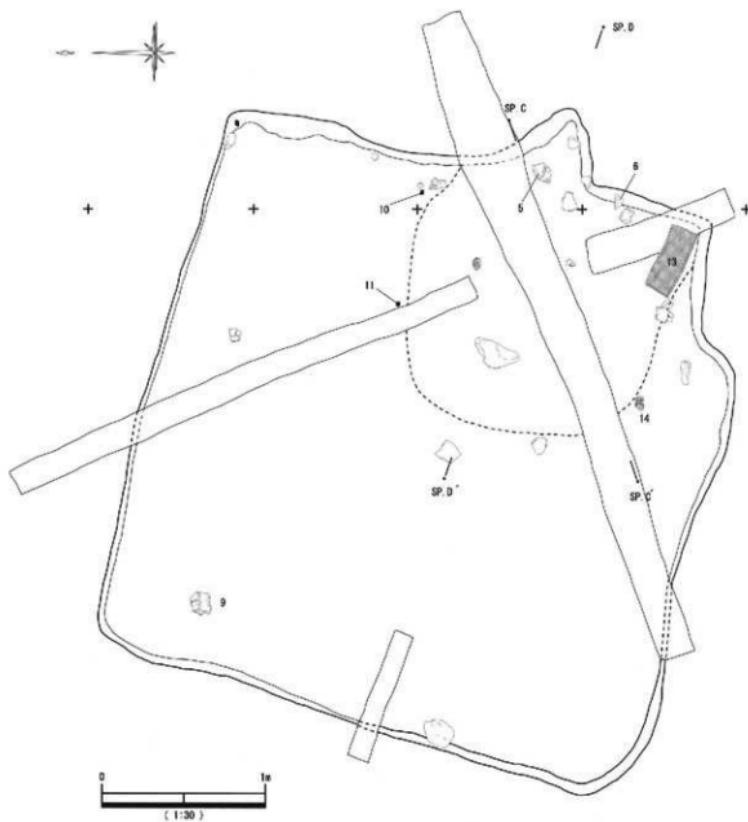
1 黒灰色砂	炭化物粒	6 鹿灰色砂	炭化物粒、燒土粒
2 鹿灰色シルト質砂	灰白色シルト、炭化物粒、燒土粒	7 鹿灰色シルト	炭化物粒
3 黒灰色砂		8 炭化物層	
4 鹿灰色シルト		9 鹿灰色砂	
5 鹿灰色砂	炭化物粒		



第29図 6号住居跡



第30図 6号住居跡カマド土層断面図 (S=1/30)

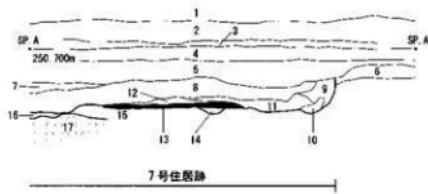


第31図 6号住居跡遺物出土状況図 (S=1/30)

## [6号住居跡土質説明]

- |             |                        |
|-------------|------------------------|
| 1 黒灰色砂      | 炭化物粒                   |
| 2 皮化物       |                        |
| 3 嵌褐色沙質シルト  | 炭化物・焼土 多               |
| 4 燃灰色砂      | 炭化物・焼灰色シルト質砂ブロック       |
| 5 燃灰褐色シルト質砂 | 燃灰色シルト・炭化物・焼土 多        |
| 6 燃灰色砂      | 木繊維（床面直上に堆積する木のクズを含む層） |
| 7 灰褐色砂      |                        |
| 8 燃灰褐色砂     | 炭化物粒                   |
| 9 皮化物       |                        |
| 10 嵌褐色砂     | 燃灰色シルト質砂ブロック           |

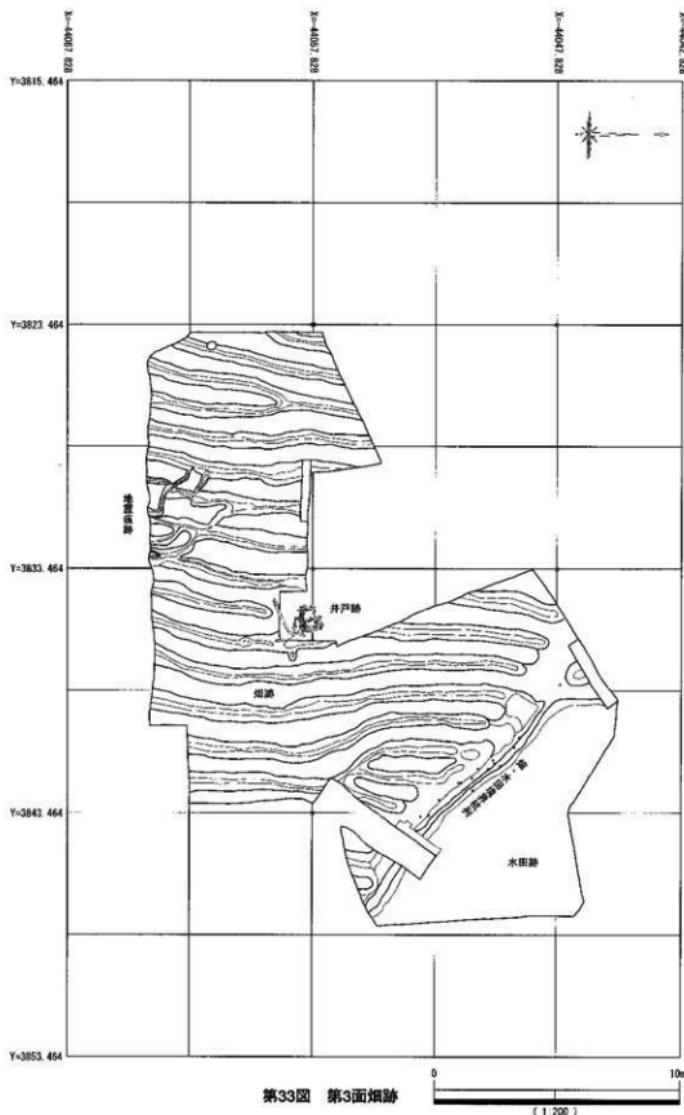
- |               |                     |
|---------------|---------------------|
| 11 燃灰色砂       |                     |
| 12 燃灰色砂質シルト   |                     |
| 13 燃灰褐色シルト    | 焼土・炭化物              |
| 14 皮化物        |                     |
| 15 黄灰色砂       |                     |
| 16 黄灰色砂       | 15層より粗くしまる（隙間を埋める層） |
| 17 燃灰色シルト質細砂  | （床面直上に堆積する層）        |
| 18 燃褐色シルト質シルト | 焼土                  |



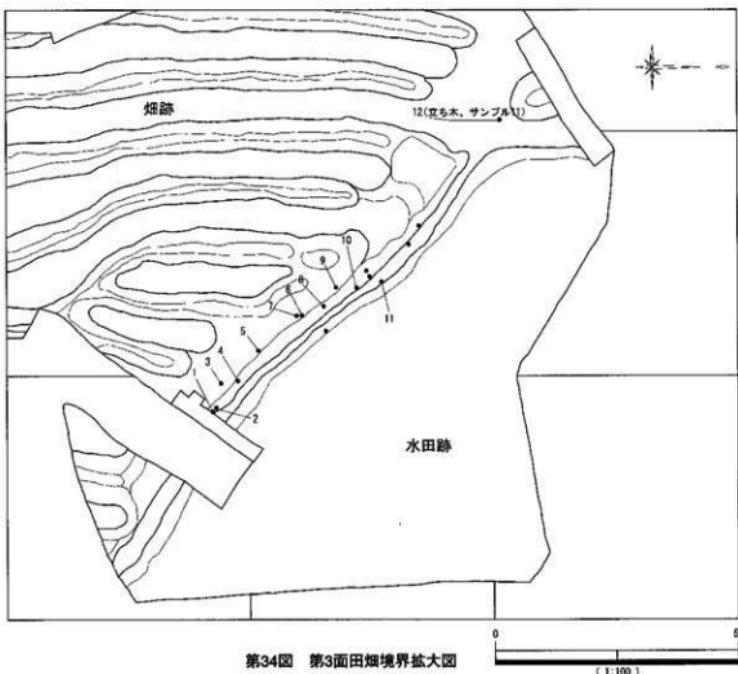
第32図 7号住居跡土層断面図 (S=1/30)

## 【7号住居跡土層説明】

1 黒灰色砂質シルト	10 黒灰色砂
2 黄灰色シルト	11 棕土層 売土主体
3 黑色シルト	12 黄色シルト質砂
4 黑色腐植層	13 腐化物層
5 黑灰色砂	14 黑灰色砂
6 黑灰色砂	15 黄灰色砂 (烟を覆う層)
7 黄色砂	16 黄灰色シルト質砂
8 黑灰色砂	17 黑褐色シルト質砂 相
9 黑褐色砂	

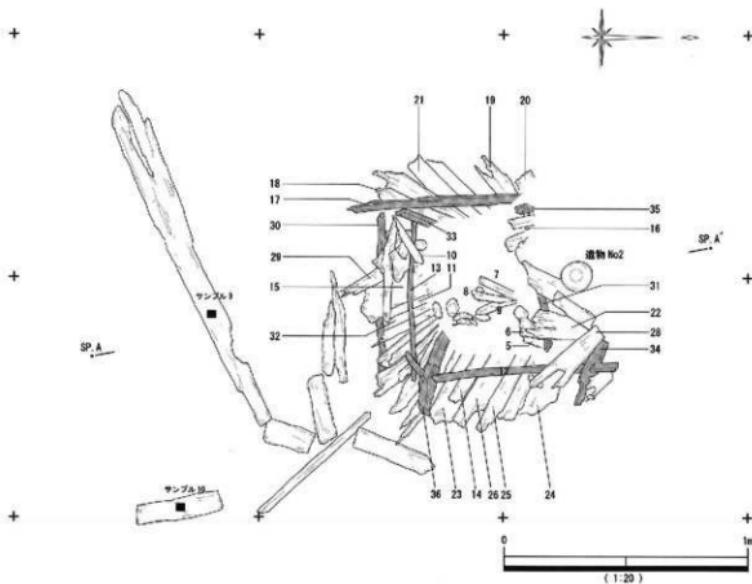


第33図 第3面烟跡

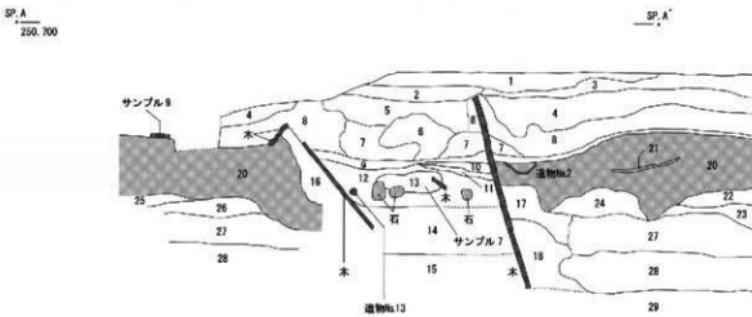


第34図 第3面田畠境界拡大図

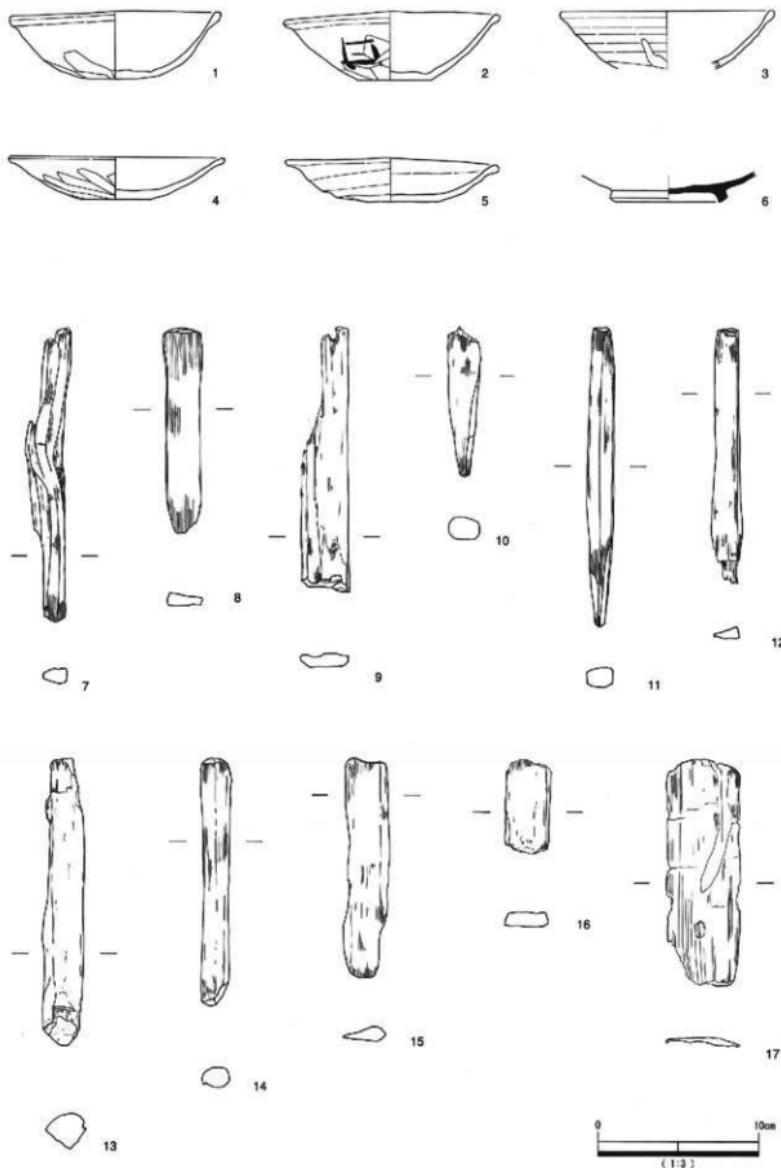
(1:100)



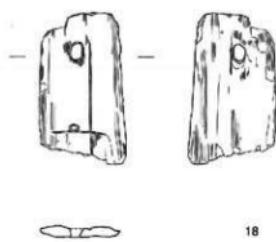
第35図 井戸跡



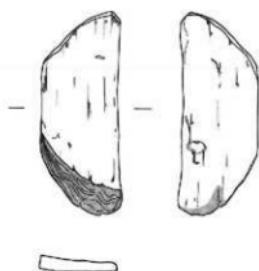
第36図 井戸跡土層断面図 (S=1/20)



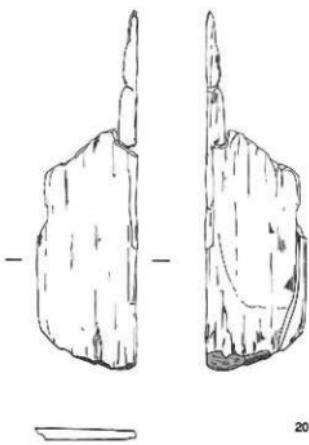
第37図 1号住居跡出土遺物 (1)



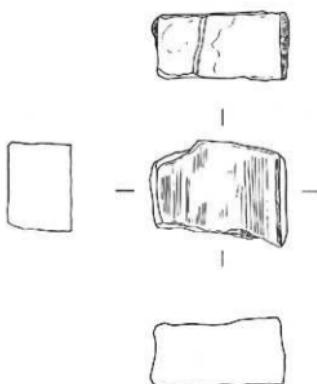
18



19



20



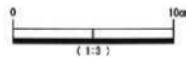
21

1号住居跡

ノ  
南

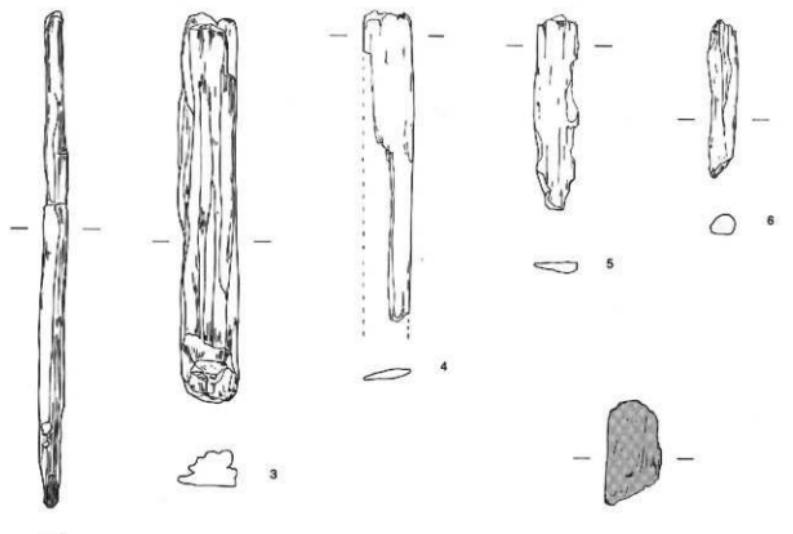
1

2号住居跡



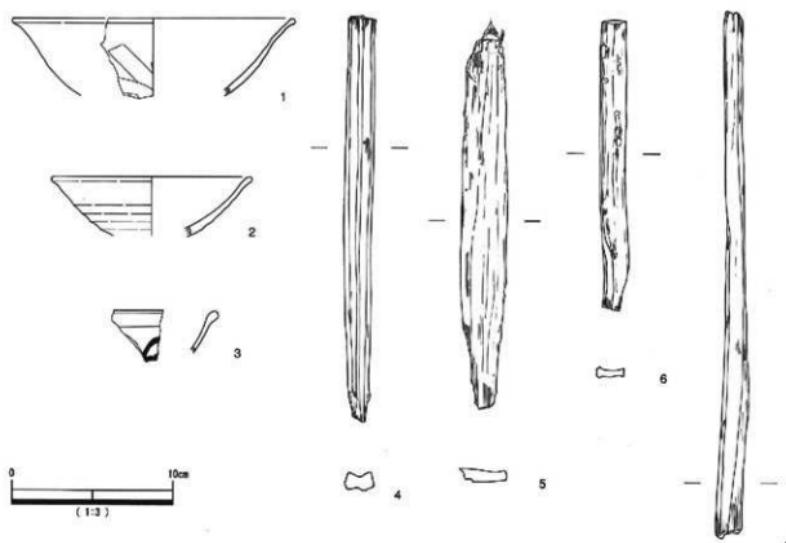
第38図 1号住居跡出土遺物 (2)、2号住居跡出土遺物 (1)

(3次)

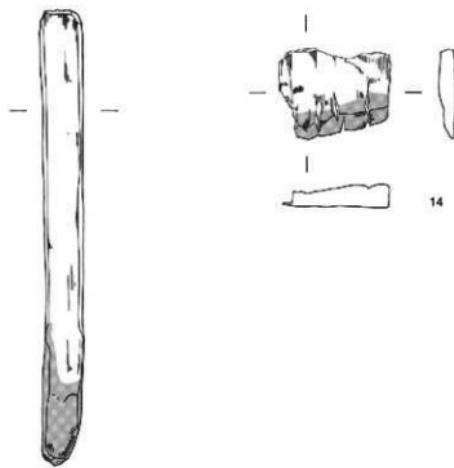
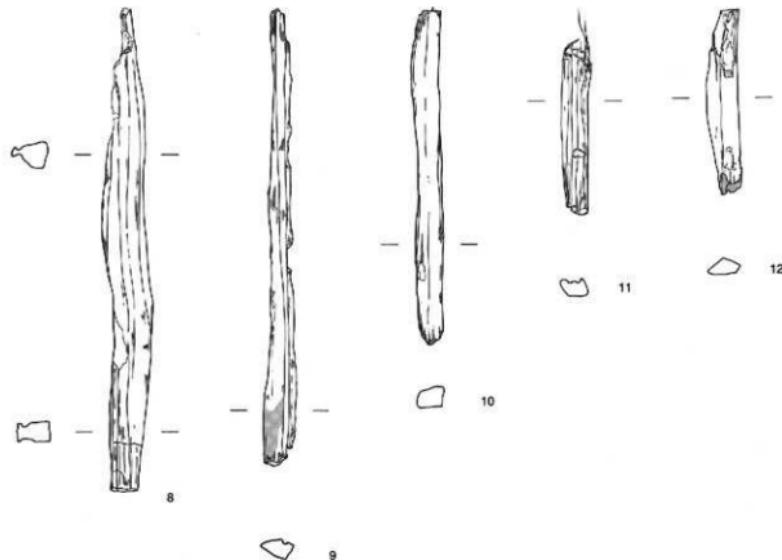


2号住居跡

3号住居跡



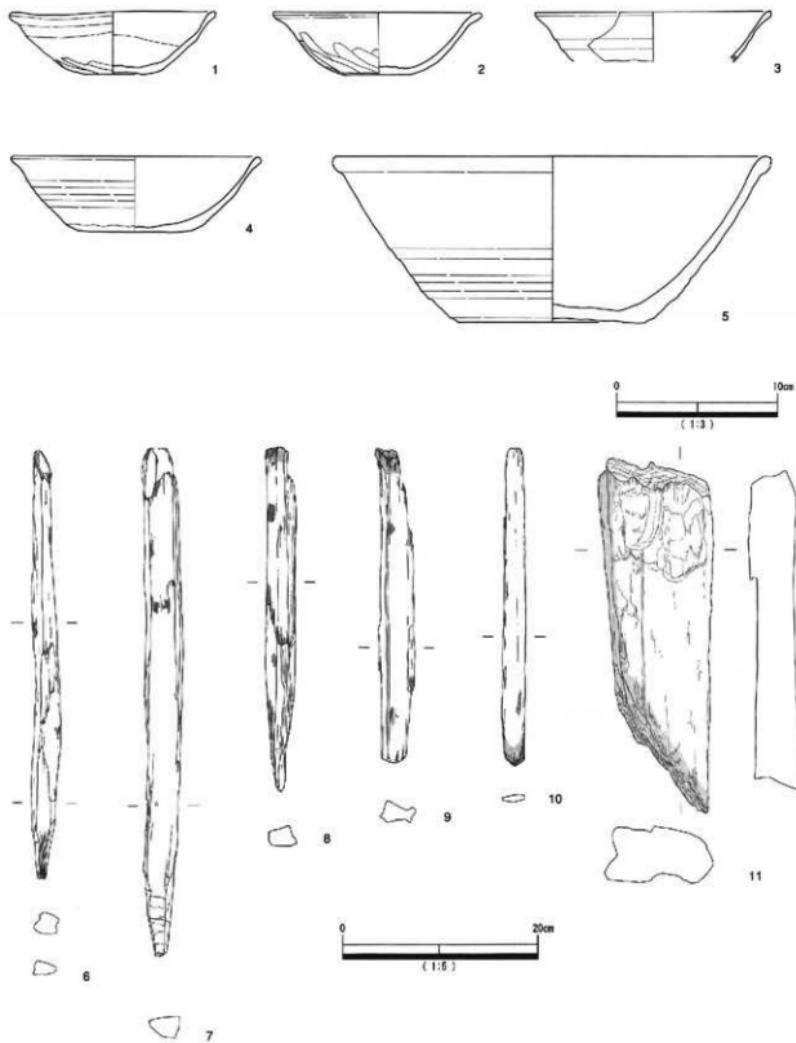
第39図 2号住居跡出土遺物 (2)、3号住居跡出土遺物 (1)



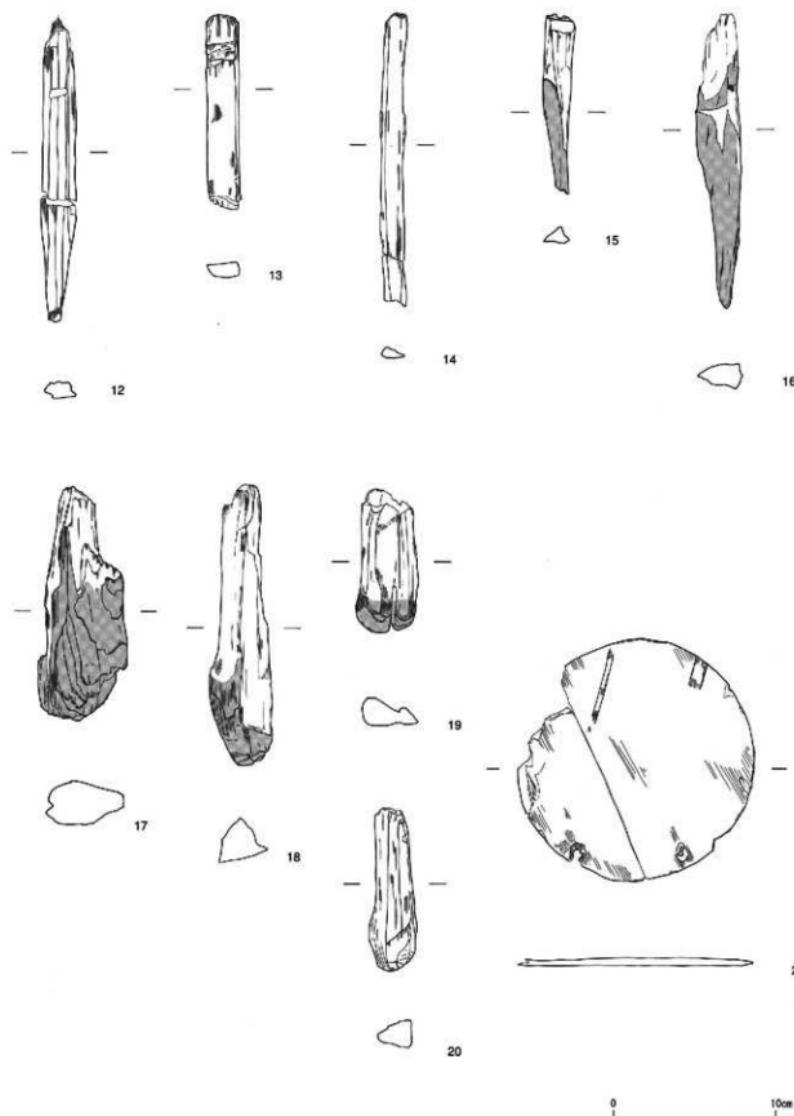
13

15

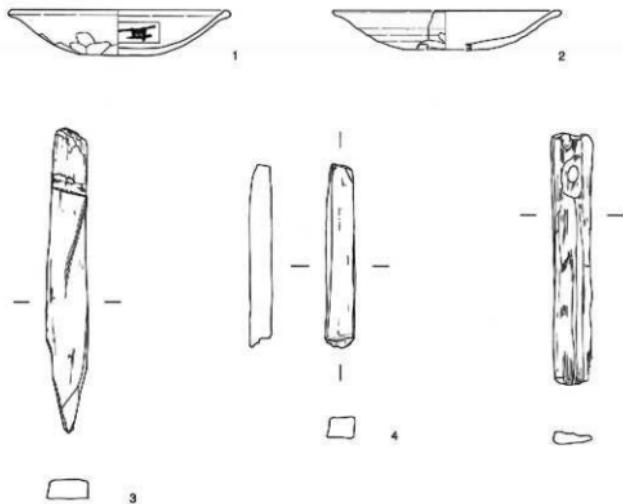
第40図 3号住居跡出土遺物 (2)



第41図 4号住居跡出土遺物 (1)

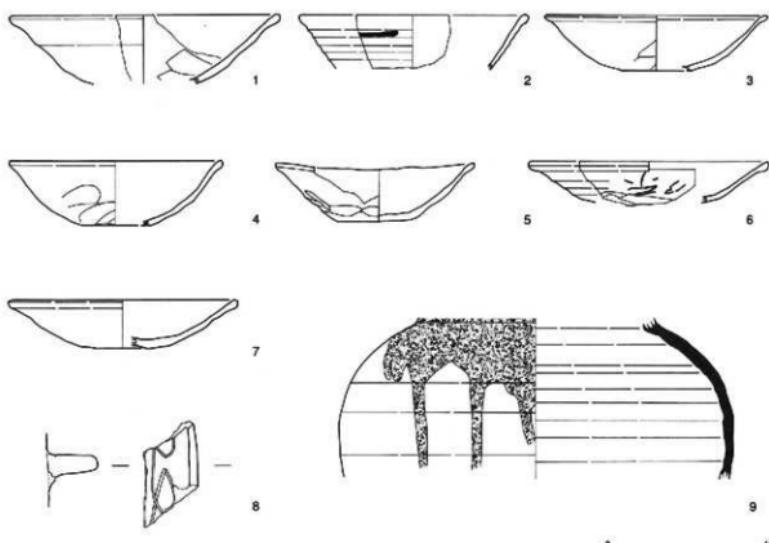


第42図 4号住居跡出土遺物 (2)



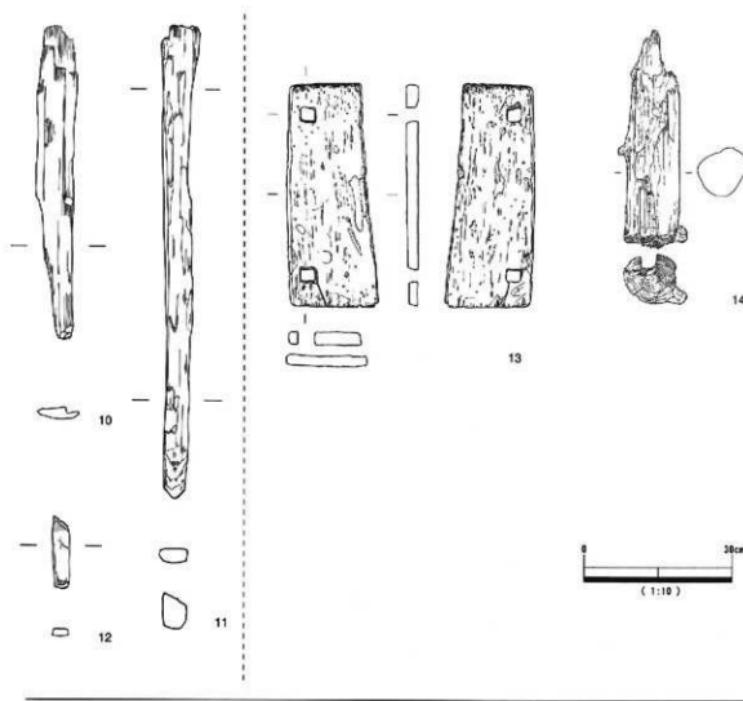
5号住居跡

6号住居跡



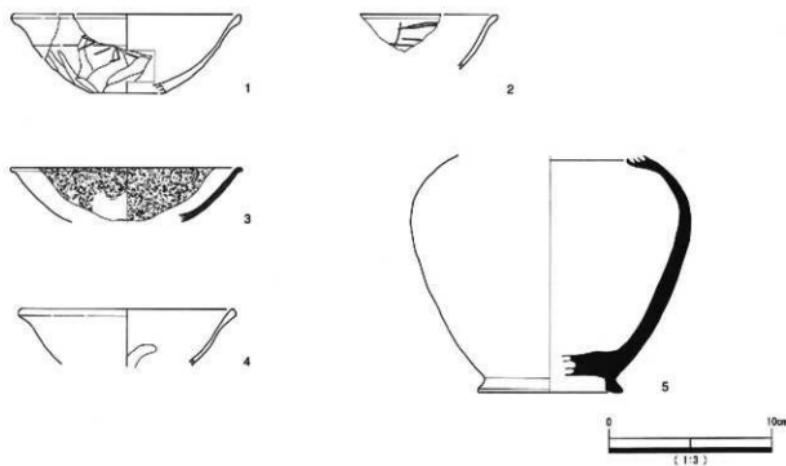
0  
10cm  
(1:3)

第43図 5号住居跡出土遺物、6号住居跡出土遺物(1)

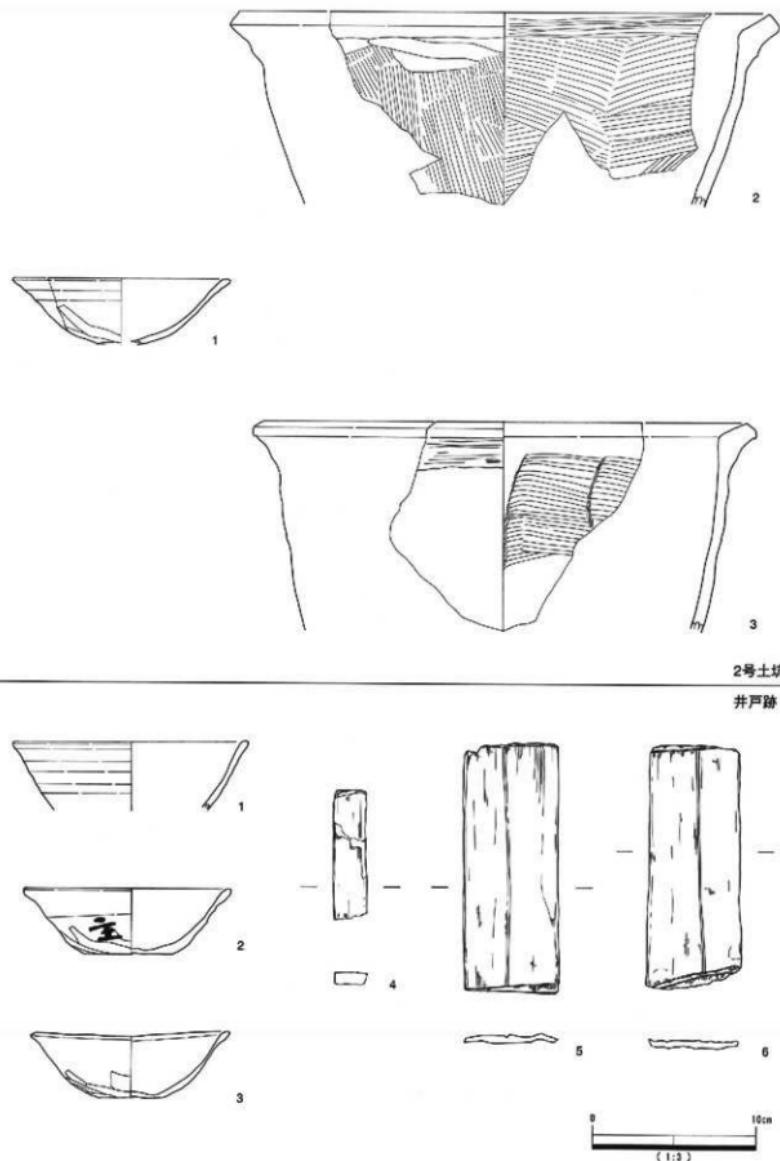


6号住居跡

7号住居跡

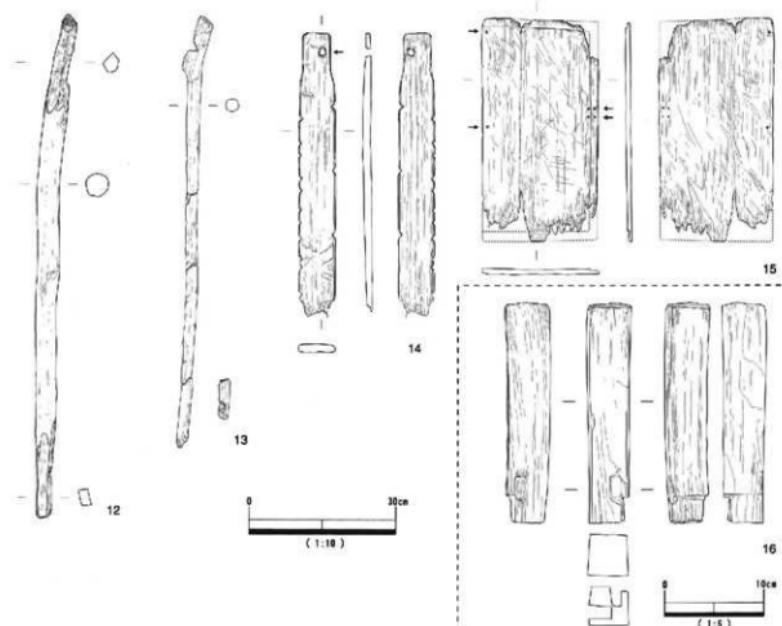
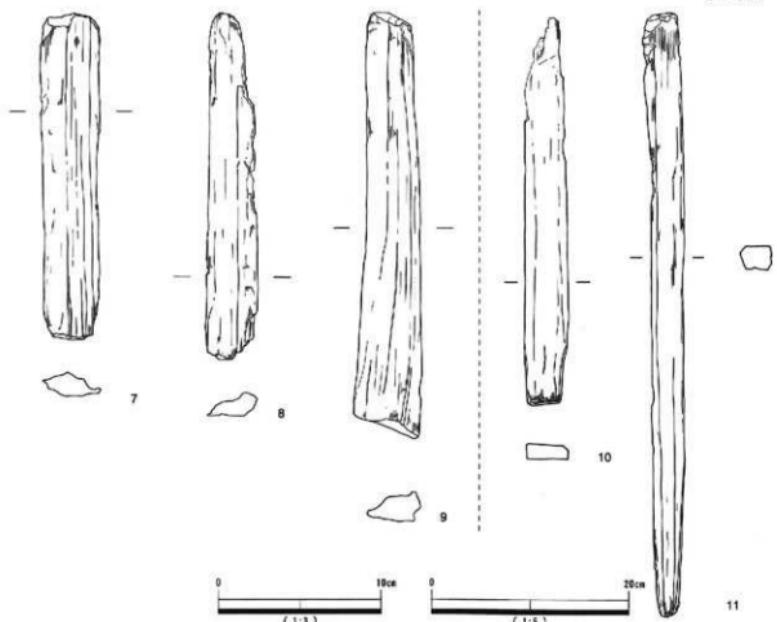


第44図 6号住居跡出土遺物(2)、7号住居跡出土遺物

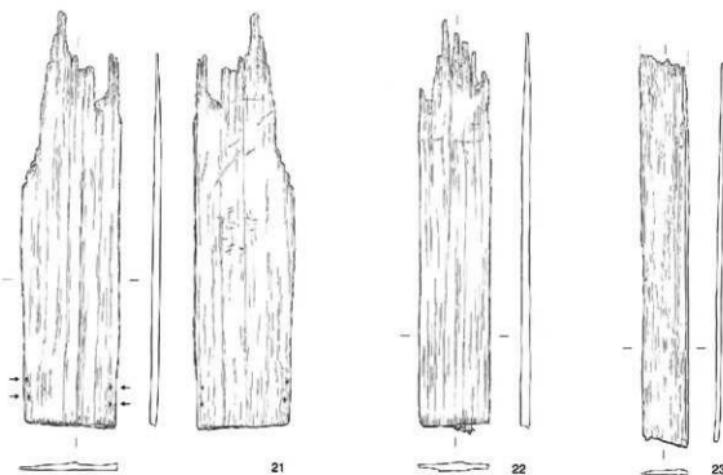
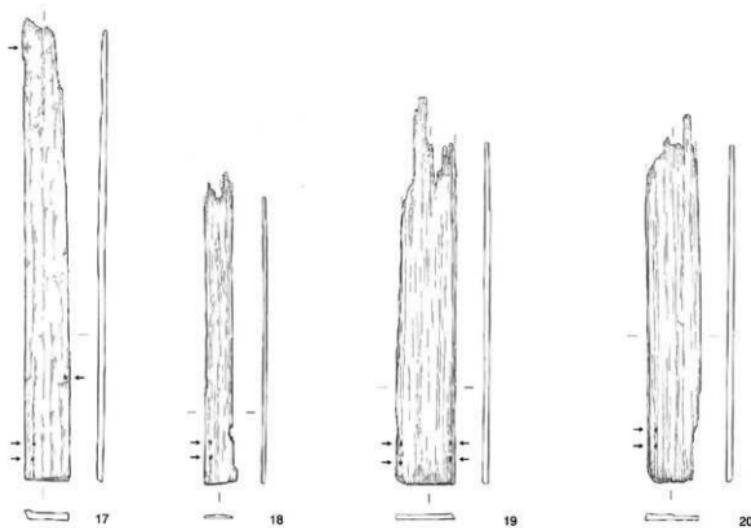


第45図 2号土坑出土遺物、井戸跡出土遺物(1)

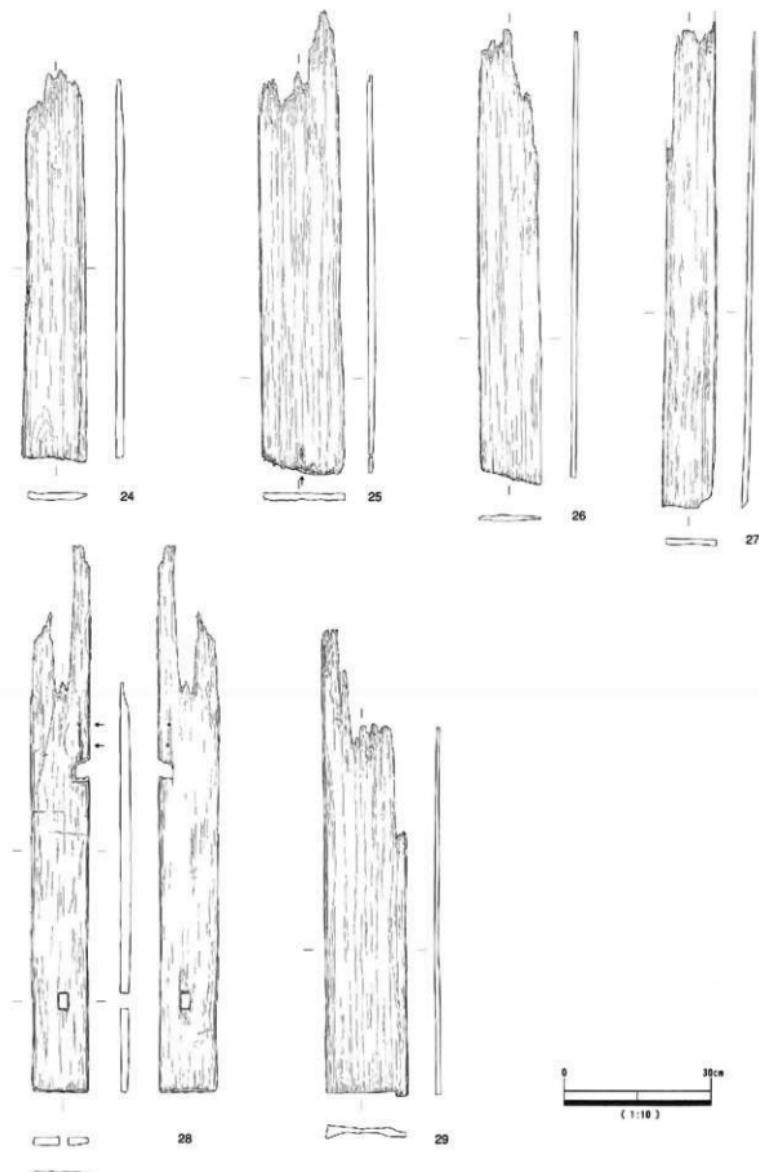
(3次)



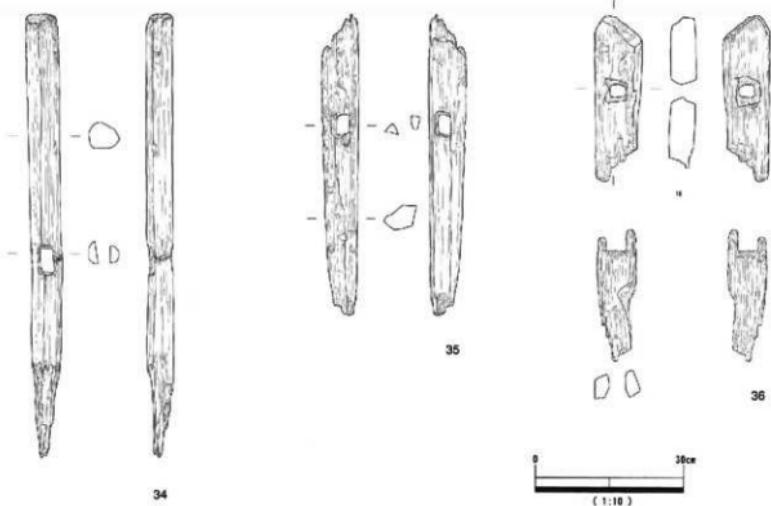
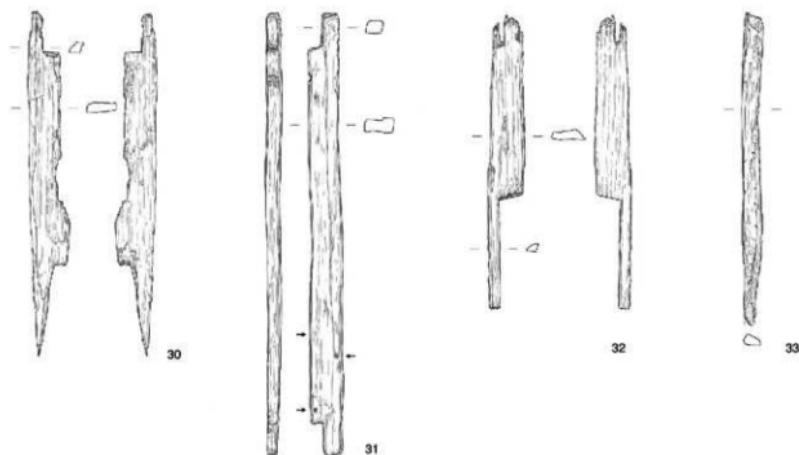
第46図 井戸跡出土遺物 (2)



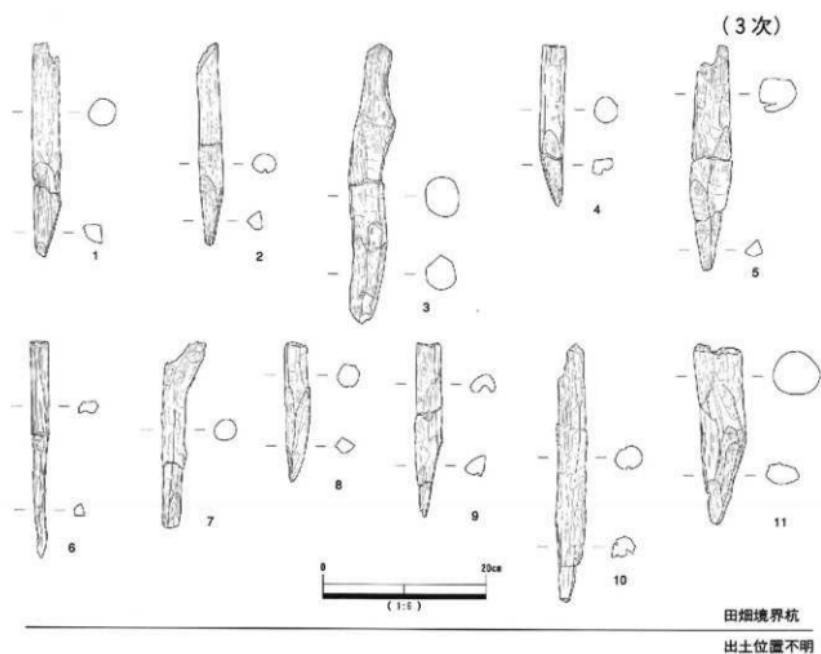
第47図 井戸跡出土遺物 (3)



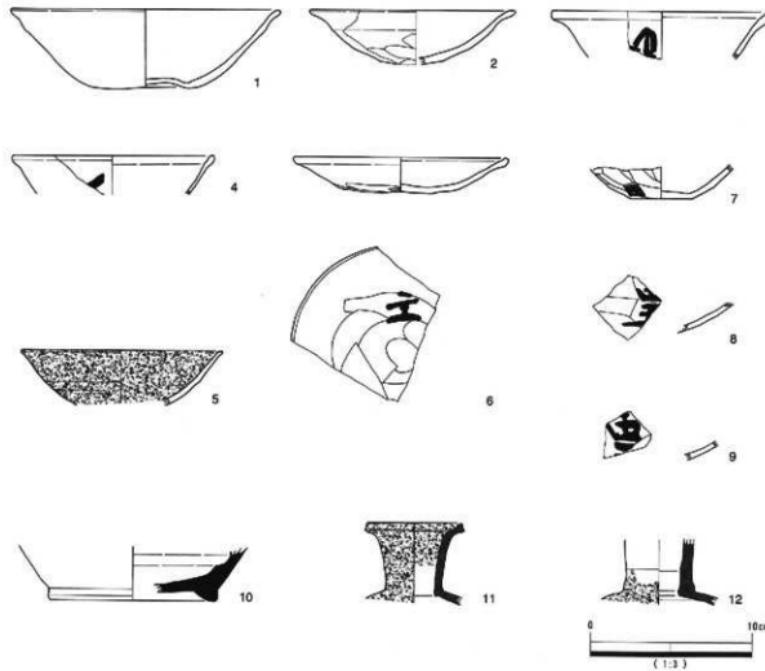
第48図 井戸跡出土遺物 (4)



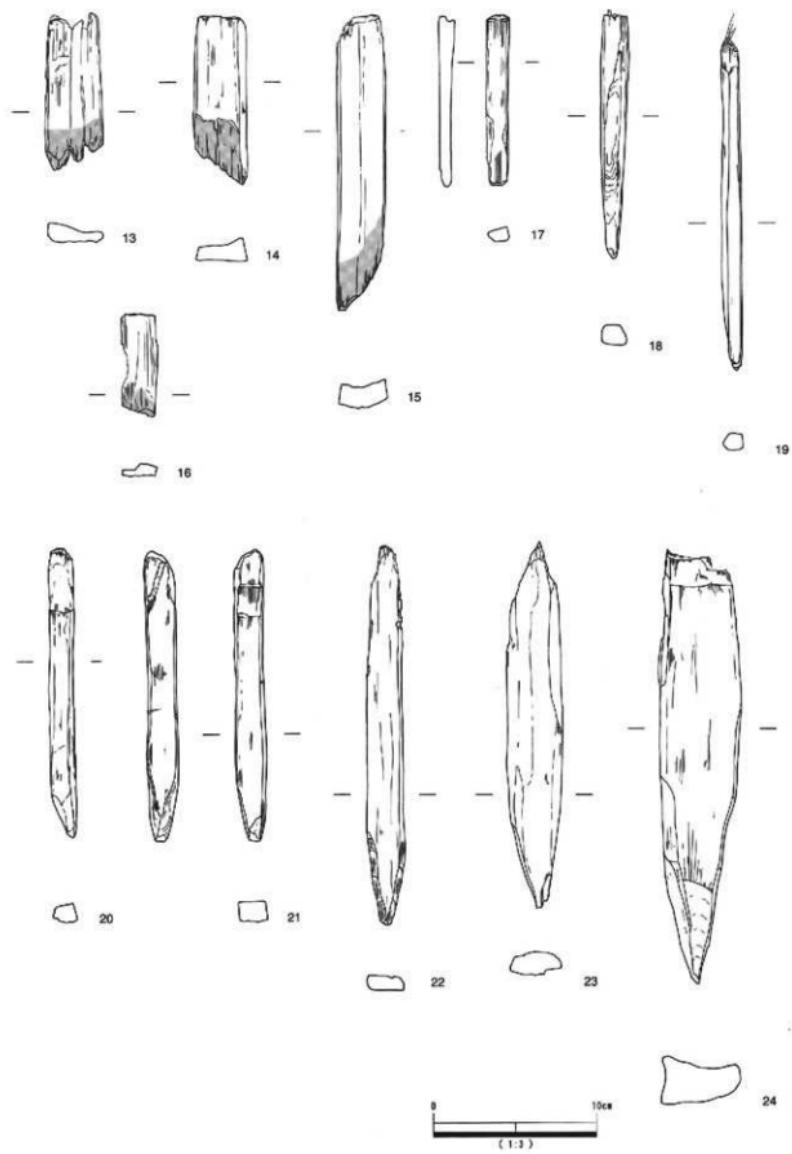
第49図 井戸跡出土遺物 (5)



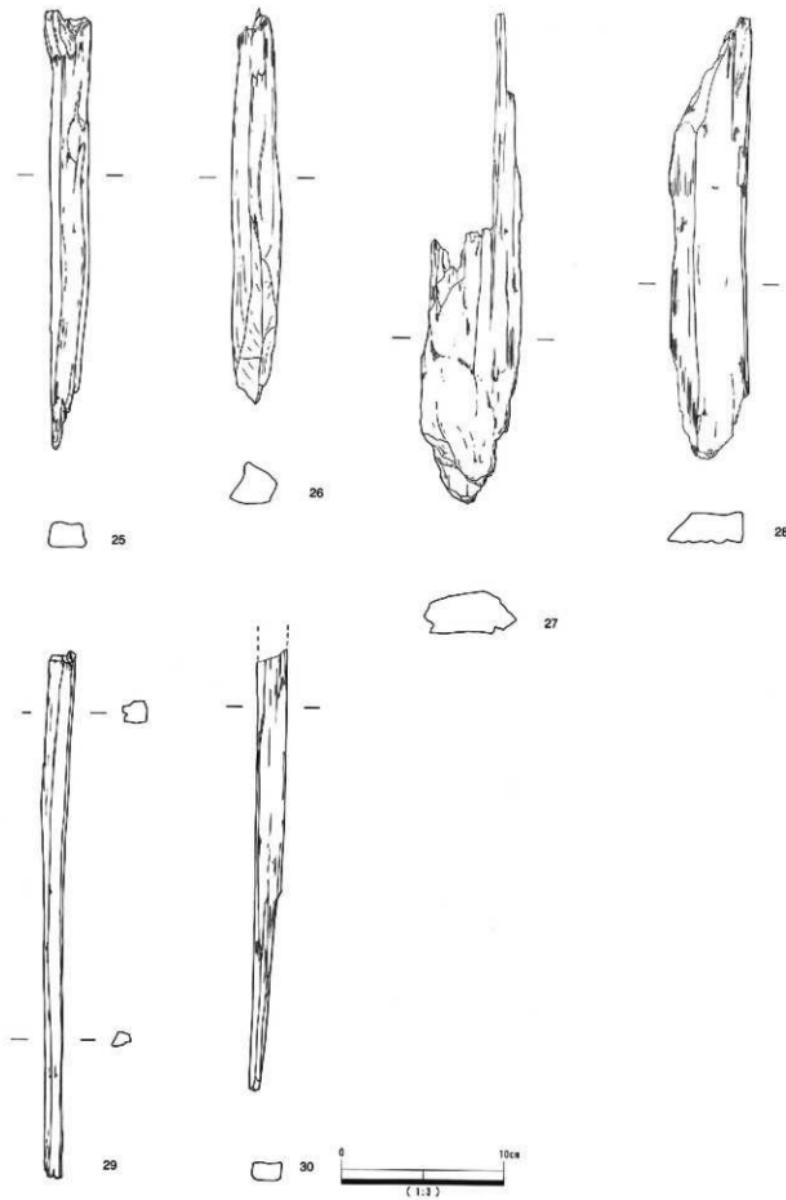
田柵境界杭  
出土位置不明



第50図 田柵境界杭、出土位置不明遺物 (1)



第51図 出土位置不明遺物 (2)



第52図 出土位置不明遺物 (3)

第2表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(1)

## 1号住居跡

図 番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記 番号	備考	
				体外	体内	底部	口径	底径	高さ				
37 1	土師器 灰	暗褐色	赤・白粒	ロクロなで 下平ヘラ	ロクロなで 赤切り後周辺ヘラ	12.5	4.1	4.1	90%	95.97, 95.101		体部外面保ける	
37 2	土師器 灰	暗褐色	赤・白粒、石英 やや粗い	ロクロなで 下平ケズリ	ロクロなで ヘラ削り	12.2	4.5	4.2	80%	103		墨書き「日」	
37 3	土師器 灰	褐色	白・赤色粒 角閃石、石英	ロクロなで 下平ケズリ	ロクロなで ヘラ削り	[12.6]			10%	61			
37 4	土師器 皿	暗褐色	白・赤色粒、石英 角閃石、粘・胎土	ロクロなで 下平ケズリ	ロクロなで ヘラ削り	[12.9]	4.3	2.6	50%	62		外表面保ける	
37 5	土師器 皿	暗褐色	赤・白粒、石英 小石、石英 やや粗い	ロクロなで	ロクロなで 各切り後ケズリ	12.6	?	2.7	100%	51		いびつ	
37 6	灰陶陶器 馬蹄付灰	暗灰色	白色粒	ロクロなで	ロクロなで 高台貼付け			6.3		底部	102		
図 番号	器種	法量(cm) 高さ 幅 厚さ			特徴								注記 番号
37 7	カマド構築材	17.9	2.3	0.9	自然木に近い状態。先端は若干細くなる。								杭1
37 8	カマド構築材	12.5	2.3	0.8	先端を薄く加工。中央やや上の部分が若干細くなる。								杭2
37 9	カマド構築材	16.2	2.9	0.6	粗長い板状。先端平に加工。上端は破損しているが穿孔の痕跡残る。								杭3
37 10	灰状木製品	(9.1)	1.9	1.3	斜削り確認できるのは1面のみで後は丸みを帯びる。								杭4
37 11	灰状木製品	18.2	1.7	1.2	先端斜面あり。								杭5
37 12	灰状木製品	15.5	1.6	0.8	粗長い板状。先端は被削。								杭6
37 13	素卓状木製品	17.5	2.5	2.2	先端斜面あり。								53
37 14	素卓状木製品	15.0	1.9	1.3	先端加工。中央部は廢り減ったように若干細くなる。								73
37 15	素卓状木製品	13.4	2.6	0.9	粗長い板状。先端被削。								23
37 16	不明木製品	(5.6)	2.6	0.9	粗長い板の破片。両側縁のみ形狀を留める。								140
37 17	不明木製品	13.8	4.5	0.4	深い板状。								141
38 18	不明木製品	(9.2)	5.2	0.7	両側縁が薄くななる板状。上端から1.5cm下に穿孔。								139
38 19	不明木製品	12.4	4.6	0.8	両側縁は直線的。端部被削。								15
38 20	不明木製品	(22.0)	6.1	0.7	端部被削。一部段差あり。								100
38 21	不明木製品	8.3	5.7	4.1	上端は段差が残る。他の面も被削面を除き直線的に加工される。								64

## 2号住居跡

図 番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記 番号	備考	
				体外	体内	底部	口径	底径	高さ				
39 1	土師器 灰	暗褐色	赤・白粒							口部被削A	2号住	墨書き	
図 番号	器種	法量(cm) 高さ 幅 厚さ			特徴								注記 番号
39 2	素卓状木製品	30.3	1.6	1	先端削り。被削。完形。								122
39 3	不明木製品	23.9	3.6	2.1	先端は丸みを寄り2cm以上にキザミあり。先端被削。完形。								121
39 4	不明木製品	(19.1)	2.9	0.5	粗長い板状。								112
39 5	木片	11.9	2.7	0.6									106
39 6	木片	9.7	1.8	1.2									104
39 7	不明木製品	(6.4)	3.3	0.8	全体被削。								119

第3表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(2)

## 3号住居跡

回	番号	器種	色調	土質	整形技術・特徴				法量(cm) 底径 器高	残存率	注記 番号	備考	
					体外	体内	底部	口径					
39	1	土師器 杯	薄橙色	白・赤色粒 角閃石・石英	ロクロなで	ロクロなで		(17.0)		10%	184		
39	2	土師器 杯	褐色	白・赤色粒・石英	ロクロなで	ロクロなで		(12.0)			190.191		
39	3	土師器 杯	暗褐色	白・赤色粒 角閃石	ロクロなで	ロクロなで					CIM部破片	3往 古青	
回	番号	器種	法量(cm) 長さ 幅 厚さ				特徴						注記 番号
39	4	カマド構築材	24.8	1.7	1.1	先端細くなる。上端平に加工。実芯。							机25
39	5	カマド構築材	21.6	2.8	0.8	板状で先端は両側縁を削ることで鋸くする。							机24
39	6	カマド構築材	17.8	1.6	0.6	先端破損。上端は強い力で押されたように若干ぶつぶつしている。							机27
39	7	カマド構築材	32.2	1.6	1.3	断面正方形の棒状。							209
40	8	カマド構築材	29.7	2.6	1.7	先端若干細くなり端は平ら。							207
40	9	カマド構築材	28.1	2.0	1.3	両端加工。先端の方が幅広くなり被熱。実形。							206
40	10	直串状木製品	20.5	1.7	1.2								185
40	11	杭状木製品	9.9	1.6	1.1	先端被熱か。							机22
40	12	直串状木製品	11.4	1.9	1	両端加工。先端被熱。実形。							201
40	13	直串状木製品	27.7	2.3	1.3	先端被熱。実形。							187
40	14	不明木製品	(5.6)	(6.6)	1.4	先端は徐々に薄くなり鋸くなる。薄くなった部分が被熱。							189

## 4号住居跡

回	番号	器種	色調	土質	整形技術・特徴				法量(cm) 底径 器高	残存率	注記 番号	備考	
					体外	体内	底部	口径					
41	1	土師器 杯	暗褐色	赤・白・白、石英	底面立上がりケツリ	ロクロなで	ホコリの後 周辺ケズリ	12.2	3.7	3.8	100%	235	
41	2	土師器 杯	暗褐色	赤・白・白、石英	ロクロなで 下半ヘラ	ロクロなで	ヘラ	12.3	3.9	3.9	80%	247	
41	3	土師器 杯	灰褐色	白・赤色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)				CIM部破片	4往
41	4	土師器 杯	褐色	赤・白粒・石英	底部立上がりケツリ	ロクロなで	ホコリの後 周辺ヘラ削り	(14.7)	6.9	4.6	50%	244	
41	5	末挽きの鉢	灰褐色	小石を含む赤・白・石英	小石を含む赤・白・石英は含まない	ロクロなで	ホコリの後 周辺削る	ロクロなで	ホコリの後 ヘラ削り	(26.2) (11.1)	10.1	60%	245
回	番号	器種	法量(cm) 長さ 幅 厚さ				特徴						注記 番号
41	6	カマド構築材	43.8	2.8	2.2	先端4面削り。上端わずかに被熱。実形。							机20
41	7	カマド構築材	52.1	3.7	2.2	先端4面削り。上端なめらかに収束。実形。							机19
41	8	カマド構築材	35.2	3.0	2.0	先端は両側縁を削る。上端は被熱。							机32
41	9	カマド構築材	32.2	3.7	2.2	先端破損。上端被熱。							机31
41	10	直串状木製品	32.2	2.3	0.7	先端被熱。若干直筒状のようにも見える。							253
41	11	不明木製品	36.5	11.3	5.5	邊縁を被熱。							236
42	12	杭状木製品	18.3	2.1	1.0	先端4面削り。							机34
42	13	杭状木製品	11.8	2.0	0.9	上端2cm下にキサミあり。							机33
42	14	直串状木製品	17.9	1.5	0.6								246
42	15	直串状木製品	11.1	1.8	1.0	先端加工・被熱。							248
42	16	直串状木製品	18.0	2.7	1.6	先端はなめらかに鋸く。大部分が被熱。							243

第4表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(3)

## 4号住居跡

回	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
42	17	不明木製品	14.2	5.3	2.2	大部分被熱。	249
42	18	不明木製品	17.1	3.8	2.7	両面被熱、中央部が被熱度ないのは被熱後に削られているため。	238
42	19	不明木製品	8.8	3.5	1.7	先端被熱。	234
42	20	不明木製品	9.9	2.9	1.7		239
42	21	曲物	$\phi=14.8$		0.4	底板。	3626

## 5号住居跡

回	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)	残存率	注記番号	備考	
					体外	体内	底部					
43	1	土師器 灰	褐色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	前面へラ削り	12.9	4.7	2.8	80%	
43	2	土師器 灰	反褐色	白・赤色粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(13.6)	(5.0)	(2.4)	口縁修理片	
											表面磨い	
回	番号	器種	法量(cm)			特徴						注記番号
			長さ	幅	厚さ							
43	3	カマド構成材	18.6	2.5	1.2	面白い板状、先端両面脚を削り鋸くする。上端3cm下にキズ(きず)。						柱18
43	4	直串状木製品	11.3	1.8	1.3	両面被熱、先端は段差を作るよう加工、上端は徐々に細くなる。完形。						169
43	5	不明木製品	15.3	2.5	0.8	上端2.5cm下に穿孔、完形。						154

## 6号住居跡

回	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)	残存率	注記番号	備考	
					体外	体内	底部					
43	1	土師器 灰	暗褐色	赤・白色粒、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	ヘラケズリ	(16.4)		20%	6住	
43	2	土師器 灰	黒色 外: 褐色	白・赤粒	ロクロなで (焼失)	ロクロなで		(14.0)		口縁修理片	6住	
43	3	土師器 灰	黒色	白色粒	ロクロなで	ロクロなで		(13.2)	(6.2)	(2.9)	口縁修理片	
43	4	土師器 灰	暗褐色	赤・白粒、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(13.0)	(4.2)	3.9	20%	
43	5	土師器 灰	褐色	赤・白粒、小石	ロクロなで 粘土が附着している	ロクロなで	ヘラ削り	12.0	3.6	4.5	70%	
43	6	土師器 灰	褐色	赤・白粒、石英 やや焼い、小石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(14.4)			10%	
43	7	土師器 灰	赤褐色	赤・白粒、赤多い 鐵	ロクロなで 鐵	ロクロなで		(14.0)	(3.4)	2.9	30%	
43	8	土師器 灰	褐色	白色粒、石英、角閃石							別の破片	
43	9	灰陶物器 壺	暗灰色	白色粒 1cm以下の小石	ロクロなで 胴下半はケズリ	ロクロ痕跡					228	
回	番号	器種	法量(cm)			特徴						注記番号
			長さ	幅	厚さ							
44	10	板状木製品	19.1	2.3	1.3	先端削り。						柱28
44	11	板状木製品	28.9	2.2	2.2	先端削り。						柱29
44	12	不明木製品	4.4	1	0.4	端部被熱。						
44	13	板材	45.4	17.5	2.6	正方形の板を半分に削ったよう、3×3cmの力形の孔が2箇所開く。根板か。						214
44	14	柱材	(45.2)		0=10	自然木の表面を平に加工する。						216

第5表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(4)

## 7号住居跡

図番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)	残存率	注記番号	備考
				体外	体内	底部				
44-1	土師器 灰	赤橙色	白・赤粒	ロクロなで 下手ケズリ	ロクロなで	周辺ケズリ	(13.8)	(4.5)	4.8	10%
44-2	土師器 灰	赤橙色	白・赤粒・角閃石	ロクロなで	ロクロなで					口縁部破片
44-3	灰釉陶器 灰	緑灰色	白・黒色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)			口縁部破片
44-4	土師器 灰	灰褐色	白赤色粗ロクロなで		ロクロなで		(12.6)			口縁部破片
44-5	須恵器 灰	黒灰色	白色粒・角閃石?	ロクロ	ロクロ		(8.7)		20%	7往 表面・内面に漆付兼

## 2号土坑

図番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)	残存率	注記番号	備考
				体外	体内	底部				
45-1	土師器 灰	赤橙色	白・赤色粒・小石・石英	ロクロなで 下手ケズリ	ロクロなで		(12.8)	(3.0)	(3.9)	10%
45-2	土師器 灰	赤橙色	露母・白色粒・赤色粒	糊ハケ	糊ハケ		(32.0)			口縁部破片 86.87
45-3	土師器 灰	赤橙色	金雲母・石英・長石	なで	体面は糊ハケ		(29.2)			口縁部破片 89

## 井戸跡

図番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)	残存率	注記番号	備考
				体外	体内	底部				
45-1	土師器 灰	青色	白・赤色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)			10% 井戸中層 外縁とも仕上げ無
45-2	土師器 灰	青褐色	赤・白粒・石英	ロクロなで 下手ボトム	ロクロなで	糸切り	12.3	5.4	4	100% 井戸1 圖書「主」出土位置は井戸の外側
45-3	土師器 灰	黑色	赤・白粒・石英	ロクロなで 下手ボトム	ロクロなで	糸切り後ヘラ	11.7	4.0	4.1	100% 井戸中層
図番号	器種	法量(cm)			特徴					
		長さ	幅	厚さ						
45-4	不明木製品	7.0	2.0	0.8	この大きさで完結している。完形。					
45-5	不明木製品	15.4	5.7	0.5	削い板状。先端は斜め削っている。完形。					
45-6	不明木製品	15.4	5.4	0.5	削い板状。先端は斜め削っている。完形。					
45-7	不明木製品	20.0	3.4	1.5	両端加工。完形。					
45-8	不明木製品	21.3	2.9	1.4	両端加工。完形。					
45-9	不明木製品	26.1	4.1	1.8	両端加工。完形。					
45-10	不明木製品	35.5	4.3	1.6	先端6cmは若干削ぐくなる。					
45-11	不明木製品	61.5	3.5	2.3	上端4cm下に帯状の瘤みが残る。					
45-12	練状木製品	103.2	4.5	4.7	断面円形の木の両端を削り断面形状のノゾを作り出している。					
45-13	練状木製品	(88.2)	2.6		自然木を利用し差し込みを入れている。					
45-14	不明木製品	(58.0)	7.3	1.7	板状で幅の狭くなる底部に径=1.3cmの孔を開ける。両側面にはキザミが複数施される。					
45-15	板材	45.6	23.5	1.1	長方形の外側を1辺を缺き1段低く削っている。穿孔X7。盤の転用か。表面には擦ったような痕跡あり。					
45-16	角材状木製品	22.3	4.2	4.2	角材の断面がホソイ状に加工されている。					
45-17	板材	(95.0)	8.8	1.4	先端削り削り穿孔X4。					
45-18	板材	(64.2)	6.5	0.7	先端削り削り。側面に方形の削り。穿孔X2。					
45-19	板材	(79.5)	12.0	1.0	先端削り削り。穿孔X4 (2対)。					

第6表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(5)

## 井戸跡

回	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
47	20	板材	(75.5)	10.8	1.4	先端鋸ぎ歯り。穿孔×2。	52
47	21	板材	(86.2)	19.8	1.6	先端鋸ぎ歯り。穿孔×4(2N)。	35
47	22	板材	(79.3)	14.5	1.8	先端鋸ぎ歯り。	13
47	23	板材	(80.2)	9.7	1.2	先端平に削る。	28
48	24	板材	(80.7)	13.0	1.5	先端鋸ぎ歯り。	21
48	25	板材	(95.3)	16.6	1.5	先端近く中央に穿孔×1。	25
48	26	板材	(93.4)	12.4	1.2	先端鋸ぎ歯り。	27
48	27	板材	(99.7)	10.4	1.3	先端加工。	29
48	28	板材	(113.3)	11.8	2.0	ホノ穴状の方形の穴を2箇所。穿孔×2。	12
48	29	板材	(95.5)	16.5	2.8	先端平に削る。	40
49	30	角材状木製品	(70.7)	8.0	2.0	両端を4×8.4×20cm以上切り取って段をつける。	49
49	31	角材状木製品	90.6	6.0	3.0	両端を2.5×6.5, 2.5×7.0mm切り取って段をつける。穿孔×3, キザミあり。形態。	53
49	32	角材状木製品	(60.4)	6.8	2.1	5×22cmを切り取り段をつける。	45
49	33	椎状木製品	(64.2)	4.0	2.0	先端は所々により鋸ぐくなる。	15
49	34	椎状木製品	90.9	6.6	5.2	先端形状に鋸ぐくなる。ホノ穴が中央や下に開く。	19
49	35	椎状木製品	(61.7)	7.7	5.0	ホノ穴×1。先端は徐々に鋸ぐくなる。	54
49	36	角材状木製品	-	9.6	5.2	角材状で上端2面も削る。ホノ穴2箇所開く。ホノ穴は前後から分けて穴を開けたようで中心部で最も狭くなる。	18

## 田畠境界杭

回	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
50	1	杭	26.4	3.4	3.3	1面削り。	1-1
50	2	杭	24.8	2.3	2.3	3面削り。	1-2
50	3	杭	34.4	4.7	4.9		2
50	4	杭	19.9	2.9	3.1	4面削り。	3
50	5	杭	29.7	5.0	4.1	3面削り。	4
50	6	杭	26.6	2.4	1.5		5
50	7	杭	22.9	4.1	2.8		6
50	8	杭	17.1	3.0	2.7	4面削り。	7
50	9	杭	21.4	3.3	2.5	1面削り。	8
50	10	杭	31.8	3.6	2.8	4面削り。	10
50	11	杭	22.1	5.7	5.2	2面削り。	9

第7表 平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表(6)

出土位置不明

回	番号	器種	色調	胎土	整形技術・特徴			法量(cm)	現存率	注記番号	備考	
					体外	体内	底部					
50	1	土師器 片	黒褐色	白粧(赤鉄はわずか) 角閃石	ロクロなで	ロクロなで	条切り後なで	(16.1)	4.7	4.9	50%	3 底部は強く押したのかくぼんしている。
50	2	土師器 片	褐色	白・赤色粒・角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(12.2)			20%	252
50	3	土師器 片	褐色	白・赤色粒・角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(13.5)			口縁破片	表模 暗面
50	4	土師器 片	褐色	白・赤色粒・角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(12.0)			口縁破片	表模 暗面
50	5	灰釉陶器 片	暗灰色	白色粒	ロクロなで 下半カラ調整	ロクロなで		(12.0)			口縁破片	26、表模
50	6	土師器 片	赤褐色	赤・白粒・角閃石	ロクロなで 立ち上り(ケズリ)	ロクロなで	条切り(側 周辺削り)	(12.7)	(4.0)	2.1	30%	底模 表模=「主」
50	7	土師器 片	褐色	赤・白粒・角閃石	ロクロなで 立ち上り(部分ケズリ)	ロクロなで	ヘラ削り	(3.8)			底部破片	表模 暗面=「田」
50	8	土師器 片	褐色	白・赤粒・角閃石	ケズリ						底下半模片	表模 暗面
50	9	土師器 片	薄褐色	白・赤粒・角閃石	ロクロなで	ロクロなで					底下半模片	表模 暗面
50	10	調理器 盤	暗灰色	白色粒	ロクロへらなで	ロクロなで	へら調整	(10.0)			底部破片	表模
50	11	灰釉陶器 盤	暗灰色	白色粒・黑色粒	ロクロなで	ロクロなで		(5.6)			盤部破片	24、表模(3.4)
50	12	灰釉陶器 盤	暗灰色	混入物のはとんどない緻密な胎土	ロクロなで施釉	ロクロなで					頭部破片	表模 頭部径(4.0)
回	番号	器種	法量(cm)	長さ	幅	厚さ	特徴					注記番号
51	13	不明木製品	9.6	3.5	1.2		板状。先端斜めに削り被熱。					11
51	14	不明木製品	10.3	3.1	1.4		板状。先端斜めに削り被熱。変形。					13
51	15	不明木製品	18.1	2.9	1.3		板状。先端斜めに削り被熱。変形。					5
51	16	不明木製品	6.3	2.1	0.8		先端被熱。					32
51	17	車輪状木製品	10.4	1.3	1.0		上端斜度を持つ。先端に向かって薄くなる。変形。					
51	18	車輪状木製品	14.9	1.7	1.2		先端斜利。					155
51	19	車輪状木製品	20.2	1.2	1.0		先端斜利。					7
51	20	車輪状木製品	17.8	1.6	1.2		先端斜利。変形。					10
51	21	車輪状木製品	18.7	1.9	1.3		先端斜利。上端から5.3cmに窪み。変形。					6
51	22	車輪状木製品	(23.2)	2.3	0.9		先端は両側縁を削り板的に。上端から5.5cm以内の両側縁にキザミあり。					12
51	23	車輪状木製品	(22.5)	3.3	1.4		両側を板的に加工。					9
51	24	柱?	(26.7)	5.0	2.9		先端4面削り。					8
52	25	車輪状木製品	(26.9)	2.3	1.5		先端斜利。					3
52	26	車輪状木製品	(24.5)	3.0	2.6		先端斜利。2面削り。					21
52	27	不明木製品	(30.0)	5.9	2.5							4
52	28	不明木製品	(27.1)	4.6	1.8		側縁が斜めに削られる。					185
52	29	車輪状木製品	32.1	1.6	1.4		上端に段をもつ。					209
52	30	車輪状木製品	(26.9)	1.9	1.1		先端は徐々に厚みを減じて細くなる。					2

## 平田宮第2遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴ.イ株式会社

本報告では、平田宮第2遺跡2・3次調査の発掘調査成果から課題とされた、平安時代の古環境（横生）推定、水田跡および煙跡における栽培植物及び植物利用の検証を目的として自然科学分析調査を実施する。

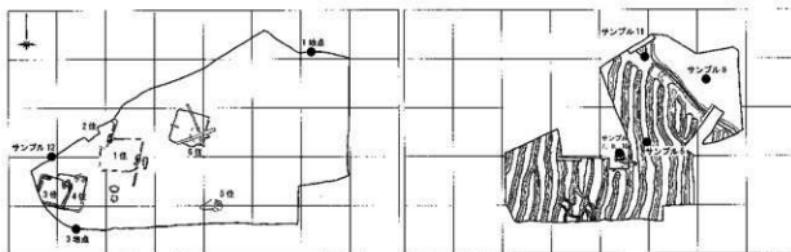
### 1. 試料

試料は、十箇試料および遺構等から出土した木製品、自然木などからなる。以下に、各試料の概要を示す。また、分析対象試料および分析項目を表8に、試料採取地点を図53に示す。

表8. 分析試料及び分析項目一覧

遺構名・地点名	試料名	試料の質	分析項目*				備考
			P	PO	灰像	微細	
1 地点	サンプル 1	土壤	1	1			鉄検出面直下
1 地点	サンプル 2	土壤	1	1			
3 地点	サンプル 3	土壤	1	1			鉄問
3 地点	サンプル 4	土壤	1	1			鉄
烟跡	サンプル 5	土壤	1	1			鉄
水田跡	サンプル 6	土壤	1	1			
井戸跡	サンプル 7	土壤	1	1		1	第36回第13局
1号住	カマド炭化物層	土壤(炭化物混じり)		1	1		
3号住	カマド炭化物層	土壤(炭化物混じり)		1	1		
4号住	カマド炭化物層	土壤(炭化物混じり)		1	1		
6号住	カマド炭化物層	土壤(炭化物混じり)		1	1		
1号不明遺構 カマド?炭化物	サンプル 8	土壤(炭化物混じり)		1	1		2次調査区
井戸材	サンプル 9	木材(土壤混じり)				1	第35回
井戸材	サンプル 10	木材(土壤混じり)				1	第35回
壁上自然木	サンプル 11	木材				1	第34回 No12
自然木	サンプル 12	木材				1	第13回
1号住	板村他	生材				11	
3号住	板村他	生材				7	
4号住	板村他	生材				8	
6号住	板村他	生材				4	
田塀地界杭	杭材	生材				2	
竹列	杭材	生材				4	2次調査区 第8回
井戸	板村他	生材				14	

\*P:花粉分析、PO:植物珪酸体分析、灰像:灰像分析、微細:微繊物分析、W:腐植同定



第53図 分析試料採取地点

### (1) 土壤試料

#### 1) 1地点

1地点は、調査区北東隅に相当する。

試料は、灰色を呈する細粒砂～シルト最上部(サンプル1)、灰色を呈する粘土～シルト(サンプル2)より採取している。

#### 2) 3地点

3地点は、調査区南壁西側に相当する。

試料は、鉛および鉛間に相当する灰色の砂混じりシルト～極細粒砂上部よりサンプル3、最下位の粘土～シルトよりサンプル4を採取している。

### 3) 水田跡、畑跡

試料は、調査担当者によって水田・畑跡の任意の地点から採取された土壤サンプル5、サンプル6である。

### 4) 住居跡カマド炭化物、井戸跡覆土

試料は、住居跡カマド（1・3・4・6号住）に認められた炭化物混じり土壤、2次調査区の1号不明造構より採取された炭化物混じり土壤（サンプル8）、井戸跡覆土13層に相当する土壤（サンプル7）である。

## （2）本製品、自然木

### 1) 木製品

試料は、住居跡内から出土した杭材や木製品、井戸跡の構築部材、2次調査区の杭列を構成する杭材、3次調査区の水田跡と畑跡の境界より検出された杭列を構成する杭材の計52点である。これらの試料については、加工方法等に因る情報を得るために、試料採取とともに木取観察を合せて実施している。

### 2) 自然木

試料は、調査区西側北壁に認められた自然木（サンプル12）と堆上より出土した自然木（No12）の2点である。

## 3. 結果

### （1）花粉分析

結果を表9、図54に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。以下に、各地点の検出状況を記す。

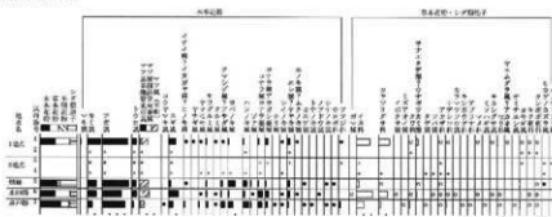


図54. 花粉化石群集  
右欄の●は、木本花粉は水本花粉を含む割合。若木花粉・シゲ加古川は既報より不明造構を除く数を基礎として  
百分率で算出した。なお、●○◎は100%木質、+は木本花粉の割合を木質の試料について算出した割合を示す。

### 1) 1地点

サンプル2（鉛）は、花粉化石の産出状況は不良である。産出した種類は、木本花粉ではモミ属やツガ属、マツ属等が、草本花粉ではヨモギ属、サナエタデ属～ウナギツカミ属、キク科、タンボボ亜科が僅かに検出されるのみである。

サンプル1（鉛直下）は、花粉化石が豊富に産出するが、保存状態はやや不良であり、花粉外膜が破損・溶解しているものが比較的多い。花粉化石群集組成は、木本花粉と草本花粉が、同程度の割合で産出する。木本花粉は、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属～ケヤキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科やカヤツリグサ科が多産し、サナエタデ属～ウナギツカミ属、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、タンボボ亜科等が検出される。

### 2) 3地点

サンプル4（鉛）、サンプル3（鉛間）は、いずれも花粉化石の産出状況は悪く、保存状態も不良である。産出した花粉化石群集は類似し、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、アカガシ亜属等が、草本花粉ではイネ科、タデ属、アカザ科等が検出される。サンプル4からは、栽培種であるソバ属に由来する花粉もわずかながら認められる。

### ・畑跡

サンプル5（鉛）は、花粉化石が産出するが、保存状態はやや不良である。花粉化石群集組成は、木本花粉の割合が高く、シダ類胞子も多く産する。木本花粉では、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、カバノキ属、ニレ属～ケヤキ属等を伴う。草本花粉は少ないながらも、イネ科、ヨモギ属等が認められる。

### ・水田跡

サンプル6（水田面）は、花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。花粉化石群集組成は、木本花粉と草本花

表9. 花粉分析結果

種類	サンプルNo.	1地点		3地点		畠跡	水田跡	井戸跡
		1	2	3	4			
<b>木本花粉</b>								
マキ属		3	-	-	-	-	-	-
モミ属	47	6	3	12	20	38	16	
ツガ属	90	16	5	23	57	81	75	
トウヒ属	17	3	1	2	9	21	7	
マツ属单維管束帯属	4	-	-	-	-	-	2	
マツ属複維管束帯属	5	-	-	-	-	14	4	
マツ属(不明)	21	13	7	15	20	28	11	
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	1	
スギ属	25	1	4	3	5	41	14	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-	-	-	1	-	5	
ヤナギ属	1	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	2	-	-	2	-	2	3	
サワグルミ属	3	-	-	1	2	6	8	
クルミ属	1	-	-	-	-	3	1	
クマシテ属-アサダ属	1	-	-	1	4	4	14	
カバノキ属	3	-	-	1	16	5	17	
ハンノキ属	3	1	-	1	9	8	19	
ブナ属	-	-	-	-	3	3	5	
コナラ属コナラ亜属	6	-	3	2	2	21	15	
コナラ属アカガシ亜属	11	-	1	-	2	16	8	
クリ属	-	-	-	-	-	-	1	
シノノキ属	1	-	-	1	-	3	2	
ニレ属-ケヤキ属	11	2	1	-	6	12	6	
エノキ属-ムクノキ属	1	-	-	-	-	1	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	1	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	1	
ノブドウ属	-	-	-	-	-	1	-	
シナノキ属	-	-	-	-	1	-	1	
ウコギ科	-	-	-	-	1	-	1	
ツツジ科	2	-	1	-	-	-	6	
<b>草本花粉</b>								
ガマ属	-	-	-	-	-	1	-	
イネ科	113	-	10	26	11	165	43	
カヤツリグサ科	92	-	1	1	1	89	11	
イボクサ属	-	-	-	-	-	2	-	
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	3	
クワ科	2	1	-	-	-	4	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	19	-	-	-	1	8	-	
タデ属	-	-	-	5	-	-	1	
ソバ属	-	-	-	1	-	1	-	
アザサ科	3	-	1	7	1	2	4	
ナデシコ科	6	-	-	1	-	1	-	
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	1	
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	2	
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	
マメ科	1	-	-	-	-	1	-	
ミソハギ属	-	-	-	-	-	-	1	
キカシグサ属	1	-	-	-	-	3	-	
セリ科	7	-	-	-	-	7	3	
ヤエムグラ属-アカネ属	1	-	-	-	-	-	-	
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	1	
ヨモギ属	4	2	1	-	4	12	5	
キク壺科	1	1	-	-	-	3	3	
タンボポ属	4	1	-	-	1	6	2	
不明花粉	15	1	1	3	4	6	11	
<b>シダ類胞子</b>								
ヒカゲノカズラ属	-	-	1	1	2	-	-	
イノモトソウ属	-	-	1	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	112	128	25	75	156	139	86	
<b>合計</b>								
木本花粉	259	42	26	64	159	308	244	
草本花粉	254	5	12	41	19	309	92	
不明花粉	15	1	1	3	4	6	11	
シダ類胞子	112	128	27	76	158	139	86	
総計(不明を除く)	625	175	65	181	336	756	422	

粉が、同程度の割合で検出される。木本花粉では、ツガ属が多産し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ属、アカガシ属、ニレ属-ケヤキ属を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、クワ科、サナエタデ属-ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、タンボボ科等が認められる。わずかではあるが、ガマ属、イボクサ属等の水湿地生植物の花粉や、ソバ属の花粉も検出される。

#### ・井戸跡

サンプル7は、花粉化石の産出状況、保存状態とも、比較的良好である。木本花粉では、ツガ属が多産し、モミ属、マツ属、スギ属、クマシテ属-アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属、アカガシ属、ニレ属-ケヤキ属等が認められる。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科、ナデシコ科、ヨモギ属等が認められる。

#### (2) 植物珪酸体分析

結果を表10、図55に示す。各資料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど保存状態は不良である。以下に各地点の産出状況を示す。

##### 1) 1 地点

サンプル2は、植物珪酸体含量は1,400個/g程度と少ない。ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属、イチゴツナギア科、シバ属等が検出される。栽培植物では、栽培植物のイネ属の穎珪酸体が僅かに検出されるのみである。

サンプル1は、植物珪酸体含量は約4,400個/gである。栽培植物では、イネ属の茎部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、初穂に形成される穎珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体は約700個/g、機動細胞珪酸体は約800個/g、穎珪酸体は100個/g未満である。この他の分類群は、サンプル2と同様の組成を示す。

##### 2) 3 地点

植物珪酸体含量は、歴間に相当するサンプル3は約9,400個/g、歴間に相当するサンプル4は約6,700個/gである。2試料とも、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、穎珪酸体が検出される。イネ属の植物珪酸体含量は、サンプル3の短細胞珪酸体は約3,100個/g、機動細胞珪酸体は約1,400個/g、穎珪酸体は約1,100個/g、サンプル4の短細胞珪酸体は約1,200個/g、穎珪酸体は100個/g未満である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属、イチゴツナギア科等が検出される。

##### 3) 灰跡

サンプル5は、植物珪酸体含量は約2,400個/gである。

栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、穎珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体は200個/g程度、穎珪酸体は約100個/gである。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属、イチゴツナギア科等が検出される。

##### 4) 水戸跡

サンプル6は、植物珪酸体含量は約4,800個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、穎珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体は約400個/g、機動細胞珪酸体は約900個/g、穎珪酸体は100個/g未満である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属、イチゴツナギア科等が検出される。

##### 5) 井戸跡

サンプル7は、植物珪酸体含量は約2,000個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体はそれぞれ300個/g程度である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属、イチゴツナギア科等が検出される。

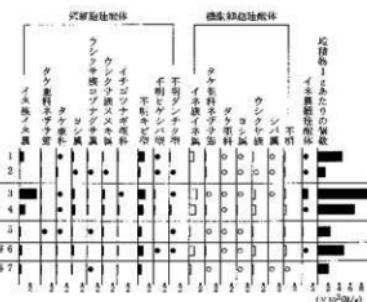


図55. 植物珪酸体含量  
当研究における検出部位を示す。○○は100個/g  
未満の個数を示す。

種類	(個/g)						
	1地点		3地点		烟跡	水田跡	井戸跡
サンプルNo	1	2	3	4	5	6	7
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>							
イネ族イネ属	700	-	3,100	1,000	200	400	300
タケ亜科ネザサ節	100	100	100	200	<100	100	100
タケ亜科	<100	300	<100	<100	<100	200	100
ヨシ属	300	<100	500	600	200	400	200
ウシクサ族コブナグサ属	200	<100	200	200	<100	100	<100
ウシクサ族スキスキ属	200	<100	400	300	200	200	100
イチゴニガキギ科	100	-	<100	300	100	200	100
不明キビ型	1,100	300	1,200	900	500	900	500
不明ヒゲシバ型	<100	<100	200	200	-	<100	-
不明ダンチク型	200	<100	<100	300	<100	<100	-
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>							
イネ族イネ属	800	-	1,400	1,200	200	900	300
タケ亜科ネザサ節	100	200	<100	200	<100	100	<100
タケ亜科	<100	<100	<100	<100	<100	<100	-
ヨシ属	<100	<100	<100	200	<100	<100	-
ウシクサ族	200	<100	500	600	100	500	200
シバ属	<100	<100	<100	-	-	-	<100
不明	200	100	300	400	200	400	<100
<b>珪化組織片</b>							
イネ族珪化组织片	<100	<100	1,100	<100	100	<100	-
合計	3,100	1,000	5,800	4,100	1,600	2,700	1,500
イネ科部短細胞珪酸体	1,300	500	2,500	2,600	600	2,000	600
珪化組織片	0	0	1,100	0	100	100	0
総計	4,400	1,400	9,400	6,700	2,400	4,800	2,000

1) 各選択群の植物珪酸体含量は、10の位で丸め100単位としている。合計は、丸める前の数字を合計した後、100単位としている。

2) <100は、100個/g未満を示す。

### (3) 灰像分析

結果を表11に示す。各住居跡カマドの炭化物層および2次調査区1号不明遺構(カマド)炭化物のサンプル8)からは、いずれもイネ属に由来する珪化組織片が検出され、特に煙窓胞列の産出が顕著である。また、3号住カマド炭化物は、初段に形成される網状産体の産出が顕著である。この他に、ヨシ属やスキスキ属などの珪化組織片が検出される。

### (4) 微細胞分析

結果を表12に示す。住居跡カマド炭化物層、不明遺構炭化物(カマド)炭化物)、井戸跡覆土から、被子植物の木本1分類群1個、草本37分類群3,929個、計3,930個の種実と部位・種類不明の種実6個、木材、炭化材、木の芽、昆虫、土器が検出された。

検出された種実のうち、栽培植物は、イネ胚乳38個、穀2,415個、アワヒエ2個、ヒエ近似種4個、アサヒ1個、マメ類5個、エゴマ11個、ナス科(栽培種に由来する可能性がある一部の大型種子)8個、ヒヨウタン類3個の計2,507個である。

#### 1) 植生状況

##### ・井戸跡(サンプル7)

草本17分類群(イネ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ-オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、チドメグサ属、エゴマ、ナス科、メナモミ属)601個の種実が検出され、このうちナデシコ科が419個と多い。この他に、不明種実5個、炭化材8個(0.01g未満)、多量の昆虫(2cc)が検出された。このうち、栽培植物は、イネの胚乳(11個)、エゴマ(1個)が確認された。

##### ・1号住カマド炭化物層

木本1分類群(ブドウ属)1個、草本20分類群(オモダカ科、イネ、エノコログサ属、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、フユクサ、イボクサ、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、スペリヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、クサネム近似種、マメ類、サクラソウ科、イヌコウジユ属、エゴマ)567個、計568個の種実と、炭化材2.5cc(0.3g)、木材7個、木の芽2個、昆虫1個、土器1個が検出された。このうち、栽培植物は、イネの胚乳(5個)、ヒエ近似種(1個)、マメ類(1個)、エゴマ(1個)が確認された。

表11. 灰像分析結果

種類	灰像分析結果				
	1号住 カマド	3号住 カマド	4号住 カマド	6号住 カマド	12号住 カマド
検出された種類	+	+++	-	+	+
イネ属	+++	+++	-++	+++	+++
イネ科	+++	+++	-++	+++	+++
タデ属	+	+	+	+	+
ヨシ属	+	+	+	+	+
スキスキ属	+	+	-	+	+
ウシクサ族	-	-	-	-	-
煙窓胞列	極めて多く	多く	多く	多く	多く
網状産体	多く	多く	多く	多く	多く
不定形の種類	少く	少く	少く	少く	少く

凡例: +++(非常に多い)、++(多い)、+(横出し)、-(非常に少ない)

#### ・3号住カマド炭化物層

草本22分類群（ヘラオモダカ、イネ、エノコログサ属、アワーヒエ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、アサ、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、クサネム近似種、マメ属、セリ科、イヌコウジュ属、エゴマ、ナス科（大型）、ナス科、ヒヨウタン属、メナモミ属）1,264個の種実と、炭化材1cc (0.7g) が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（15個）・穎（856個）、アワーヒエ（1個）、アサ（21個）、マメ類（2個）、エゴマ（7個）、ナス科（大型）（8個）、ヒヨウタン類（3個）が確認された。

#### ・4号住カマド炭化物層

草本11分類群（イネ、アワーヒエ、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、マメ属、マメ科、ナス科）720個の種実と、炭化材15cc (2.8g) が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（4個）・穎（653個）、アワーヒエ（1個）、ヒエ近似種（3個）、マメ類（2個）が確認された。

#### ・6号住カマド炭化物層

草本12分類群（ヘラオモダカ、オモダカ属、イネ、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、クサネム近似種、セリ科、タウコギ）737個の種実と不明種実1個、炭化材10cc (2.0g)、木材42個、昆蟲8個が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（13個）、穎（583個）が確認された。

#### ・1号不明遺構カマド？炭化物 サンプル8

草本5分類群（イネ、イネ科、アカザ科、エゴマ、ナス科）40個の種実と炭化材5cc (1.5g)、木材4個が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（1個）・穎（25個）、エゴマ（2個）が確認された。

#### 2) 種実の記載

種実の状態は比較的良好で、イネ胚乳や穎の一部、アワーヒエ、ヒエ近似種、マメ類等の栽培植物と、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、マメ科の種子については炭化が認められた。以下に、本分析で得られた種実の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

##### （木本）

###### ・ブドウ属（*Vitis*） ブドウ科

種子が検出された。灰褐色、長さ4mm、径3mm程度の広倒卵形、側面観は半広倒卵形。基部の腹の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。腹面には中央に繊維が走り、その両脇には長さ2mm程度の格円形の深く埋んだ孔が存在する。背面にはさじ状の凹みがある。種皮は薄く硬く、表面は粗面。

##### （草本）

###### ・ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche） オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡灰褐色、長さ2mm、幅1.5mm程度の楕円形で偏平、基部は切形。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けて見える。種子は茶褐色、径1mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縱長い微細な網目模様が配列する。

###### ・オモダカ属（*Sagittaria*） オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、径2.5mm程度の正な倒卵形で偏平。果皮は薄く裏裏。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縱方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。種子は茶褐色、径1mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縱長い微細な網目模様が配列する。

###### ・オモダカ科（Alismataceae）

種子が検出された。淡・黒褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には縱長い微細な網目模様が配列する。

###### ・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

胚乳と穎（果）が検出された。穎（果）は淡・茶褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色。やや偏平な長梢円体。胚乳は長さ3.5-5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が観察される。表面に網が付着した個体もみられる。穎は長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ1-2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言ふ場合もある）と内穎がある。外穎は5葉、内穎は3葉をもち、ともに舟形を呈し、融合してやや偏平な長梢円形の穎を構成する。果皮表面には顆粒状突起が観察される。

###### ・エノコログサ属（*Setaria*） イネ科

果実が検出された。黄褐色、長さ2-2.5mm、径1.5mm程度の半狭卵形で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に立つ網目模様が配列する。

###### ・アワーヒエ（*Setaria italica* (L.) P.Beauv. - *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno） イネ科エノコログサ属-ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、径1.2mm程度のやや偏平な広卵形で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部止中線上

表12. 微細物分析結果

分類群(●:栽培植物)	部位	状態	井戸跡	1号住 カマド 炭化物層	3号住 カマド 炭化物層	4号住 カマド 炭化物層	6号住 カマド 炭化物層	2次調査区 カマド? 炭化物 1
			サンプル 7	-	-	-	-	-
木本	ブドウ属	種子	-	1	-	-	-	-
草本	ハラオモダカ	果実	-	-	2	-	2	-
オモダカ属	果実	-	-	-	-	-	3	-
オモダカ科	種子	-	1	-	-	-	-	-
● イネ	胚乳	炭化	完形 破片	2 3	8 7	1 3	7 6	1 -
	穀	完形 破片	1 8	5 129	- 396	- 190	6 220	- 3
		炭化	破片	2	153	460	463	357
● エノコログサ属	果実	-	43	1	6	-	-	-
● アワーヒエ	胚乳	炭化	-	-	1	1	-	-
● ヒエ近似種	果実	炭化	-	1	-	3	-	-
イネ科	果実	-	40	43	33	-	-	-
ホタルイ属	果実	炭化	-	4	11	7	-	1
カヤツリグサ科	果実	-	29	196	209	35	123	-
ツユクサ	種子	-	-	1	3	-	2	-
イボクサ	種子	-	-	3	1	-	-	-
ミズアオイ属	種子	-	3	-	-	-	1	-
● アサ	種子	完形 破片	-	-	1	-	-	-
サナエタデ近似種	果実	-	3	2	3	-	-	-
タデ属	果実	-	3	2	13	1	2	-
アカザ科	種子	-	6	4	34	6	1	10
スペリヒユ科	種子	-	-	2	-	-	-	-
ナデシコ科	種子	-	419	1	18	-	2	-
キンポウゲ属	果実	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科	種子	-	15	-	-	-	-	-
キジムシロ属*	核	-	4	-	-	-	-	-
クサネム近似種	果実	-	-	1	2	-	1	-
● マメ類	種子	炭化	完形 完形	-	2	2	-	-
マメ科	種子	-	2	-	-	-	-	-
カタバミ属	種子	-	6	-	-	-	-	-
エノキグサ	種子	-	-	-	-	-	-	-
チドメグサ属	果実	-	12	-	-	-	-	-
セリ科	果実	-	-	-	1	-	-	-
サクラソウ科	種子	-	-	1	-	-	-	-
イスコウジュ属	果実	-	-	1	2	-	-	-
● エゴマ	果実	完形 破片	1	-	7	-	-	2
● ?ナス科(栽培種?)	種子	-	-	-	8	-	-	-
ナス科	種子	-	2	-	3	1	-	1
● ヒヨウタン類	種子	破片	-	-	3	-	-	-
タウコギ	果実	-	-	-	-	-	2	-
メナモ属	果実	-	2	-	6	-	-	-
不明種実			5	-	-	-	1	-
	分析量	200cc	200cc	200cc	200cc	200cc	50cc	
		314.1g	274.9g	257.9g	272.8g	269.2g	62.5g	
炭化材(径4mm以上)		8(<0.01g)	2.5cc(0.3g)	4cc(0.7g)	15cc(2.8g)	10cc(2.0g)	5cc(1.5g)	
木本(径4mm以上)		-	7	-	-	42	4	
木の芽		-	2	-	-	-	-	
昆虫		2 cc	1	-	-	8	-	
土器		-	1	-	-	-	-	

\*キジムシロ類:キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

に胚の凹みがある。表面はやや平滑。同定根拠となる種（果）の付着は認められなかった。

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。淡~黒褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には細長の微細な網目模様が配列する。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳と種（果）が検出された。種（果）は淡~茶褐色、胚乳と一部の種は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ3.5~5mm、幅2.5~3.5mm、厚さ1~1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が縱列する。表面に種が付着した個体もみられる。種は長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ1~2mm程度。基部に斜切状圓柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5層、内穎は3層をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の輪廓を構成する。果皮表面には種粒状突起が縱列する。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。黄褐色、長さ2~2.5mm、径1.5mm程度の半球形体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・アワーヒエ (*Setaria itarica (L.) P.Beauv. Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno*) イネ科エノコログサ属-ヒエ属

種乳が検出された。炭化しており黒色、径1.2mm程度のやや偏平な広卵形で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。同定根拠となる種（果）の付着は認められなかった。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa cf. utilis Ohwi et Yabuno*)

果実が確認された。炭化しており黒色、長さ3~4mm、径2mm程度の狭卵~半偏球形で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

全体類微鏡下では、周辺域に生育している可能性があるイヌヒエ等の他のイネ科野生種との歴史的な区別は困難であるが、炭化していることや他の栽培植物が併存する点から、栽培種のヒエに近似する可能性がある。今回確認された果実は、遺存状態が良好であることから、走査型電子顕微鏡下観察で種類が特定される（松谷、1980、2000など）可能性がある。

・イネ科 (Gramineae)

果実が確認された。イネ、エノコログサ属、アワーヒエ、ヒエ近似種以外の形態上差異のある複数種を一括している。果実は淡~灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1~3mm、径0.5~2mm程度の狭卵~半偏球形で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には微細な縦長の網目模様が縦列する。炭化果実の内部に確認される胚乳は、長さ1mm、径0.6mm程度の長楕円体で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。胚乳表面はやや平滑。

・ホタルイ属 (*Seirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径2mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵形。果実頂部は尖る。背面正中線上は純後。基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は光沢があり、不規則な液状の横臍状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括している。淡~黒褐色、径1.2~3mm程度の三稜またはレンズ状倒卵形。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面は平滑または微弱な網目模様がある。長さ1.2mm、径0.7mm程度の三稜状倒卵形で表面には微小な突起状が密布する。カヤツリグサ属 (*Cyperus*) に似る個体などを含む。

・フユクサ (*Commelinia communis L.*) ツユクサ科フユクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ3mm、径4mm程度の半球長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らである。胚は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。他の面には円形の小孔が散在する。

・イボクサ (*Aneilema keisak Hassk.*) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ1.5mm、径1.5~3mm程度の半球長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。胚は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。

・ミズアオイ属 (Monochoria) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、長さ1mm、径0.6mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には10本程度の太い横隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイとコナギの2種があるが、実体類微鏡下の観察による区別は困難である。

・アサ (*Cannabis sativa L.*) クワ科アサ属

種子が検出された。暗灰褐色、長さ3~4mm、幅3mm、厚さ2.5mm程度の革質広倒卵形。縦方向に一周する縫合に沿って半分に割れた被片がみられる。頂部は切形、基部に淡灰褐色、径1mm程度の楕円形の溝点がある。種皮表面は葉脈状網目模様があり、断面は梢形。

・サナエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium* L.) タテ科タデ属

果実が検出された。黒褐色、径1.8-2.2mm程度の偏平な円形。両面中央はやや凹む。頂部はやや尖り、2花柱がある。基部は切形で、果皮とは別組織の灰褐色の夢と、基部から伸び、先が2つに分かれ反りかえる花被の脈がある。果実表面は平滑で光沢がある。

・タデ属 (*Polygonum*) タテ科

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。黒褐色、長さ2.5mm、径1.5mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る。果皮表面はやや平滑で光沢がある、ハナタデやイヌタデに似る個体などを含む。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、径1.1-1.3mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、脈がある。種皮表面には脉を取り扱むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・スペリヒユ科 (Portulacaceae)

種子が検出された。黒色、腎臓状圓形でやや偏平。径0.8mm程度。一端が凹み、脉がある。脉には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が脉から同心円状に配列する。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。灰褐色、洋0.9mm程度の腎状圓形でやや偏平。基部は凹み、脉がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤-針状突起が脉から同心円状に配列する。

・キンポウゲ属 (*Ranunculus*) キンポウゲ科

果実の破片が検出された。黄褐色、完形ならば長さ2.5mm、幅1.8mm、厚さ0.5mm程度の偏平な非対称広卵形体。破片の大きさは1.8mm程度。頂部や基部はやや尖る。果皮は薄くボンジ状で表面はざらつく。

・アブラナ科 (Cruciferae)

種子が検出された。赤褐色、長さ1mm、幅0.6mm程度のやや偏平な楕円体。基部は切形で、両面の同一側には脐点から頂部へ伸びる1個の深い溝がある。種子表面には微細な網目模様がある。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、径1mm程度のやや偏平な腎形。内果皮は薄く硬く、表面は粗面で数個の隆条が斜上する。

・クサネム近似種 (*Aeschynomene cf. indica* L.) マメ科クサネム属

果実(豆果)の破片が検出された。灰褐色、完形ならば長さ3-4cm、幅5-6mm、厚さ1mm程度の偏平な非対称広線形で腹面方向にやや湾曲する。頂部と基部は伸び、縁には筋がある。破片は6-8個程度の短軸方向の筋に沿って分離した1片で、径5-7mm程度の長方形。一端は斜切形の個体がみられる。果皮表面は粗面。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色。長さ3.5mm、径2mm程度の長椭円体で腹面方向にやや湾曲する。腹面子葉の合わせ面上に長さ1mm程度の長椭円形で縁が隆起する長い脉がある。種皮表面はやや平滑。

・マメ科 (Leguminosae)

種子が検出された。炭化しており黒色。径1.5mm程度の腎状椭円体。腹面中央部は済入し、縁が隆起する長さ0.3mm程度の長椭円形の脈がある。上述の栽培種のマメ類とは区別され、野生種の類と思われる。種皮表面はやや平滑。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5mm、幅1mm程度の偏平な倒卵形。基部は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4-7列の肋骨状横隆条が配列する。

・エノキダケ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキダケ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5-1.8mm、幅1.2-1.4mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には粒状の微細な凹みが密布しがらつく。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡~灰褐色、径1.1-1.2mm程度の半月形でやや偏平。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。灰黃褐色、長さ2mm、幅1.5mm、厚さ0.8mm程度のやや偏平な椭円体。果皮はボンジ状で、腹面と背面には數本の幅広い筋があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・サクラソウ科 (Primulaceae)

種子が検出された。灰褐色、径1mm程度の倒台形、背面は平らで椭円状、菱形状、円形状などの4-5角形。腹面は長軸方

向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広楕形の跡がある。表面には5-6角形の凹みによる微細な網目模様がある。

・イヌコウジ属 (*Mosia*) シソ科

果実が検出された。淡灰褐色、径1mm程度の倒広卵形。基部には漿点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・エゴノ ( *Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara) シソ科シソ属

果実が検出された。茶~黒褐色、倒広卵形。径1.8-2.2mm程度。基部には大きな漿点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科 (Solanaceae)

種子が検出された。淡~灰褐色、平な腎臓形で偏平。径1.8mm程度の小形種子と径3mm程度の大型種子が確認された。大型種子は栽培種に由来する可能性が高いため、区別している。基部のくびれた部分に跡がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が跡から同心円状に発達する。

・ヒヨウタン解 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒヨウタン属

種皮の破片が検出された。灰褐色、長さ1.3cm、幅7.5mm程度の偏平な倒広皮針体。頂部は角張り、基部は切形で縫と発芽口がある。種皮表面は粗面で、肉面外縫部の幅広く低い枝に2本の縫跡がみられる。

・タウコギ (*Bidens tripartita* L.) キク科センダングサ属

果実が検出された。灰褐色、長さ6mm、幅1.7mm程度の偏平な倒皮針体。頂部の両肩から長さ2mm程度の下向きの逆刺をもつ芒が伸び、先端を欠損する。果実正中線上には細い縦隆条がある。果皮表面には伏毛が密布する。

・メナモミ属 (*Siegesbeckia*) キク科

果実が検出された。黒褐色、狭二角状変形体で腹面方向へやや弯曲する。長さ2.8mm、径1.2mm程度。頂部には円形の跡がある。表面には浅い縱溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

(5) 樹種同定

結果を表13、道筋別・器別種類構成を表14に示す。木製品および自然木計51試料は、針葉樹4種類(モミ属、ツガ属、サワラ、ヒノキ科)、広葉樹6種類(ヤナギ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、クワ属、フジ属近似種)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

輪方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は比較的緩やかで、晚材部の幅は広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は單列、1-20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

輪方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急で、晚材部の幅は広いが、一部狭い試料も認められる。樹脂細胞は年輪界付近に認められるが、数は少なく頗る者ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は單列、1-20細胞高。

・チャマエパリス (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

輪方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか~やや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は單列、1-10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

輪方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか~やや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は單列、1-10細胞高。

上記サワラを含むヒノキ科のいずれかであるが、組織の保存状態が悪く、分野壁孔が觀察できないため、区別することができず、ヒノキ科とした。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔隙部は3-4列、孔隙外でやや急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔周部は2-3列、孔周部外に急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔周部は3-4列、孔周部外に急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。

表13. 樹種同定結果

造標名	造標No.	器種	木取	樹種
1号住	7	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	8	カマド構築材	板目板	サワラ
	9	カマド構築材	板目板	サワラ
	10	杭状木製品	分割材	ヒノキ科
	11	杭状木製品	分割材	サワラ
	12	杭状木製品	ミカン割	ヒノキ科
	14	直串状木製品	削出棒	ヒノキ科
	18	薄板	板目	ヒノキ科
	19	底板?	板目	サワラ
	20	底板?	板目	ヒノキ科
	21	角材	分割材	ヒノキ
3号住	4	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	6	カマド構築材	板目板	ヒノキ科
	9	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	11	杭状木製品	分割材	ヒノキ科
	12	直串状木製品	分割材	ヒノキ科
	13	直串状木製品	板目	ヒノキ科
	14		削出棒	ヒノキ科
4号住	6	カマド構築材	分離材	ヒノキ科
	8	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	11	板	板目	ツガ属
	12	杭状木製品	分割材	サワラ
	13	杭状木製品	板目板	サワラ
	18		分割材	ヒノキ科
	19		分割材	サワラ
6号住	21	曲物底板	板目	ヒノキ科
	10	杭状木製品	分割材	ツガ属
	11	杭状木製品	分割材	ツガ属
	13	板材(孔有)	板目	フジ属近似種
杭列 (2次調査)	14	柱材	芯持丸木	ツガ属
	33	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	34	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	35	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	36	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	12	棒状	芯持丸木	モミ属
	13	棒状	削出丸棒	クリ
井戸	14	板材(孔・切込有)	板目	ヒノキ科
	15	板材	板目	サワラ
	16	角材(孔段有)	分割材	サワラ
	17	板材(孔有)	板目	サワラ
	19	板材(孔右)	板目	サワラ
	21	板材	板目	ヒノキ科
	28	板材	板目	ヒノキ科
	31	角材	板目	サワラ
	32	角材	分割材	サワラ
	34	棒状(右頭)	芯持丸木	サワラ
	35	棒状	板目	モミ属
	36	角材(孔有)	分割材	モミ属
サンプル9	サンプル9	板材		ヒノキ科
	サンプル10	板材		モミ属
田畠境界杭1		芯持丸木		コナラ属コナラ亜属コナラ節
田畠境界杭11	杭	芯持丸木		クリ
サンプル11	自然木			ヤナギ属
サンプル12	自然木			クワ属

表14. 遺構別・器種別種類構成

遺構名	樹種名	樹種								フジ属近似種	合計
		モミ属	ツガ属	サワラ	ヒノキ科	ヤナギ属	クスギ節	コナラ節	クリ	クワ属	
	杭(カマド構築材・杭状木製品)			3	3						6
1号住	底板?			1	1						2
	角材				1						1
	棒状(舟中状木製品)				1						1
	薄板				1						1
3号住	杭(カマド構築材・杭状木製品)			4							4
	棒状				1						1
	分割材(舟中状木製品)				2						2
	杭(カマド構築材・杭状木製品)		2	2							4
4号住	分割材			1	1						2
	板			1							1
	面物底板				1						1
	杭(杭状木製品)		2								2
6号住	板									1	1
	丸木状(柱材)			1							1
	杭						2	2			4
	板	1		3	3						7
井戸	角材	1		1							2
	底板?				1						1
	部材				1						1
	棒	1		1				1			3
不明	不明	1			1				1	1	2
	境界杭							1	1		2
	白然木等					1			1		2
	合計	4	4	14	22	1	2	3	2	1	54

孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

#### ・クワ属 (*Morus*) クワ科

環孔材で、孔圓部は4-5列、孔圓外への移行は緩やかで、晚材部では単独または2-4個が塊状あるいは接線方向に複合して接縫、斜方向に配列し、午輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は常に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

#### ・フジ属近似種 (cf. *Wisteria*) マメ科

試料は板目の切片が作成できなかった。環孔材で、孔圓部は2-3列、孔圓外で管徑を漸減させて散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁には擦痕肥厚が認められる。放射組織の形状、大きさは不明。小道管が階層状になる。

### 4. 考察

#### (1) 古植物

木田跡および焼跡試料の一部には、花粉化石の大半に致緻・溶解の痕跡が認められるなど遺存状況の悪い試料が認められた。花粉やシダ類孢子の腐蝕に対する抵抗性は種類によって異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類孢子の方が強化に対する抵抗性が高いとされる(中村, 1967; 勝永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。好気的状況下においては分解に強い花粉が多く残存していると推定され、花粉化石群集は正確に周辺植生を反映していない可能性がある。

一方、花粉化石の遺存状況が良好であった1地点(サンプル1)、烟跡跡(サンプル5)、水田跡(サンプル6)、井戸跡(サンプル7)の花粉群集はいずれも類似する。木本類では、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亞属等が伴う組成を示した。したがって、ツガ属をはじめとしてモミ属、トウヒ属、スギ属等は、後背の丘陵や山地部に林分を形成し、中間温帯林を形成していたと推測される。

ところで、甲府地方気象台による甲府地方の気象統計結果から計算した暖かさの指標は115.4、寒さの指標は4.3である。これを吉良(1971)に当てはめた場合、現在の気象条件では常緑広葉樹林が成立する。冬の気温低下が著しいと中間温帯林が成立す

る場合もあるが、上記した指標を見る限り、常緑広葉樹林が生育できないはどの気温低下ではないことから、自然状態ではカシ類などの常緑広葉樹林が成立することになる。花粉分析結果では、平安時代頃は中間温帯林が主体であったと推定され、おそらく現在の環境と異なっていたと考えられる。中間温帯林となる条件としては、現在よりも気温が低下（特に冬期の気温）し、常緑広葉樹林の発育が妨害されることや、多雨化等により斜面地の土壌が流失し複地に強い温帯針葉樹林が生育する等が考えられる。平安時代における冷涼・多雨化の兆候は、縄文時代末から始まる「弥生の小海退」とよばれる寒冷期から続く現象であり、各地の分析結果に普遍的にみられる傾向である。

カバノキ属やハンノキ属をはじめとして、サワグルミ属、クマシテ属・アサダ属、ニレ属・ケヤキ属等は、河畔や低湿地等の適温地に生育する種類である。これらは、丘陵地等の沿沢いや谷底地等の河川沿いの河畔や周辺の低湿地等に生育していたと推定される。自然木に認められたヤナギ属やクワ属も、河畔林構成種を含む分類群であり、これらは道路内や道路周辺に生育していたことが推定される。木遺跡では、過去にクワ属の立木が確認されたことやクワ科の花粉の多産、クワ属と同定された木材組織配列はヤマグワと異なる特徴が認められたことなどから、栽培クワの可能性が指摘された（パリノ・サーヴェイ株式会社、2006）。ただし、今回のクワ属の自然木については、ヤマグワと大きな違いは認められなかったことから、栽培クワの可能性について言及することはできない。

草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ属・ウナギフカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属などの花粉や、ネザサ属を含むタケ属、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴソウナギサ属などの植物珪酸体、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アサガ科、ナデシコ科、アブラナ科等の種実が検出された。これらの草本類には、開けた空間に草地を形成する人里植物に属する分類群が多く含まれることから、遺跡周辺は、これらの分類群が生育する草地の環境が推定される。また、ガマ属、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キンボウゲ属、クサネム（近似種）、セリ科、タウコギ等の水生および湿地植物に山間する花粉・種実が検出されることから、周辺域に水湿地の生存が推定される。これらの種類は、水田越草としても認められる種類であり、本遺跡周辺では当該期の水田跡が検出されていることを考慮すると、水田内に生育していたものに由来する可能性もある。井戸跡埋積物（サンプル7）からは、蝶媒花のクリ属の花粉、エノコログサ属やイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科の種実が検出された。これらは井戸跡周辺の尾地的な植生を反映している可能性がある。

### （2）栽培植物

3次調査区では、杭列を境界として水田跡と畠跡が検出されたことから、これらの遺構における栽培植物の検証が課題とされた。本分析では、水田跡と畠跡における花粉化石や植物珪酸体の量の比較から、栽培植物の検討を試みた。

水田跡試料（サンプル1、サンプル6）からは、イネ属の葉部や穀殻に形成される植物珪酸体が検出され、花粉分析結果では、草木類のイネ科やカヤツリグサ科の多産が認められた。畠跡試料（サンプル3・5・8（サンプル4）、畠跡（サンプル5））からは、栽培植物であるイネ属が検出され、穀殻や稈部に形成される植物珪酸体が認められた一方、花粉分析結果では、畠跡（サンプル5）で定量解釈に耐え得る花粉が検出されたが、木本類およびシダ類胞子が大部分を占め、草木類についてはイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出されたのみであった。

水田跡・畠跡試料のイネ属の微動細胞珪酸体含量は、水田跡試料では800~900個/g、畠跡試料では200~1400個/gと、試料間で多寡があるが畠跡試料で多産する。穀殻や稈葉等の植物体が堆積物中に混入していたことは明らかであるが、本分析結果から栽培や施肥等を特定するには至らない。

なお、住居跡カマド炭化物層の調査では、イネの胚乳・穎のほか、アワヒエ、ヒエ近似種、アサ、マメ類、エゴマ、ナス科（大根）、ヒヨウタン類等が検出され、水田跡試料（サンプル6）からはソバ属の花粉が検出された。これらの栽培植物は、1次調査区の調査結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、2006）と同様の傾向と言える。畠跡での栽培植物と断定することはできないが、これらの栽培植物の利用等が示唆される。

### （3）植物利用品

#### 1) 燃料材

住居跡カマド炭化物層や2次調査区1号小房遺構（カマド？炭化物）からは、栽培植物のイネ属やヨシ属やススキ属に由来する珪酸体片が検出された。このことから、燃料材として利用された植物体のうち、イネ科草本類では、イネ属やヨシ属、ススキ属などの利用が考えられる。イネ属については、いずれの試料からもイネ属細胞列が多く検出され、イネの穀殻に由来する頭珪酸体も検出された。同試料の微細部分析では、住居跡カマド炭化物層を主として炭化および未炭化の穎が多量検出された一方、イネ胚乳の検出は少量であった。同様の結果は、1次調査区で検出された住居跡カマド炭化物や灰層の調査でも確認されている（パリノ・サーヴェイ、2006）。

#### 2) 木材利用

分析対象の本製品は、住居跡から出土した杭（棒状木製品）や木製品、杭列を構成する杭材、井戸跡の築造部材等からなり、針葉樹5種類（カラマツまたはトウヒ属、モミ属、ツガ属、サワラ、ヒノキ科）、広葉樹4種類（コナラ属コナラ原種クヌギ節、コナラ属コナラ純種コナラ節、クリ、フジ属近似種）に同定された。これらの分類群は、本遺跡の1次・4次調査区で検出され

た棒状木製品や杭材、井戸構築部材に確認された分類群と同様の組成を示す（パリノ・サーヴェイ株式会社、2006・2007）。

住居跡から出土した杭や木製品は、いずれでも針葉樹が多く、広葉樹は6号件の板材にフジ周近似種が認められたのみである。針葉樹は、1・3・4号住居跡ではサワラあるいはヒノキ科が多く、6号件ではツガ属が認められた。なお、6号件からは、調査所見から柱根と考えられる丸木材（No14）が確認されており、用途等の違いを反映している可能性があるが、本遺跡では柱根を対象とした調査事例はないことから住居跡間の木材利用の差異については今後の課題である。

井戸跡の木材を構成する部材や覆土中から出土した木製品は、針葉樹が多く、サワラとヒノキ科の多用、住居跡等で未検出のモミ属の利用が確認された。一方、広葉樹は、井戸枠の棒状の横木（井戸跡No13）にクリが認められたのみであった。4次調査区の1号井戸跡の井戸枠部材からは、サワラやヒノキ、ヒノキ科等が多く確認されており、同様の木材利用が認められる。本分析結果では、横木や角材等の部材にモミ属の利用が認められたが、これらの部材にはサワラあるいはヒノキ科も利用されており、木材の選択性等を見出すことはできない。なお、平府盆地では、大坪遺跡・塙部遺跡（甲府市）等で古代の木製品の調査が実施され、曲物、田口鉢、舟等の板状を早る製品にヒノキ類（ヒノキまたはサワラ）の木材が多用される傾向が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1996；松葉、2001）ことから、本遺跡を含めて当該期における一般的な木材利用が推定される。

杭列は、1次調査区から検出された杭列に相当すると考えられる2次調査区より検出された杭列と、3次調査区から検出された水田跡と畑跡の境界部より検出された杭列からなる。杭材は、小径の丸木が用いられ、一方の端部のみを加工し、樹皮が残存するものが多く認められた。これらの杭材からは、クヌギ節やコナラ節、クリ等が認められ、いずれも広葉樹材であった。1次調査区の杭列からは、ヤナギ属を主として、コナラ節、カエデ属、クリ等が確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社、2006）、樹種構成数は異なるが、いずれも広葉樹材を主体とするといった共通点が指摘される。

花粉分析結果や杭材に認められた広葉樹材は、杭材の形状や河畔林構成種を多く含む分類群から構成されることから、周辺に生育していた樹木の利用が推定される。一方、住居跡や井戸跡内から出土した木製品、建築部材等では針葉樹の利用が多く認められたが、このうち、サワラは山地の尾根筋に生育する種類であり、現在の山梨県では南部・北部・西部の県境付近の山地に分布する。また、種類の同定まで至らなかったヒノキ科も、これまでの調査結果を考慮するとサワラの可能性が高い。モミ属とツガ属は、いわゆる中間温帯林を形成する種類であり、山地・丘陵の斜面地等に生育する。花粉分析結果では、モミ属やツガ属の花粉化石は比較的多く産出したが、ヒノキ科を含む分類群（イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科）の花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉の生産量を考慮したとしてもヒノキ科を含む分類群の出島がわずかであること、本遺跡が釜無川扇状地原端部付近に立地することなどを考慮すると、周辺にヒノキ科が多く生育していたとは考え難く、木材の入手は容易でなかったと推定される。

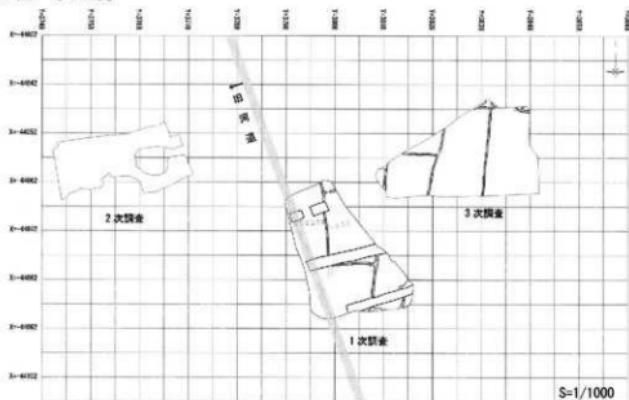
#### 引用文献

- 村石真澄、2002、第2章 微地形環境、町内遺跡詳細分布調査報告書、田富町教育委員会、2-5。  
下總町教育委員会、1995、町内遺跡詳細分布調査報告書、35p。  
玉穂町教育委員会、2003、上塙遺跡 西大南部上地区整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、玉穂町埋蔵文化財調査報告書第1集、25p。  
玉穂町教育委員会、2005、上塙遺跡（2次） 新山梨環状道路建設及び一般河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査、玉穂町埋蔵文化財調査報告書第2集、56p。  
下總町教育委員会、2006、平田宮第2遺跡新山梨環状道路建設及び一般河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査、玉穂町埋蔵文化財調査報告書第3集、64p。  
山梨県教育委員会・山梨県土木部、2007、平田宮第2遺跡 新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集、74p。  
林 昭三、1991、日本產木材 観微鏡写真集、京都大学木質科学研究所。  
石川茂雄、1994、原色日本植物種子写真図鑑、石川茂雄図鑑刊行委員会、328p。  
伊東 隆夫、1995、日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ、木材研究・資料、31、京都大学木質科学研究所、81-181。  
伊東 隆夫、1996、日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ、木材研究・資料、32、京都大学木質科学研究所、66-176。  
伊東 隆夫、1997、日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ、木材研究・資料、33、京都大学木質科学研究所、83-201。  
伊東 隆夫、1998、日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ、木材研究・資料、34、京都大学木質科学研究所、30-166。  
伊東 隆夫、1999、日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ、木材研究・資料、35、京都大学木質科学研究所、47-216。  
近藤 錠三、2004、植物ケイ酸体研究、ペドロジスト、48、46-64。  
松葉 札子、2002、大坪遺跡から出土した木製品（奈良～平安時代）の樹種同定、大坪遺跡－平成12年度調査地点の報告－、社会福祉法人清潤会、大坪遺跡発掘調査会、28-30。

- 松谷 晓子, 1980, 「勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」, 浦觀町郷土博物館報告, 第16号, 203-211.
- 松谷 晓子, 2000, 植物遺灰の識別と保存について, Ouroboros, 東京大学総合研究博物館ニュース, 5, 8-10.
- 南木 駿彦, 1991, 栽培植物・古墳時代の研究 4 生産と流通 I, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 165-174.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態, 構造史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 中山 至大・井口 伸秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大出版会, 642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 木製品の樹種, 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第123集 墳部遺跡 県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書, 山梨県教育委員会, 48-50.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 平田宮第2遺跡の自然科学分析, 玉徳町埋蔵文化財調査報告書第3集 平田宮第2遺跡 新山梨環状道路建設及び一般河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査, 玉徳町教育委員会・山梨県新環状・西関東道路建設事務所・山梨県筑中地域振興局, 32-55.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2007, 理化学分析, 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集 平田宮第2遺跡 -新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書-, 山梨県教育委員会・山梨県土木部, 11-23.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海音社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 譲・伊東 隆夫, 1982, 国泥木材組織, 地球社, 176p.
- 德永 重元・山内 雅子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版社会社, 50-73.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 法 (日本語版監修), 海音社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## 第4章 まとめ

[第1面 水田跡]



第56図 1~3次調査 第1面水田跡合成図

3次調査地点では、標高250.9mから水田跡が検出された。1次調査地点でも250.8mから水田跡が検出されており、両者は同水田面の広がりである。上層には15世紀頃の方形区画施設（上窪遺跡）をもち、下層には10世紀前半の集落跡が存在することからおおよそ平安末から鎌倉時代の水田跡である。

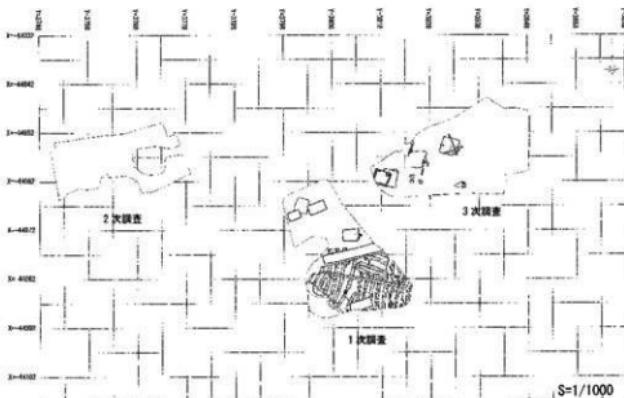
調査された水田の区画は、1・3次調査地点とも長軸を南北にもち、東西方向の短辺の長さが異なる台形に近い長方形を呈している。平田宮第2遺跡第1面合成図でも畦畔配置は、対応しており、同規格の水田が広がっていたことがわかる。

なお、東に約50m離れた上窪遺跡2次調査地点でも水田跡は検出されており、その検出レベルは標高250.7mであった。上窪遺跡2次調査地点で検出された水田区画はE-30°-Sに直線的な畦畔を平行に配し、その間を短い畦畔で区切っており平田宮第2遺跡とは大きく異なる。この規格の変化は、上窪遺跡2次調査区西端にある南北方向大畦畔を始点としており、大畦畔から西が平田宮第2遺跡の水田区画になっている。

2次調査区で水田跡は検出されておらず、1次調査時に想定したように旧河道の存在を再度指摘しておく。おそらく、大畦畔以西の水田区画の変化は、流路に規制された結果河川沿いに生じたものと考えられ、本調査により平田宮第2遺跡から上窪遺跡に広がる水田城の西端を明らかにすることとなった。

西へ約1,400m離れた小井川遺跡では、中世館跡、平安時代集落が調査されているが水田跡の存在は確認されていない。その間1,400mは、新山梨環状道路建設に伴う試掘調査が、県埋蔵文化財センターにより実施されたが、遺構の存在は確認されなかった。平田宮第2遺跡から小井川遺跡までの1kmを越える範囲は遺跡の空白地帯であり、平田宮第2遺跡の土層堆積状況、水田跡のあり方からもここに河川が存在した可能性は高いだろう。

[第2面 住居跡]



第57図 1・3次調査第2面集落跡合成図

住居跡は、3次調査区で合計7軒確認された。2次調査区では第1号不明造構としたものが杭状の木製品をもち、3次調査検出の住居カマドの構造と極めて類似していることから、住居跡の可能性が高い。可能性も含めれば今回の2・3次調査では合計8軒の住居跡を検出したことになる（第57図）。

住居跡内からは、1次調査に引き続き多くの木製品が出土した。以下（1）カマド構築材、（2）貯串状木製品、（3）杭状木製品、（4）その他木製品にわけてまとめる。

（1）カマド構築材

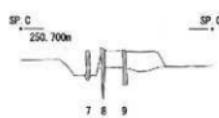
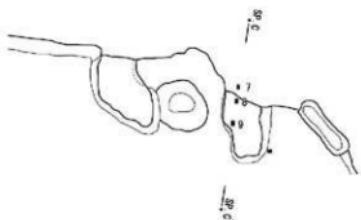
2次調査1号不明造構、3次調査1・3～6号住居跡カマドでは、その構築材として杭状に木製物が使用されていた。構築材（補強材）として石や土器を用いたカマドは多く調査・報告されているが、木製品が使用された例は、本遺跡が初見であろう。カマドをつくる際に基準・骨組みとなるよう役割を主に担っていたと考え、カマド構築材とした。

カマド構築材は、カマドソデ部分に2～3本、焚口部に上端をやや傾けた「ハ」状で検出され、いずれのカマド構築材も同様の傾向にある。構築材の下端は、下層の痕跡まで達している例が多く、砂ではなく粘土質の地盤で構築材を固定しようとした結果と推測される。また、構築材上端は、炭化している例が多くあることも特徴である。

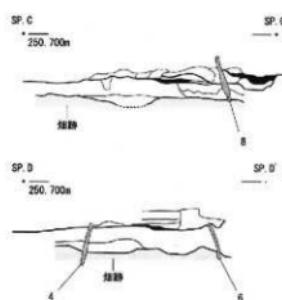
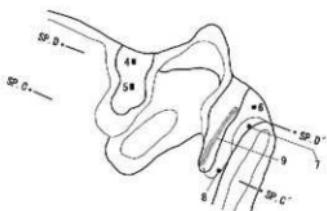
第58図にカマド構築材の検出位置を示した。いずれのカマドも本数の差こそあれ、同じような位置に打ち込まれ、ソデ片側3本以内であった。3号住居跡カマド構築材9は、横たわった状態でカマドソデ中から出土した。継材と組み合わせり、カマドづくりの基準・骨組みとなったのかもしれない。

第59図にカマド構築材を示した。地面に刺すことを目的としていたため、その先端は加工され鋭くなるものが多い。4号住居跡カマド構築材はいずれも大型で先端は杭状に鋭く削ってあった。逆側端部も加工されており完形のカマド構築材である。4号住居跡カマド構築材7は、今回出土した構築材の中で最も長い52.1cmを測るが、この大きさから考えると床面上には約35cm程度しか突き出ないことがある。他のカマド構築材を見ても完形のものが多いが長さは40cm未満がほとんどであり、床面上には数cmから20cm程度しか突き出ない。

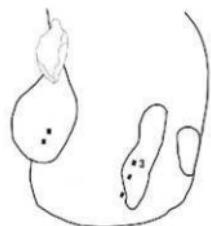
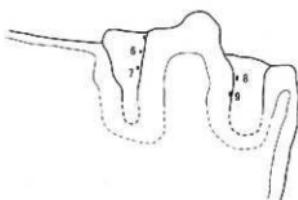
カマド上部については、カマド天井が全て崩れてしまっているため不明だが、少なくとも今回検出



1号住居跡カマド



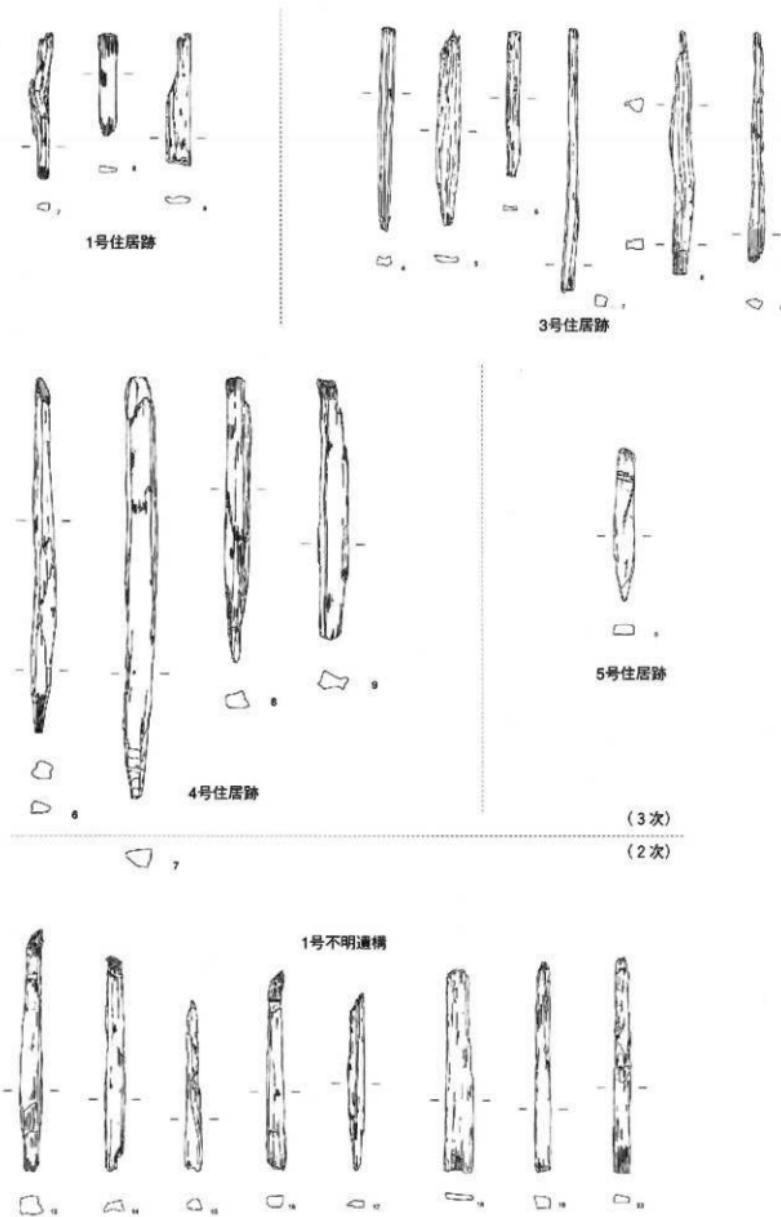
3号住居跡カマド



4号住居跡カマド

5号住居跡カマド

第58図 平田宮第2遺跡3次調査検出カマド構築材



第59図 平田宮第2遺跡出土カマド構築材 (S=1/6)

されたカマド構築材は、カマド基部を安定させ、焚口部側へ緩やかにカーブするカマド壁体形状の目安とする役割があったと思われる。

また、カマド構築材の形態には、住居ごとに特徴がある。1号住居跡カマド構築材は、自然木の先端を若干加工するのみの7と、短く薄い板の先端をさらに薄く削ぐように加工した8、長方形の板の先端を平らに加工する9というように形状に統一性がない。3号住居跡は、棒状で先端を加工しているが、杭状に鋭く尖らせ先端は平に削っている。4号住居跡は、長い材の先端を杭状に鋭利に削っている。5号住居跡は、1点のみであるが、板状の両側縁を削り鋭利な先端にしている。2次調査1号不明遺構のカマド構築材は3号住居跡構築材のように先端を鋭くなく平に加工しているが、より幅広で3号住居跡例が先端に至ると細くなるのに対し、同じ幅か逆に広がるような形態のものが多い。

このように5つのカマドを比べるとそれぞれ特色をもった構築材が使用されていることがわかるが、大きさも様々であり、小型の1号住居跡例と大型の4号住居跡例がどこまで同機能を果たしたと考えることができるのか、端部被熱に何の意味があるのかなど今後に残す課題も多い。ただ、カマド構築に際し、石材・土器等を使用せず、木材のみが使用されるこの状況は甲府盆地でも最低地部という限られた範囲の確かな特徴といつてよい。

## (2) 斧串状木製品

棒状で一部が加工され、また被熱した木製品は、1次調査で斎申として報告したものである。今回の調査ではさらに類例を増やすことになったが、平成17年に実施された県埋蔵文化財センターの調査(4次調査地点)では、類似する木製品が祭祀遺物として報告された。出土状況は、溝の底に斎申状の木製品が10数本重なり、その上を炭化物粒子を含む土壤と土器などが覆い、木製品の多くに端部の炭化が見られたという。報告者は、頂部を主頭状に削ることがないことや側面に切り掛けが施されない点など、いわゆる斎申とは、特徴を述にすることから斎申状木製品と呼称している。本報告でも加工痕をもつ棒状の木製品を斎申状木製品と呼び4次調査例に倣った。

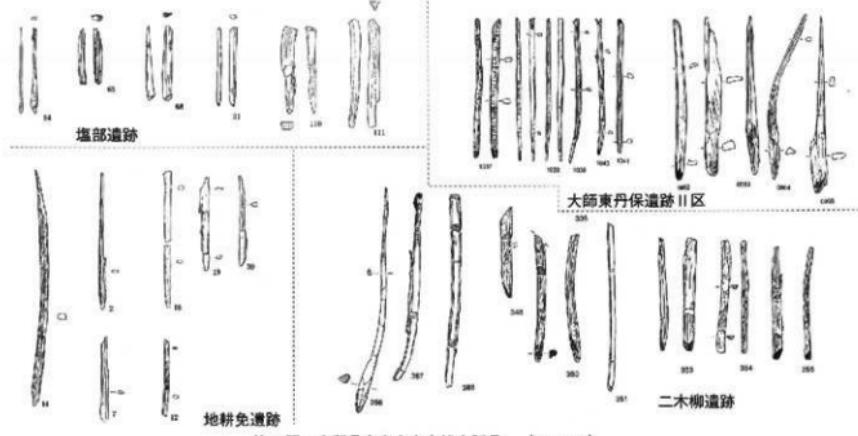
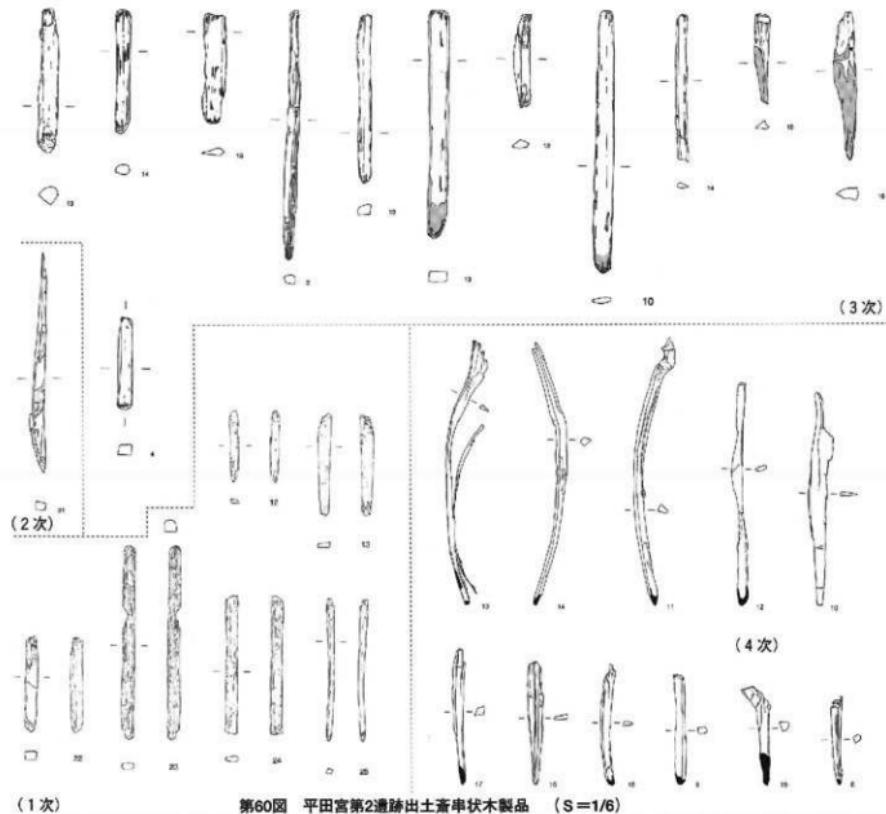
第60図は、1～3次調査出土斎申状木製品の内、出土地点が住居内と確實にわかっているもの及び4次調査祭祀遺構出土斎申状木製品である。住居内出土例と祭祀遺構出土例を比較すると、前者は概して直線的に削りだされ先端が丸みを帯びつつや尖る傾向があり、後者は粗く削りだされ自然面を多く残している。両者とも端部に被熱する例が多い特長は同様だが、細部はことなり若干形態差を有している。

第61図は、県内出土斎申状木製品である。形態は棒状・板状の材を粗く削いだもの(地耕免遺跡で小野正文氏が分類した剥ぎ板材を用いたC類、自然の丸材を用いて頂部を切断し、先端も杭状に尖らせたF類)が多く、平田宮第2遺跡4次調査祭祀遺構出土例はこれらと類似する。主頭状の端部をもつ典型的な斎申は、大坪遺跡、宮ノ前遺跡から数は少ないが出土している。

斎申状木製品の出土位置は塙部遺跡例が奈良・平安時代の旧河道、大師東丹保遺跡Ⅱ区出土例が鎌倉時代の水田面、地耕免遺跡例が平安時代後半の溝跡、二本柳遺跡例が古代末～中世前期・後期の水田面、大坪遺跡が古代旧河道、宮ノ前遺跡例が8～9世紀の溝跡であり、祭祀が行われたことが指摘されている。平田宮第2遺跡4次調査例を加えた7例はいずれも屋外の遺構からの出土となる。

これに対し平田宮第2遺跡1～3次調査出土の斎申状木製品は屋内からの出土である。その形態と端部を被熱する特徴から祭祀的性格を持っていた可能性は推測できるが、屋外出土斎申状木製品との間には形態差が存在している。

また、屋内出土斎申状木製品の被熱痕跡は、その出土位置から「カマド」＝「火」との結びつきが考えられ、「斎申立て神酒を奉る祝部がうずの玉かけ見れば」(『万葉集』巻13)、「庭中の阿須波の神に小柴さし吾は斎はむ帰り来までに」(『万葉集』巻20)等から推測される地面に刺して使用する「他地と聖地と区別するしし」(黒崎 1986)、としてのいわゆる斎申とは異なる性格が想定できる。端部の被熱が屋内外とともに多いという共通の特徴もあるが、本遺跡出土斎申状木製品は、屋内出土という他に類例のない特徴を重視し、屋外の斎申状木製品とは性格が異なるカマドに係わる遺物と



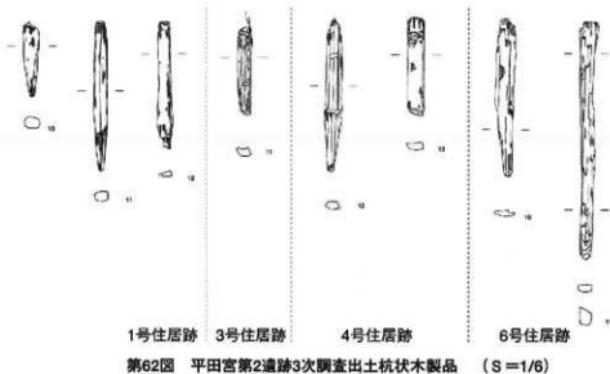
考えたい。

### (3) 杖状木製品

棒状で先端を削り鋭くしカマド以外の地面に突き刺してあるものを杖状木製品と呼ぶ。形態はカマド構築材や柵串状木製品とほとんど差異はないが、住居内でもカマド以外の床面や壁際に刺してある点が特徴である。

長さは最も長い6住-11で28.9cm、短いものでは1住-10で9.1cmであるが、床面上にはわずかに突出するのみである。カマドソシの延長上に複数本で位置する傾向があるため、住居内の区画を示すようなものもある。あるいは中世絵巻物に見られるような御幣を巡らし結界とした柵串のようなものかもしれないが、その用途は不明である。

カマド構築材の残骸の可能性もあるが、炭化物の堆積や、シルトの分布、遺物の集中などはまったく確認できない。いずれにしても住居内出土杖状木製品というこれまで例のない遺物であり出土状況のため、資料の増加をまちたい。



第62図 平田宮第2遺跡3次調査出土杖状木製品 (S=1/6)

### (4) 他の木製品

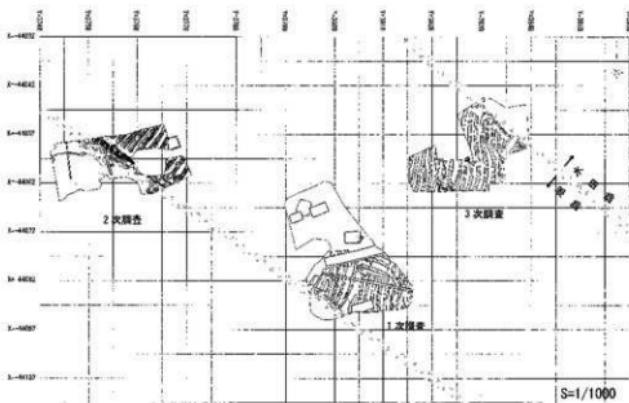
他の木製品として注目されるのは、3次調査6号住居跡から検出された柱材である。

柱材は3次調査6号住居跡のカマド手前約120cm、南壁から約60cm内側から検出された。プラン確認時点ではその存在はわからなかったが、住居完掘の状態で床面から約30cm出ている径15cm程度の木が検出された。断面観察からは柱材よりひとまわり大きな掘り方を確認でき、掘り方内は砂が充填されていたが、版築のような突き固めは見られなかった。

その形状と出土位置から柱材としたが、6号住居跡内で確認されたのは1本のみであった。最終的に、住居全体を床面から20cm程削下げたが柱材、掘り方等床面以下に柱に関係する遺構・遺物は確認できなかった。柱が1本のみだったとは考えにくく、床面下の調査で見落としたのか、掘り方をもたず床面上に直接柱を据えつけたのか想定できる可能性は少ない。

1次調査1号住居跡内の北壁際でも掘り方をもち版築状の土層堆積の直立した木材が検出され、柱材として報告されている。柱の形状としては3次調査柱材が底面を平に加工しているのに対し、1次調査例は锐利に加工されていた。住居内から柱材が検出されたのは2例であり、住居プランの確認ができた1～3次調査6軒の1/3である。木製品の出土状況から考えると柱材があったならば残っている可能性が高く、2軒の住居から1本ずつしか検出されない状況はそのまま当時の住居のあり方を示していると思われる。壁柱穴のようなものも住居周辺には確認できていない。

[第3面 煙・水田跡]



第63図 1~3次調査 第3面煙跡合成図

2次調査区で烟跡の西端を、3次調査区で東端を検出し、幅約50mで南東から北西方向に帯状に烟跡がのびていることを確認した。両端とも杭列が続いており杭列の外側は、西側で遺構がまったく確認されなくなり、東側は水田跡が広がっていた。

2次調査区で検出された杭列の西側には、歟が約2mという中途半端な長さで残る特異な状況が見られた。この短い歟は地震の影響と思われる地割れにより、水平方向にずれたり、上下に段差が生じたりするなど大きな被災を受けている。地震により耕作不能となった歟が放棄され、耕作可能な歟との間に境界と土留めを兼ねた杭列が設けられた結果と考えられる。

3次調査区は調査区東端で水田へと変化しており、上窓遺跡の第3水田面へとつながっていく。3次調査区の水田跡は烟跡とほとんど標高差がなく、違和感があったが、視野を上窓跡まで広げて比較してみると、やはり水田跡の広がる上窓跡2次調査区で約50cmの差があり、さらに1次調査区とは約1mの標高差があった。少しでも高い土地に烟を、低い土地には水田を配したことがわかる。住居跡が検出されるのも烟が広がる範囲に限られており、土地の高低差が当時の人々の居住地選定に大きな意味を持っていたことを示している。

烟跡の東西の境界に打たれた杭列は、特定の樹種に特化する傾向にはないが、杭列の中に木をはった状態の木が間隔をもって植えられていたことが明らかとなった。1次調査では2.7m離れて2本の木が樹立しており、2次調査1本、3次調査2本（1本は烟の中）が検出されている。限られた範囲の調査でこれだけ木をはった状態の木が検出されるということは2.7m以上の間隔で植栽が広く行われていたことが予想される。

樹種については1次調査検出例がクワ属、3次調査検出例がヤナギ属とクワ属であった。烟の境界杭の中に1本ずつある程度の間隔をもって木をはっていたという検出状況から、人手による計画的な植栽が行われていたことは確かである。

(井戸跡)

3次調査煙上中から検出された井戸跡は、畑耕作以前のものであることが土層堆積状況の観察から明らかとなった。1次調査検出の烟跡には多量の土器が含まれていたことが報告されており、3次調

査畠跡でも同様であった。畑耕作以前に集落が存在した可能性を1次調査報告書で指摘したが、井戸跡はその集落に伴うものと思われる。

なお、平成19年12月～平成20年1月に実施された上庭遺跡試掘調査では10世紀前半の畠跡中から住居跡が検出されており、畑耕作以前に集落が存在していたことが確実となっている。

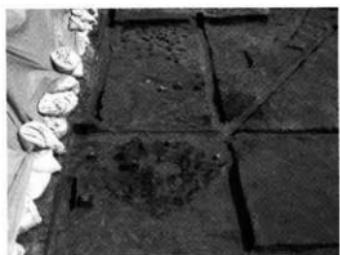
[引用・参考文献]

- |          |               |                             |
|----------|---------------|-----------------------------|
| 山梨県教育委員会 | 「地耕面遺跡」       | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第73集 1992  |
| 山梨県教育委員会 | 「塙部遺跡」        | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第123集 1996 |
| 山梨県教育委員会 | 「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」 | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 1997 |
| 山梨県教育委員会 | 「二本柳遺跡」       | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183集 2000 |
| 山梨県教育委員会 | 「平田宮第2遺跡」     | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集 2007 |
| 山梨県教育委員会 | 「小井川遺跡Ⅲ」      | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第255集 2008 |
| 玉穂町教育委員会 | 「上庭遺跡（2次）」    | 玉穂町埋蔵文化財調査報告書第2集 2005       |
| 玉穂町教育委員会 | 「平田宮第2遺跡」     | 玉穂町埋蔵文化財調査報告書第3集 2006       |
| 黒崎直      | 「斎中考」         | 『日本考古学論集』 3 1986            |
| 網倉邦生     | 「斎串状木製品の検討」   | 『山梨県考古学協会誌』第17号 2007        |
| 「萬葉集」 3  | 「新日本古典文学大系」 3 | 2002                        |
| 「萬葉集」 4  | 「新日本古典文学大系」 4 | 2003                        |

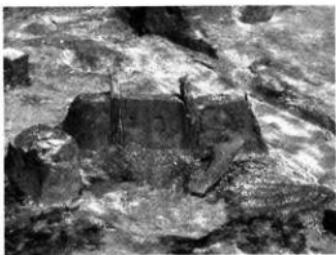
# 写 真 図 版



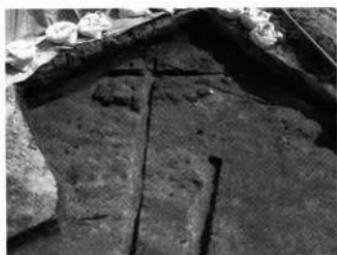
第2面調査区遠景（東から撮影）



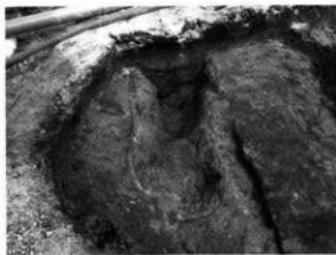
1号不明遺構



カマド構築材13、14、15



2号不明遺構



1号土坑

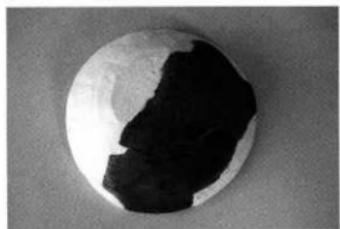


烟跡空撮



境界杭列及び畠

写真図版 3



No. 2



No. 3



No. 8



No. 9



カマド構築材No.13



カマド構築材No.14

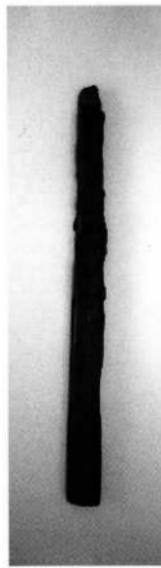
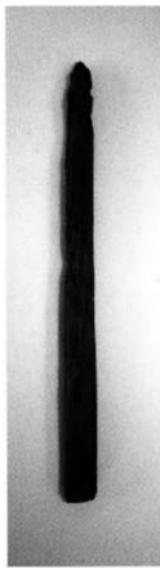


カマド構築材No.15



カマド構築材No.16

写真図版 4

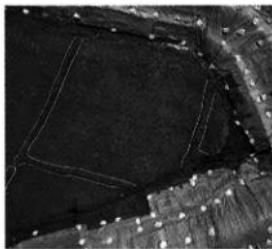




第1面調査区遠景（東から撮影）



第1面水田跡空撮



第1面水田跡空撮



水口



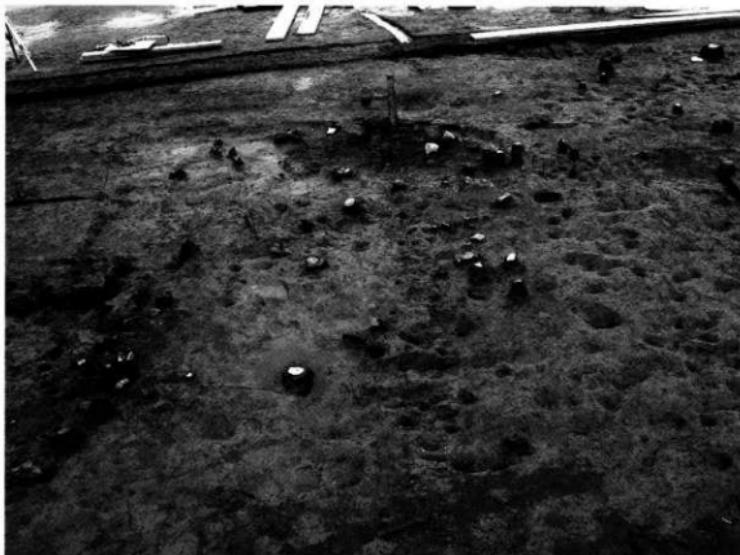
作業風景



第3面調査区遠景



第3面調査区遠景（西から撮影）



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡カマド



1号住居跡カマドソデ



1号住居跡カマド



1号住居跡カマド構築材出土状況（1）



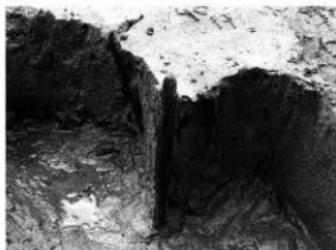
1号住居跡カマド構築材断ち割り状況（1）



1号住居跡カマド構築材断ち割り状況（2）



1号住居跡杭状木製品（1）



1号住居跡杭状木製品（2）



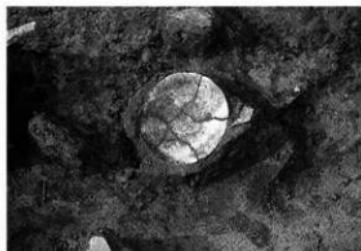
1号住居跡木製品（No.19）



1号住居跡木製品（No.20）



1号住居跡木製品（No.21）



1号住居跡遺物出土状況（No.5）



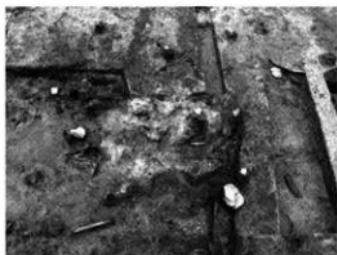
2号住居跡遺物出土状況



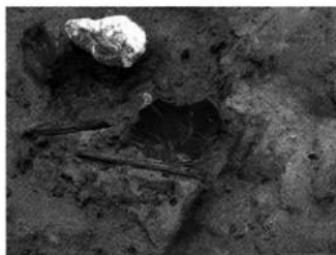
2号住居跡カマド



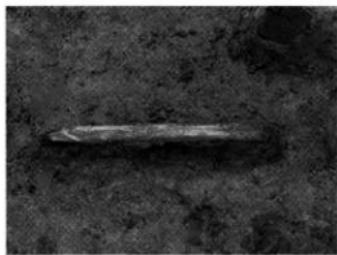
3号住居跡遺物出土状況



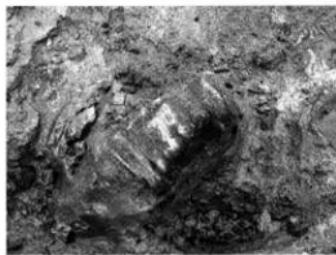
3号住居跡カマド遺物出土状況



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡薪串状木製品（No.13）



3号住居跡木製品（No.14）



3号住居跡完掘



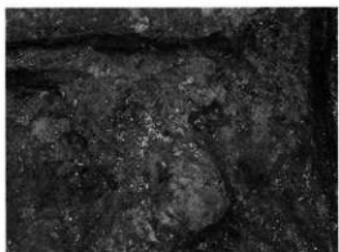
3号住居跡カマド



3号住居跡カマド構築材（1）



3号住居跡カマド構築材（2）



3号住居跡カマド左ソデ



3号住居跡カマド



3号住居跡カマド断ち削り



3号住居跡カマド構築材出土状況



3号住居跡カマド構築材左ソテ（1）



3号住居跡カマド構築材右ソテ（1）



3号住居跡カマド構築材左ソテ（2）



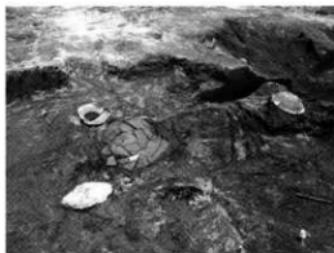
3号住居跡カマド構築材右ソテ（2）



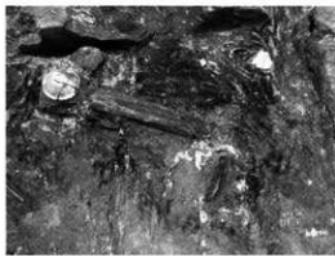
4号住居跡遺物出土状況



4号住居跡カマド周辺



4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（1）



4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（2）



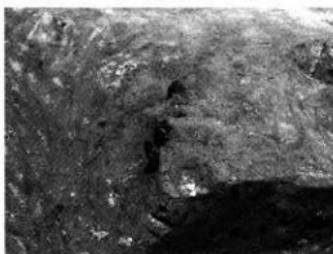
4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（3）



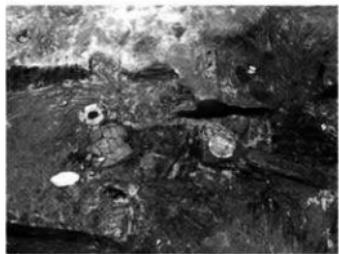
4号住居跡カマド遺物出土状況



4号住居跡カマド構築材左ソテ出土状況



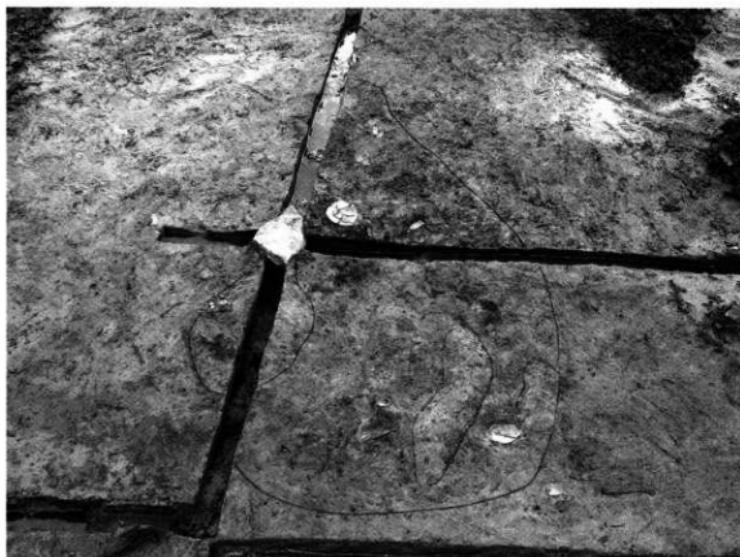
4号住居跡カマド構築材右ソテ出土状況



4号住居跡遺物出土状況（1）



4号住居跡遺物出土状況（2）



5号住居跡遺構検出状況（1）



5号住居跡遺構検出状況（2）



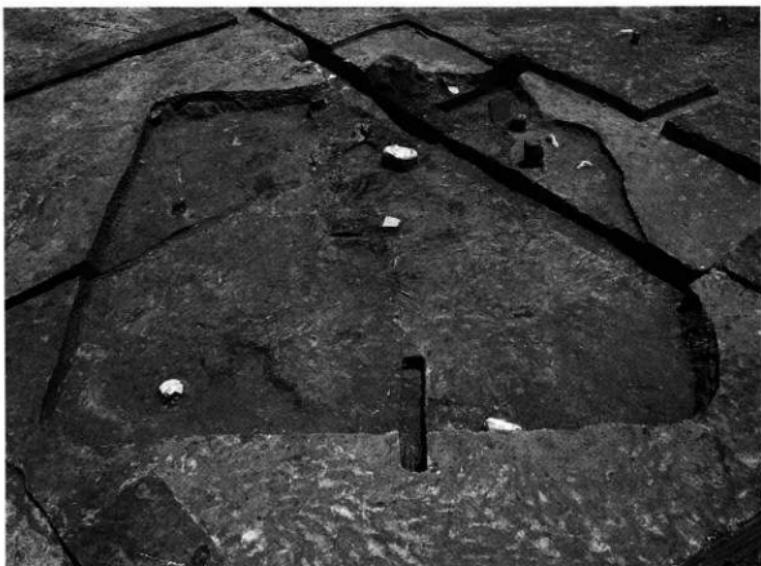
5号住居跡カマド構築材検出状況



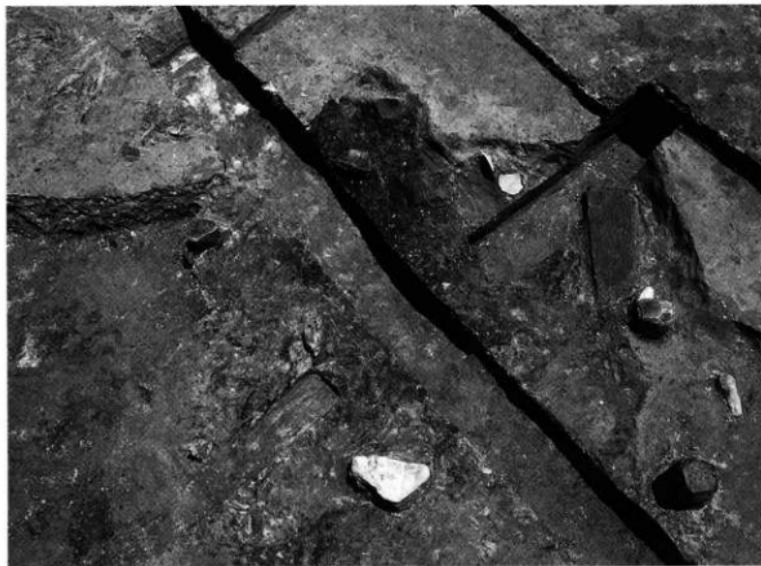
5号住居跡



5号住居跡遺物出土状況（No.1）



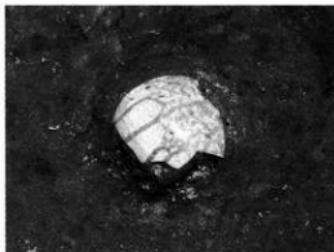
6号住居跡遺物出土状況



6号住居跡カマド



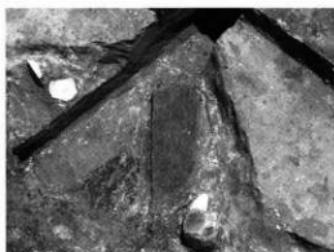
6号住居跡遺物出土状況



6号住居跡遺物出土状況 (No. 9)



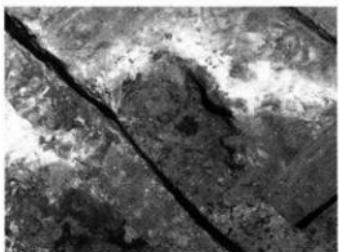
6号住居跡杭状木製品出土状況



6号住居跡木製品出土状況 (No.13)



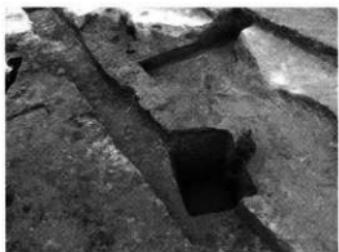
6号住居跡完掘



6号住居跡カマド



6号住居跡柱材出土状況



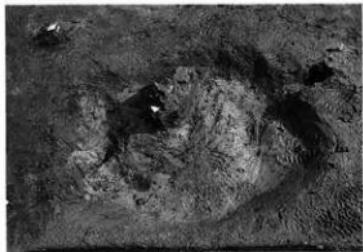
6号住居跡柱材断ち割り（1）



6号住居跡柱材断ち割り（2）



6号住居跡柱材断ち割り（3）



1号土坑完掘



2号土坑遺物出土状況



井戸跡（1）



井戸跡（2）



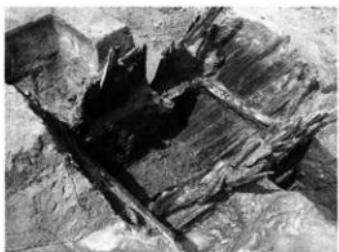
井戸跡（3）



井戸跡（4）



井戸跡（5）



井戸跡（6）



井戸跡（7）



井戸跡（8）



井戸跡 (9)



井戸跡 (10)



井戸跡 (11)



井戸跡 (12)



井戸跡 (13)



井戸跡 (14)



井戸跡 (15)



井戸跡 (16)



第3面 水田跡、畑跡境



畠跡畠



畠・畠境界自然木 (No.12)



畠・水田境界杭断ち削り (1)



畠・水田境界杭断ち削り (2)



1号住居跡No.1



1号住居跡No.2



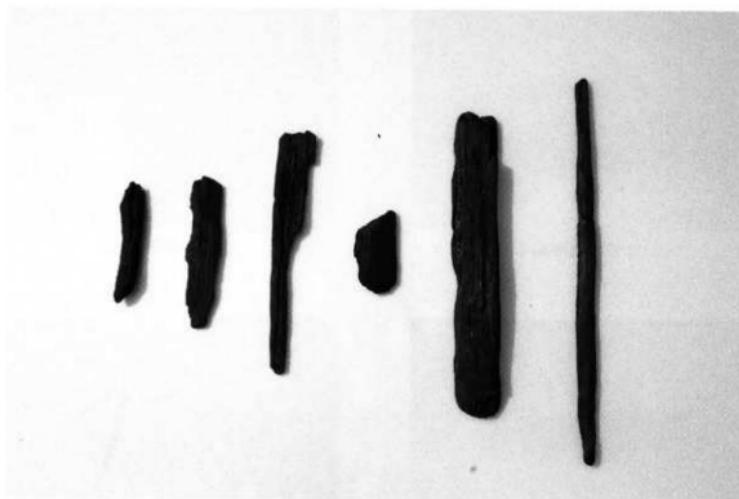
1号住居跡No.4



1号住居跡No.5



1号住居跡出土木製品



2号住居跡出土木製品



3号住居跡木製品



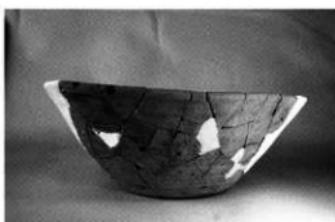
4号住居跡No. 1



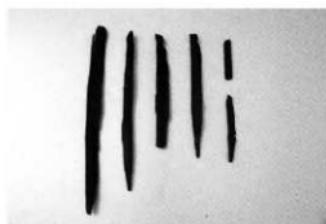
4号住居跡No. 2



4号住居跡No. 4



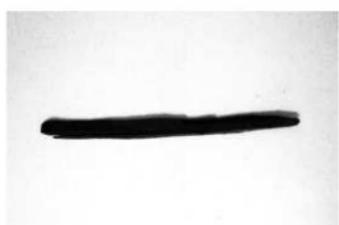
4号住居跡No. 5



4号住居跡カマド構築材



4号住居跡出土木製品



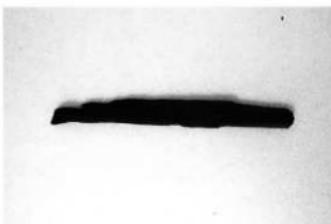
4号住居跡カマド構築材No. 7



4号住居跡カマド構築材No. 7先端



4号住居跡カマド構築材No.8



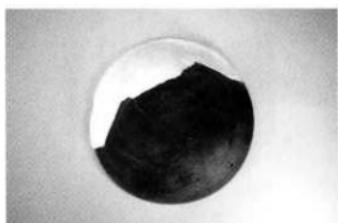
4号住居跡カマド構築材No.9



4号住居跡出土木製品No.11



4号住居跡出土木製品No.21



5号住居跡No.1



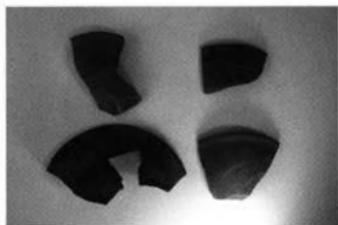
5号住居跡カマド構築材No.3



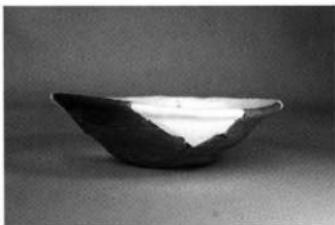
5号住居跡窓串状木製品No.4



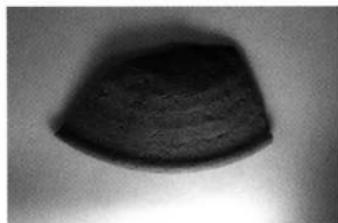
5号住居跡出土木製品No.5



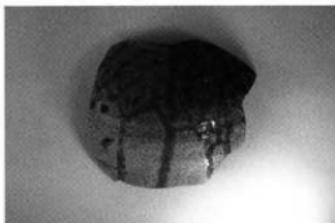
6号住居跡出土遺物No.1～4



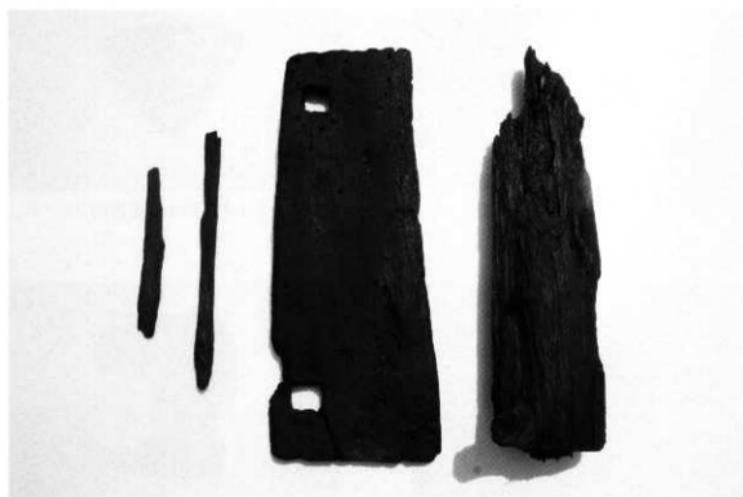
6号住居跡出土遺物No.5



6号住居跡出土遺物No.6



6号住居跡出土遺物No.9



6号住居跡出土木製品



6号住居跡出土木製品No13 (1)



6号住居跡出土木製品No13 (2)



6号住居跡出土木製品No14 (1)



6号住居跡出土木製品No14 (2)



7号住居跡出土遺物No 1



7号住居跡出土遺物No 2



7号住居跡出土遺物No 3



7号住居跡出土遺物No 5



井戸材Na14 (1)



井戸材Na14 (2)



井戸材Na15 (1)



井戸材Na15 (2)



井戸材Na16 (1)



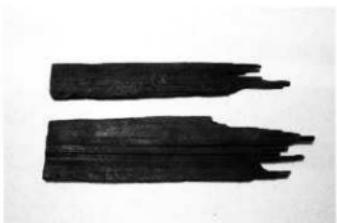
井戸材Na16 (2)



井戸材Na16 (3)



井戸材Na16 (4)



井戸材No19（上）、21（下）



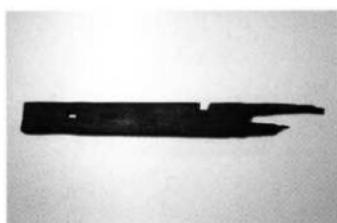
井戸材No30（上）、31（下）



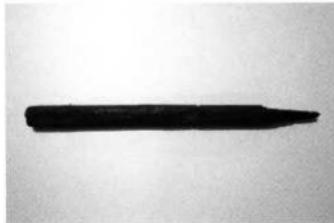
井戸材No31（1）



井戸材No31（2）



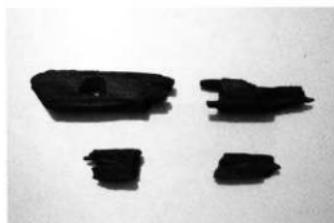
井戸材No28



井戸材No34



井戸材No35



井戸材No36

## 報告書抄録

フリガナ	ヒラタミヤダイ 2 イセキ (2・3 次)
書名	平田宮第2遺跡(2・3次)
副書名	新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	中央市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	今村直樹
発行者	中央市教育委員会・山梨県新環状・西関東道路建設事務所
編集機関	中央市教育委員会
所在地	山梨県中央市臼井阿原301-1
発行日	2008年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
平田宮第2遺跡(2次)	山梨県中央市下河東	19214	43	35°36'10"	138°32'29"	2008年3月1日～2008年3月30日	900m <sup>2</sup>	新山梨環状道路建設
平田宮第2遺跡(3次)	山梨県中央市下河東			35°36'09"	138°32'32"	2008年3月1日～2008年3月30日	1,200m <sup>2</sup>	

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田宮第2遺跡(2次)	田畠、集落	平安～鎌倉	住居跡、畑跡	土師器、灰釉陶器、木製品	
平田宮第2遺跡(3次)	田畠、集落	平安～鎌倉	水田跡、住居跡、畑跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、木製品	住居内出土木製品

**中央市埋蔵文化財調査報告書 第1集**

山梨県中央市

**平田宮第2遺跡(2・3次調査)**

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行日 2008年3月31日

編集 中央市教育委員会  
発行 中央市教育委員会  
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

〒409-3892 山梨県中央市臼井阿原301-1

TEL 055-274-8522  
FAX 055-274-7132

印刷所 株式会社サンニチ印刷

